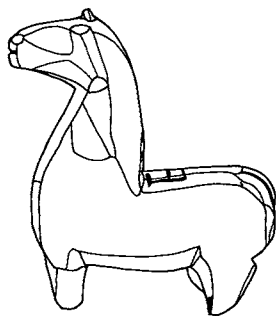


長野県埋蔵文化財センター一年報 6

1989



財団法人

長野県埋蔵文化財センター



1 下茂内遺跡B地区西区ブロック内出土の接合資料（縄文草創期、右側が槍先形尖頭器）



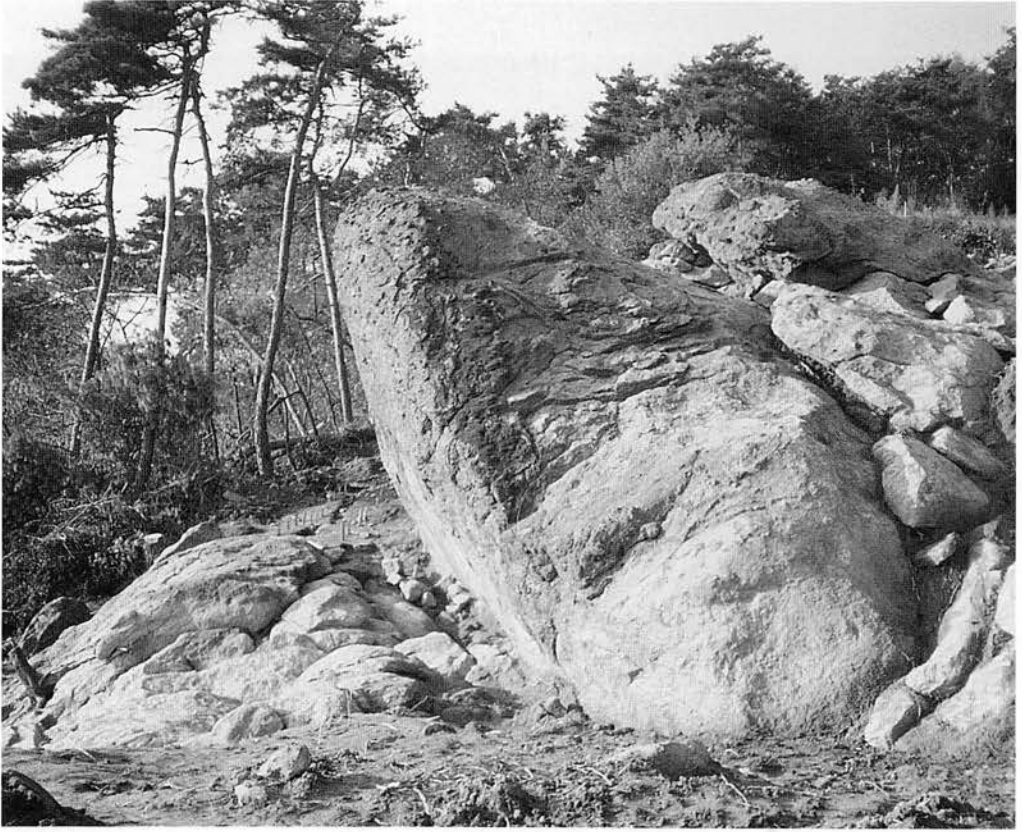
2 下茂内遺跡B地区西区ブロック内出土の接合資料（縄文草創期、中央が槍先形尖頭器）



3 北村遺跡の牙製装身具をもつ男性人骨（縄文後期）



4 北村遺跡の4体以上の集積葬（縄文後期）



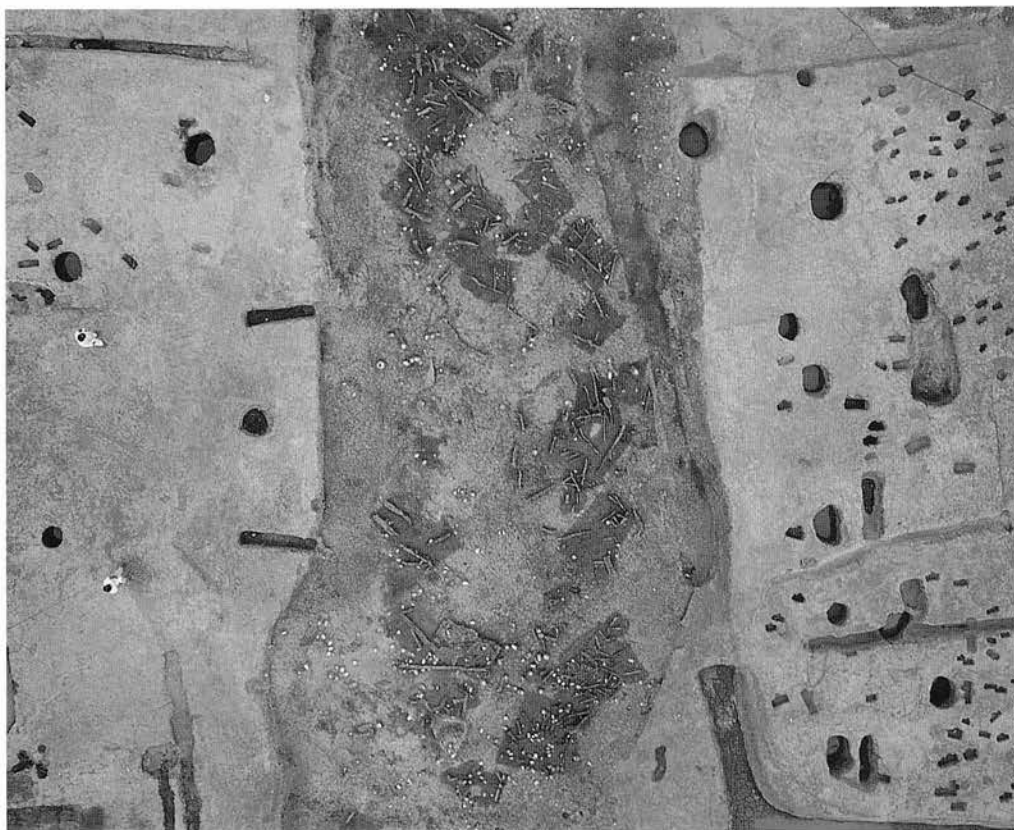
5 鶴萩七尋岩陰遺跡の全景 (弥生中期, 古墳後期)



6 篠ノ井遺跡群の環濠集落 (弥生後期)



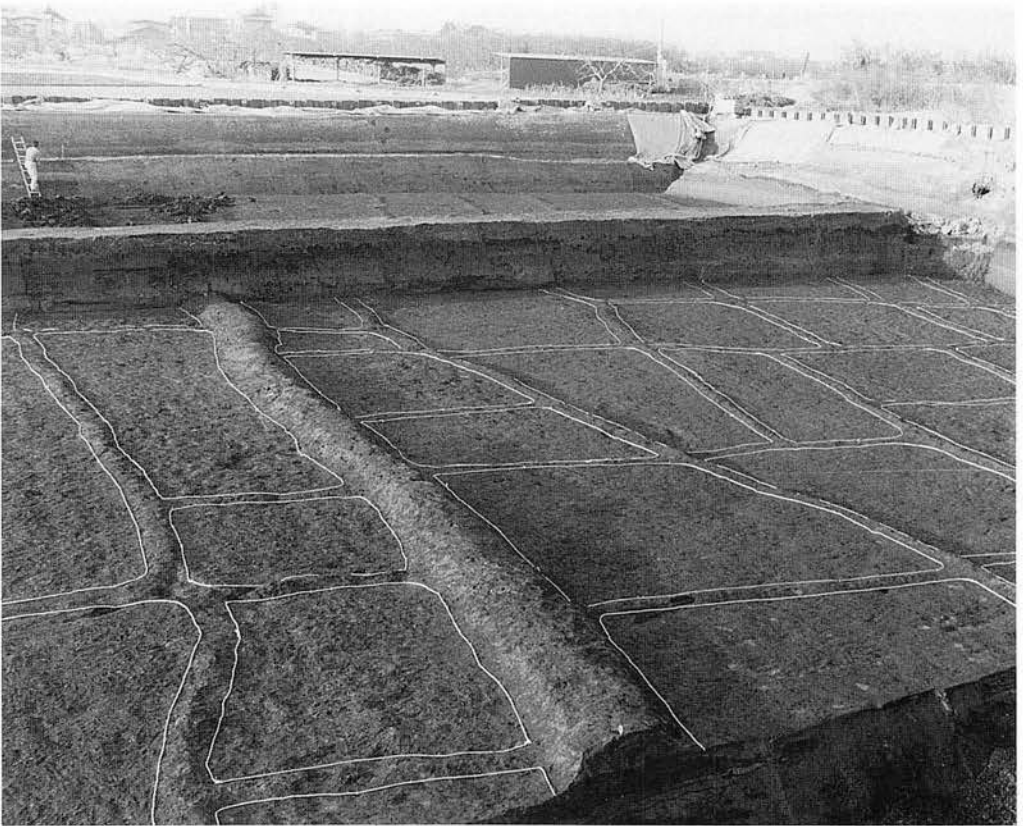
7 石川条里遺跡の祭祀遺構（古墳前期）



8 石川条里遺跡の祭祀遺構拡大



9 石川条里遺跡⑬区の溝 (弥生後期)



10 川田条里遺跡B区の畦畔 (古墳後期)

序

（財）長野県埋蔵文化財センターも、昭和57年発足以来、ここに8年目を迎えました。

本年度は、昨年度同様に「長野調査事務所」「松塩筑調査事務所」「佐久調査事務所」の3調査事務所ですべてをすすめてまいりました。

長野調査事務所では、昨年度に引き続き長野自動車道建設にかかわる東筑摩郡坂北村・更埴市桑原地区・長野市塩崎地区の7遺跡に加えて、あらたに上信越自動車道建設にかかわる長野市松代・若穂地区の6遺跡の計13遺跡の発掘調査、松塩筑調査事務所では、長野自動車道建設にかかわる松本市、東筑摩郡明科町の5遺跡の整理作業と報告書の出版、佐久調査事務所では上信越自動車道建設にかかわる佐久市の1遺跡の発掘作業と23遺跡の整理作業を実施し、多大の成果をおさめることができました。

個々の調査成果については、本文でふれますが、なかでも長野市塩崎地区所在の石川条里遺跡と同市若穂地区所在の川田条里遺跡では弥生時代から近世に至る水田跡の調査と多量に出土した木製農耕具などは、地域の歴史を解明するうえで貴重な発見といえるでしょう。また、長野市松代地区所在の松原遺跡や同市塩崎地区所在の篠ノ井遺跡群などの調査では弥生時代から古代にいたる集落跡を調査しました。善光寺平における大規模集落跡の調査例として、大いに学会からも注目されています。

川田条里遺跡など千曲川ぞいの大規模な低湿性遺跡の調査は、通常の遺跡の調査とことなり、矢板工事など事前の手だてが必要であり、あわせて何層にもわたる文化層を順次調査せざるをえず、今年度もまた調査期間が冬期におよびました。悪条件の中で発掘調査に従事した調査研究員・作業員みなさんに、敬意を表するとともに、厳しい工事工程の中で、こうした事態を理解し、御協力をいただいた、日本道路公団をはじめとする関係各位、地元のみなさんに深く感謝します。

発掘調査と同時に、普及・公開活動として、現地説明会、出土品展なども開催し、多数の方々の参観をいただきました。また、「長野県埋蔵文化財センター紀要」は第3号が発刊でき、軌道にのってまいりました。こうした文化財保護思想の啓蒙活動は、まだまだ十分とはいえませんが、今後とも努力をつづけていきたいと思えます。

刊行にあたり、御協力をいただいた関係各位に対し、深く感謝し、今後とも御支援と御協力をお願いいたします次第です。

平成2年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 樋口 太郎

目次

口絵

序

目次

I 発掘調査および整理作業の概要

1	長野自動車道関係	1
	〔長野調査事務所〕	
	(1)発掘調査の概要	1
	(2)整理作業の概要	2
	〔松塩筑事務所〕	
	(1)整理作業の概要	3
2	上信越自動車道関係	6
	〔佐久調査事務所〕	
	(1)発掘調査の概要	6
	(2)整理作業の概要	6
3	発掘調査遺跡	
	〈長野自動車道〉	
	(1)向六工遺跡	12
	(2)鳥林遺跡	14
	(3)小坂西遺跡	15
	(4)鶴萩七尋岩陰遺跡	17
	(5)鶴前遺跡	18
	(6)石川条里遺跡	20
	(7)篠ノ井遺跡群	33
	(8)松原遺跡	38
	(9)小滝遺跡	42
	(10)村東山手遺跡	44
	(11)大室古墳群	45
	(12)川田条里遺跡	46
	(13)榎田遺跡	52
	善光寺平南部の自然堤防と沖積地	55
	〈上信越自動車道〉	
	(1)下茂内遺跡	58

II 普及・研究活動

1	現地説明会	60
2	展示会	62
3	研究会・学習会	64
4	刊行物	66

III 機構・事業の概要

1	機構	67
	(1)組織	
	(2)事務所	
2	事業	67
	(1)理事会及び会計監査	
	(2)調査事業	
	(3)事業費	
	(4)普及活動	
	(5)職員の研修	
	平成元年度役員および職員	71

口絵

- | | |
|--------------------------|--------------------------|
| 1 下茂内遺跡B地区西区ブロック内出土の接合資料 | 2 下茂内遺跡B地区西区ブロック内出土の接合資料 |
| 3 北村遺跡の牙製装身具をもつ男性人骨 | 4 北村遺跡の4体以上の集積葬 |
| 5 鶴萩七尋岩陰遺跡の全景 | 6 篠ノ井遺跡群の環濠集落 |
| 7 石川条里遺跡の祭祀遺構 | 8 石川条里遺跡の祭祀遺構拡大 |
| 9 石川条里遺跡⑩区の溝 | 10 川田条里遺跡B区の畦畔 |

挿図目次

第1図	木器の洗浄作業	2
第2図	木器の実測作業	2
第3図	北村遺跡の人骨整理作業	3
第4図	北村遺跡の人骨クリーニング作業	3
第5図	北村遺跡の人骨出土状態図	4
第6図	下茂内遺跡B地区の縄文時代草創期遺物分布図	8
第7図	下茂内遺跡ブロック内出土の槍先形尖頭器実測図	9
第8図	長野自動車道・上信越自動車道にかかわる遺跡分布図	10
第9図	向六工遺跡の全景	12
第10図	向六工遺跡の遺構分布図	13
第11図	鳥林遺跡出土の押型文土器	14
第12図	鳥林遺跡の遺構配置図	14
第13図	小坂西遺跡西区の遺構分布図	15
第14図	小坂西遺跡の5号住居跡	16
第15図	小坂西遺跡の7号住居跡	16
第16図	小坂西遺跡東区の遺構分布図	16
第17図	鶴萩七尋岩陰遺跡の3号土壙人骨	17
第18図	鶴前遺跡の全景	18
第19図	鶴前遺跡の遺構分布図	19
第20図	石川条里遺跡の調査区範囲図	20・21
第21図	石川条里遺跡の土層柱状図からみた地形模式図	22
第22図	弥生時代後期の畦畔検出状況	24
第23図	畦畔掘り下げ、杭、横木出土状況	24
第24図	古墳時代の鳥形木製品出土状況	24
第25図	石川条里遺跡出土の木製品実測図	25
第26図	石川条里遺跡⑫区の平安時代水田畦畔	26
第27図	石川条里遺跡⑥区の微高地	27
第28図	石川条里遺跡⑥・⑦-西区の弥生後期平面図	27
第29図	石川条里遺跡⑥区微高地上の土壙	28

第30図	又鍬の出土状況	28
第31図	えぶりの出土状況	28
第32図	石川条里（生活域）の全体図	30
第33図	石川条里（生活域）出土の土師器・石釧・車輪石	31
第34図	篠ノ井遺跡群の発掘区	34
第35図	弥生時代中期の集石墓	34
第36図	古墳時代土壙墓出土の鏡・玉	35
第37図	古墳時代井戸出土の木製高杯・火錐臼	35
第38図	篠ノ井遺跡群の掘立柱建物跡	37
第39図	銅印拓本	37
第40図	篠ノ井遺跡群②－3・③区古代面の発掘状況	37
第41図	松原遺跡の発掘状況図	39
第42図	松原遺跡の土層図	40
第43図	松原遺跡①－2区の礫床木棺墓	40
第44図	小滝遺跡の平安時代以後遺構全体概略図	43
第45図	村東山手遺跡の遺構配置	44
第46図	弥生時代の土坑墓	44
第47図	大室23号古墳の全景	45
第48図	長野市若穂の全景	46
第49図	川田条里遺跡の全体図および土層柱状図	47
第50図	弥生時代の水路	48
第51図	古墳時代の水田跡	48
第52図	弥生時代の水田跡	48
第53図	C地区水田区画の変遷	49
第54図	川田条里遺跡出土の木製品実測図	50
第55図	榎田遺跡のトレンチ配置図	52
第56図	榎田遺跡の中世以降遺構配置図	53
第57図	榎田遺跡の古代遺構配置図	53
第58図	榎田遺跡出土の馬形木製品	53
第59図	榎田遺跡溝1出土の馬形木製品	54
第60図	善光寺平の地形分類と遺跡分布図	56
第61図	下茂内遺跡の全体図	59
第62図	現地説明会全景	60
第63図	出土品展「信濃路を掘る」	62
第64図	北村遺跡の出土品見学会	63
第1表	平成元年度長野自動車道および上信越道関連事業一覧	11

I 発掘作業および整理作業の概要

平成元年度は、昭和57年以来継続している長野自動車道と、昭和61年10月から開始された上信越自動車関連事業が中心であるが、長野自動車道およびそれに接続する上信越自動車道が善光寺平で建設にするにともない、長野調査事務所は発掘調査、松塩筑・佐久調査事務所は整理作業が主体であった。

1. 長野自動車道関係

〔長野調査事務所〕

(1) 発掘調査の概要

調査区域 東筑摩郡坂北村・長野市・更埴市

調査遺跡数 13遺跡（坂北村向六工，更埴市鳥林・小坂西，長野市鶴萩七尋岩陰・鶴前・石川条里・篠ノ井・松原・小滝・村東山手・大室古墳群・川田条里・榎田遺跡，ただし，大室古墳群は明治大学考古学研究室へ調査委託）

調査総表面積（総延面積）147,250（292,400）㎡，向六工11,700，鳥林4,000，小坂西4,000，鶴萩七尋岩陰250，鶴前5,400，石川条里35,000（70,000），篠ノ井15,900（39,000），松原9,200（45,600），小滝6,000，大室古墳群600，村東山手2,500，川田条里49,700（99,350），榎田3,000（4,000）

調査期間 平成元年4月10日～平成2年2月15日

元年度当初計画では調査対象遺跡数は坂北村1，更埴市4，長野市11の計16遺跡であったが，うち昨年度から継続した石川条里遺跡など2遺跡を含めて，今年度調査を実施した遺跡は13遺跡にとどまった。これは用地買収など残件処理の遅れ，予想をうわまわる遺跡規模の面的拡大や遺構密集遺跡の存在，公団の工事工程との整合，さらに発掘協力者（作業員）の募集が，当地域の労働稼働率の限界の中で思うにまかせず，調査の進行上に大きな影響を与えたからである。とくに篠ノ井遺跡群では未収去物件が多く，このため分割発掘を余儀なくされ，松原遺跡では地下2mにおよぶ範囲に3面にわたる遺構面や極めて規模の大きい人工施設のある河川跡の存在など，多数の遺構数とともに調査を難行させた。また，川田条里遺跡では当初の調査面積が倍増したうえに，地下5m余におよぶ重層的な各時代の水田跡の検出は，軟弱地盤であることも加わって予想をうわまわる困難な調査であった。総じて，沖積地における遺跡は，遺跡面積が大きくなればなるほど地形の変化が著しく，現地表からの判断は極めて困難である。石川条里，篠ノ井，松原，川田条里，榎田の大規模遺跡はまさに典型例である。加えて，遺構密度の高い面が数層にわたる場合が一般であり，このため遺構検出の困難さも加わって，どうしても一定の調査期間の保障が必要となるのである。さらに，石川条里や川田条里遺跡にみられる低湿性遺跡の調査では，昨年を経験をふまえて，矢板工事等を事前に実施しながらおこなったが，発生土が軟弱のうえ多量であること，それに土質改良を加えての道路の本体工事をおこなうという工事工程も加わり，調査の進行上に影響を与えた。沖積地での大規模遺跡の調

査には、事前のきめ細かな試掘調査が必要なことをあらためて痛感させられた。

本年度調査した遺跡は向六工遺跡を除き善光寺平にあり、いくつかの共通性がある。それは基本的には遺跡の立地状況の差によるものである。そのひとつは山麓ぞいにある遺跡で、小坂西・鳥林・鶴萩七尋岩陰・鶴前や村東山手・大室古墳群・小滝遺跡がある。このうち、鶴萩七尋岩陰や大室古墳群は墳墓遺跡であり、小滝遺跡は立地状況がやや異なり中世の遺跡であるが、ほかは縄文早期から中近世におよぶ中小規模の集落遺跡である。向六工遺跡もこの中に含めてよいであろう。いっぽう、千曲川ぞいの沖積地には微高地と後背湿地上に立地する遺跡がある。前者には篠ノ井・松原・榎田遺跡などがあり、縄文晩期終末あるいは弥生時代以来中近世におよぶ大規模な集落遺跡である。後者には石川条里や川田条里遺跡があり、主として弥生時代以来今日に至る水田跡の遺跡である。

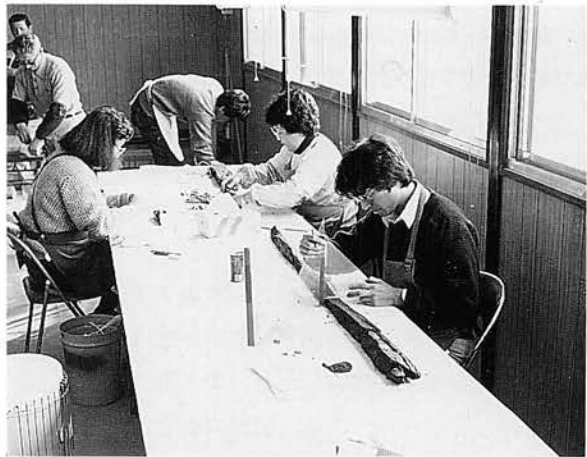
今年度調査によって善光寺平における居住域・生産域・墓域など、この地域の人間と自然とがかかわる地域史を解明するいくつかの好資料がえられたことを特に強調しておきたい。

(2) 整理作業の概要

発掘調査の終了後、ただちに整理作業を2月末まで実施した。内容は記録類の整備および遺物の洗浄と注記等である。



第1図 木器の洗浄作業



第2図 木器の実測作業

〔松塩筑調査事務所〕

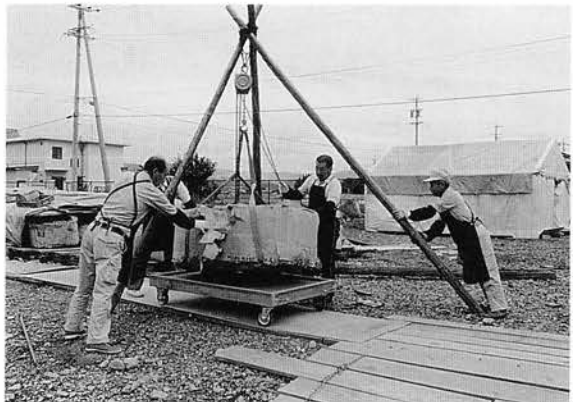
(1) 整理作業の概要

ア 松本市内分遺跡の整理

昨年度、神戸・上二子・中二子遺跡（松本市内その2）、南中・北中・北方・上手木戸遺跡（松本市内その7、豊科町内）の2冊の報告書を刊行した。本年度は、下神遺跡（松本市内その3）、南栗遺跡（同4）、北栗遺跡（同5）、三の宮遺跡（同6）、総論編（同1）の計5冊を発刊した。当初からの方針である「同一観点で遺跡群を見る」ことを主眼として整理作業と報告書作成は進められ、ほぼその目的は達せられたと考えている。

整理作業は、発掘調査と並行しておこなわれた冬期間の現場実測図整理も含め、昭和59年度末から始められ、本格的な整理作業には昭和62年度から着手した。全整理期間は遺跡による差もあるがおよそ51か月を費やし、昭和62年度から今年度までの整理作業員数は延8,100人余、実測遺物数は、古代土器約13,000個体、中・近世土器・陶磁器約600個体、金属・石・土製品約830個体を数える。また、撮影された遺物は4,800カット余、報告書の総頁数は約3,500頁である。

「同一観点で遺跡群を見る」ことから、遺構別、遺物別に担当者を決め分類等の基準づくりやまとめを分担し、さらに報告書別の分担もしたことから、一人の調査研究員の負担は極めて大きく、今後、整理作業・報告書刊行の体制づくりにおいて考えなければならないことのひとつであり、また、遺物復元や実測、トレース等専門的な技術をもった整理作業員をいかに確保するかも整理作業を左右する重要な点となろう。

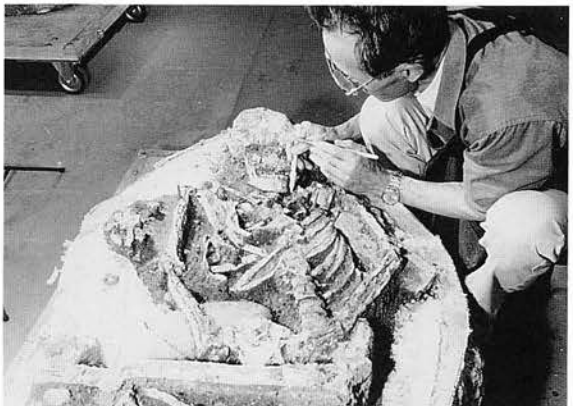


第3図 北村遺跡の人骨整理作業

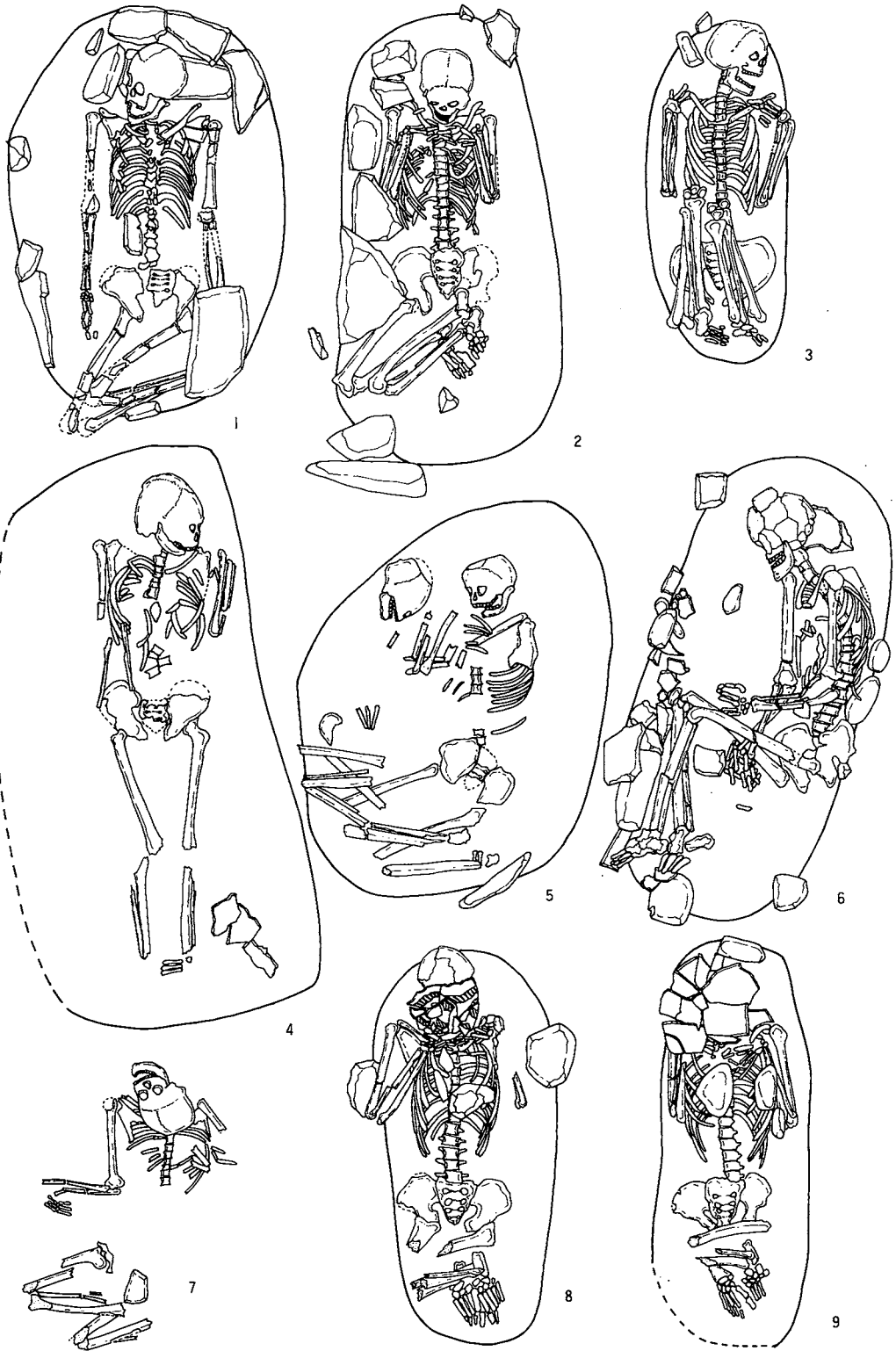
イ 明科町内の整理

北村遺跡の整理作業1年次にあたる本年度は、遺跡から切り離してきた人骨105個体分のクリーニング・撮影・実測・取り上げを中心におこなった。

既報のとおり、人骨は土からの露出を極力ひかえ、発泡ウレタンで保護して取り上げ保管してきた。作業の前段に、資料をチェーンブロックで特注の台車に搭載し（第3図）、上部のウレタンを切断して土および骨を約1か月間乾燥させた。クリーニングには、彫刻刀・解剖用



第4図 北村遺跡の人骨クリーニング作業



第5図 北村遺跡の人骨出土状態図（土坑上場線は省く）

0 50cm

メス・竹串等を用い、整理補助員2名で3～4日を要した(第4図)。その際、人骨の形質鑑定に比較的影響の少ない肋骨から分析用の試料を採取するとともに、適宜セメダインを浸透させて骨を固めた。続いて、撮影・実測をそれぞれ上面と側面からおこない、細部の計測と観察注記後、骨の各部位ごと取り上げをおこなった。

一連の作業の結果、墓坑にかかわる人骨は314体を数えるにいたった。なかでも、ほぼ全身の骨体が観察しうる資料は133体ある。

姿勢別にみると仰臥屈葬が103体と圧倒的多数を占め、側臥屈葬8体、仰臥伸展葬4体、伏臥屈葬3体と続く。仰臥屈葬の資料(第5図-1～3)についていえば、顔の向きがほぼ正面を向くものは約7割あり、確実に右を向くものは13体、左を向くものは9体確認された。上肢の形でみると、両腕をまっすぐ伸ばし体側につけるものが23体、両肘で強く曲げ手先を肩につけているもの18体、左右どちらかが別の部位に手先をおいているものも加えると、全体で約6割がこれらの類型に含まれる。下肢は、膝を曲げて立てるか左右どちらかに倒しているものがほとんどで、一般にいわれる屈葬のように胸部に膝がつくほど強く曲げているものは少ない。側臥屈葬(第4図-6)は、左右4体ずつ認められた。伏臥屈葬(第5図-7)は、3体のうち2体が合葬資料中のものであり、姿勢の特異性と合わせて注目できる。さらに、伸展葬(第5図-4)4体中2体の男性個体がイノシシの牙製装身具を着けており、これについても集団内の特異性を指摘できる(口絵3)。

葬法別に見ると単独直葬が121例あり、本遺跡にあっては極めてポピュラーなスタイルといえる。合葬(第5図-5)は4例でいずれも2体同時埋葬と思われる。ただし、一对の個体双方の埋葬姿勢や頭位が必ずしもそろっているわけではなく、AとBが頭位を180度違えるものや、Aが伏臥屈葬でBが側臥屈葬という例もみられる。再葬を思わせる集積葬は5例で、2体分のもの3例、3体分と4体分がそれぞれ1例ずつ確認された(口絵4)。骨各部位の配置には感覚的に規則性を認めることもできる。甕棺葬は3例で、うち1例は土器内に焼骨が充満していた。

墓壙内の施設として、底面石敷例や底面壁際配石例がみられたほか、頭部下に枕石をおいたものもわずかながらみられた。顔面に土器をのせた甕被(覆)葬(第5図-8～9)が19例あり、うち1例は二重に土器を被せてあった。

確実な副葬品としては、石棒・土偶・ミニチュア土器がともなう例を若干あげうるのみで、そのほかの遺物については混入の可能性もあるため断定できない。装身具は牙製のもの9例が確認された。

明年度以降は、人工遺物の整理をおこなう予定であり、この結果から時間軸のなかに個々の遺構・遺物を位置つけて集落の変遷をとらえる作業が、とりあえずの重要課題となる。続いて、各時期の集落内の様相を、個々の遺構・遺物の属性、被葬者にかかわる諸事象、それら相互の関連から導き出し、さらに、他集団との総合的な比較検討の中から北村集団の特性をひき出す方向で、今後の整理作業を継続していきたい。(平林 彰)

2. 上信越自動車道関係

〔佐久調査事務所〕

(1) 発掘調査の概要

調査区域 佐久市香坂東地
調査遺跡数 1 遺跡（下茂内遺跡）
調査総面積 1,200㎡
調査期間 平成元年4月10日～5月22日

本年度の当初計画では、調査対象遺跡は下茂内遺跡と西赤座遺跡の2遺跡であった。下茂内遺跡は、昨年度調査を終了したが一部が設計変更になり、追加契約で調査をおこなった。西赤座遺跡は、佐久インターチェンジの隣接地に建設されることになった管理用施設用地が新規契約となり調査対象となったが、用地買収が遅れ調査することができなかった。

(2) 整理作業の概要

昭和61年10月より昭和63年度にかけて群馬県境～佐久インターチェンジ間の11.9kmに所在する23か所の遺跡、調査対象面積255,500㎡にのぼる発掘調査がほぼ終了した。概要は岩村田地区内の平地では、縄文から中世にかけての集落跡、平根地区の平尾富士山麓には縄文・弥生・平安時代の小規模集落跡および古墳が、県境につづく香坂谷の山麓には、縄文草創期と思われる黒色緻密な安山岩を素材にした槍先形尖頭器の製作跡、縄文・平安を中心とした小規模集落跡が検出された。

本年度からは事務所が縮小され、報告書作成に向け本格的な整理作業が2年間の予定で開始した。刊行される報告書は下茂内遺跡（佐久市内その1）、下茂内遺跡を除く22遺跡（佐久市内その2）の2冊にまとめられる予定である。

ア 佐久市内その1

本年度は、槍先形尖頭器製作に深くかかわったと考えられるB地区について中心に進めてきた。その中で、調査時に座標処理した30,000点余の石器・剥片類について、従来のように、平面分布・垂直分布図の作成を始めたが、分布密度が高く、さらにはブロック形成時の地形が複雑であることから様々な角度からの作図および検討が必要になり、人手では、作図操作に限界があり、時間的にも困難であると判断し急拠コンピューターを導入した。実際、本遺跡の石器類の平面・垂直分布状況を検討するには、コンピューターの力なくしては、不可能に近いといっても過言ではないと実感している。

整理作業の内容は、コンピューターへの入力・出力を通してのブロック認定の作業、槍先形尖頭器の観察・実測、剥片（素材・調整）の観察・分類・計測・個体別分類と接合、および全地区から出土した土器の分類・接合、石器の分類等をおこなった。以下、整理の主体であったB地区について現段階で明らかになってきた概要を記す。

①層位とブロックの分布状況

ブロックの認定は、XIV層（降下軽石層）の上部及び下部に分かれて遺物の分布が認められた層的事実を念頭に置き、その分布状況（平面・垂直）から検討を重ねてきた。

その結果、XVI層上部（第I文化層）では、VI～X層中に分布し、散漫形および密集形のブロックが12か所、同下部（第II文化層）では、密集形のブロックを中心に28か所認められた（第6図）。しかし、IX層とXV層から検出されたブロックは、当時の河川縁辺部に位置することから、起伏のある地形であることをはじめとして、XIV層の堆積が良好でない地点でのブロックの上下関係も含めて、出土層位が違うものの分布に連続性が認められる問題があり、今後ブロックの分離統合に向けて、さらに検討を重ねなければならない。

② 槍先形尖頭器製作について

この問題については、多くの方々からご指導・ご教示をえて、原石→素材→調整剥片→槍先形尖頭器という流れの中で捉えて検討を進めている。

原石 ほぼ原石まで接合した6例、および中途の接合例と現場に残された原石の状況から、10～20cm程のものから40cmをこえるものまで幅広く使用されている。

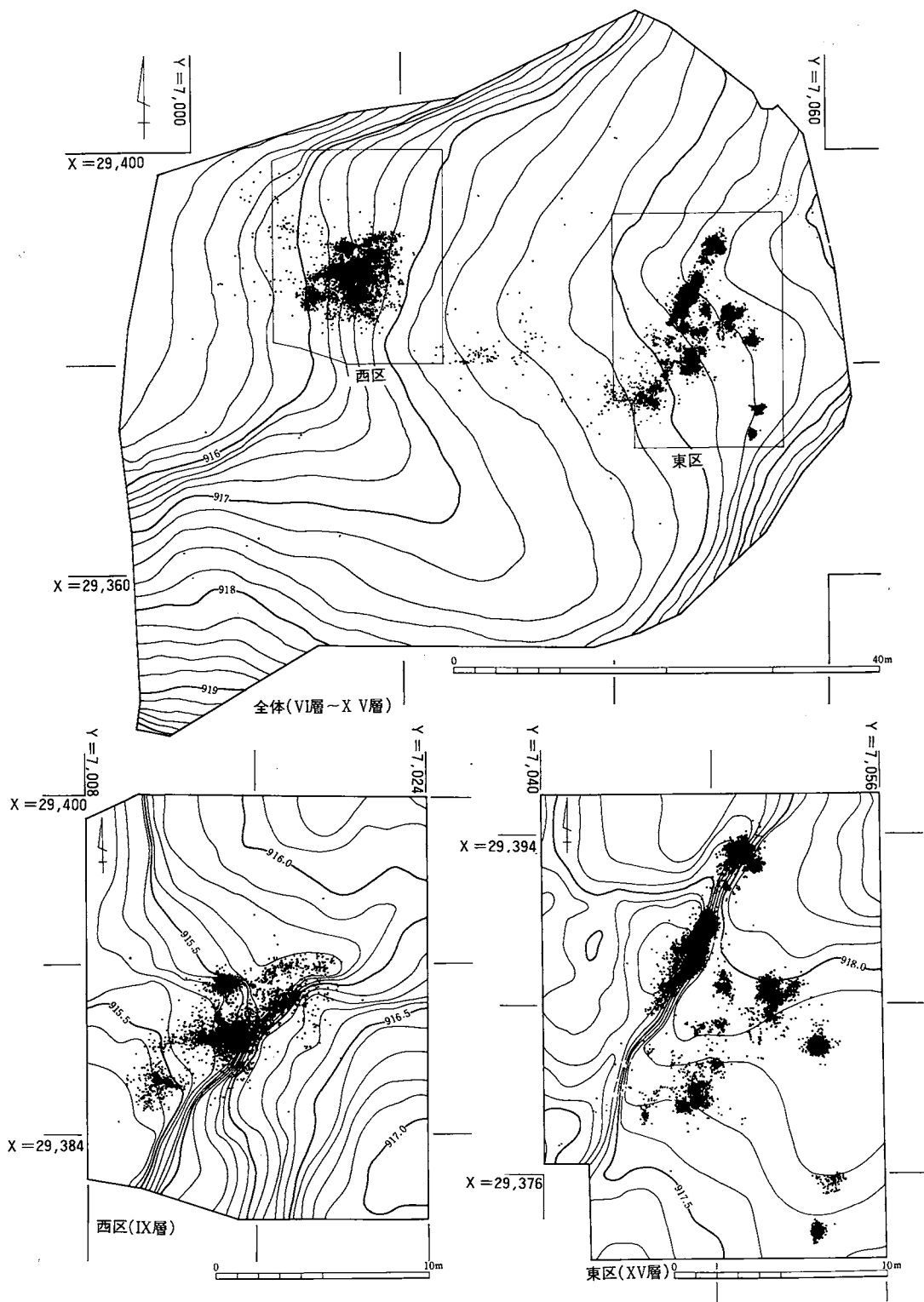
素材 接合例と槍先形尖頭器・素材の剥片の観察では、素材を得る方法に、4つの手段が想定される。その内容は、原石から連続的に縦長剥片を剥離、同様にして横長剥片を連続的に剥離、節理に沿って板状に分割、鋭角部分を巧みに利用し、部分を観察すれば縦長剥片、横長剥片、板状に様々な形状の素材の剥片を剥離する方法等である。その他に調整剥片に再加工を施し、槍先形尖頭器にするものも想定されるが、さらに検証が必要である。

調整剥片 出土量が最も多いこれらについては、素材から槍先形尖頭器になるまでの、どの段階に剥離されるのか、加工途中と思われる本体も含め三段階ぐらいに分けて検討している。しかし、石材がほとんど安山岩であるため、極めて特徴的なもの以外個別分類がかなり難しい。また、この剥片を使ってノッチ状のスクレイパーに使用しているものもある。

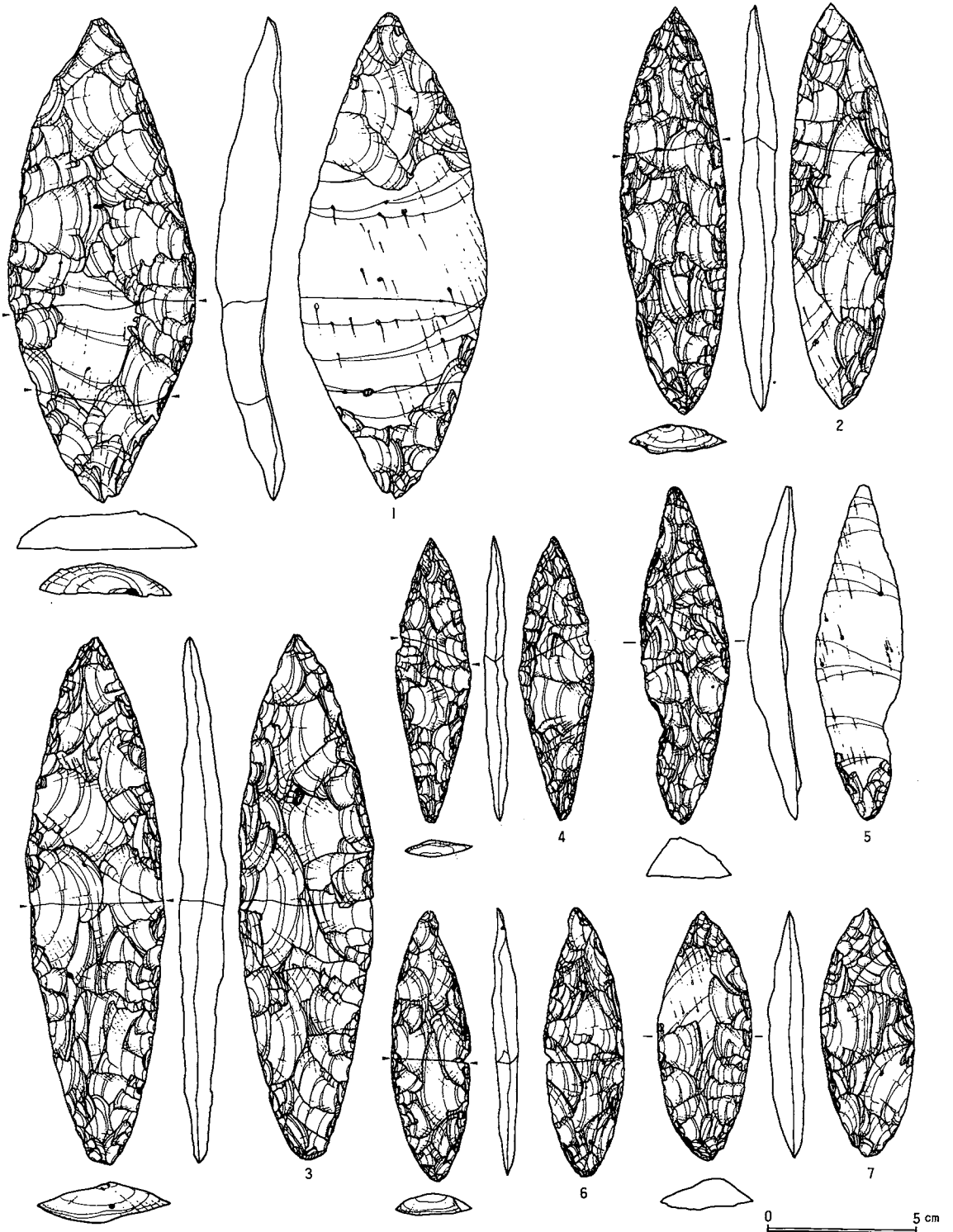
槍先形尖頭器 現在、完成品かそれに近いと考えているものは、両面加工、半両面加工、周縁加工の三大別されるが、ともに長幅比が4：1～3：1の細身の木葉形を呈している。層位とブロックの関係については、まだ検討をかさねなければいけない事が多いが、XIV層の降下によって埋没してしまったものが多いと思われるXIV層下部のブロックからは、両面加工のものが多く、ブロック形成時に関係の深かった河川の氾濫で埋没してしまった可能性も考えられるXIV層上部の一部のブロックからは、両面加工のほかに半両面加工のものもみられる。半両面加工のものの中には、両面加工への流れの中にあるものも想定されるため、調整剥片も含めて検討しているが、まだ結論は出ていない。詳細については、報告書において説明したい。

イ 佐久市内その2

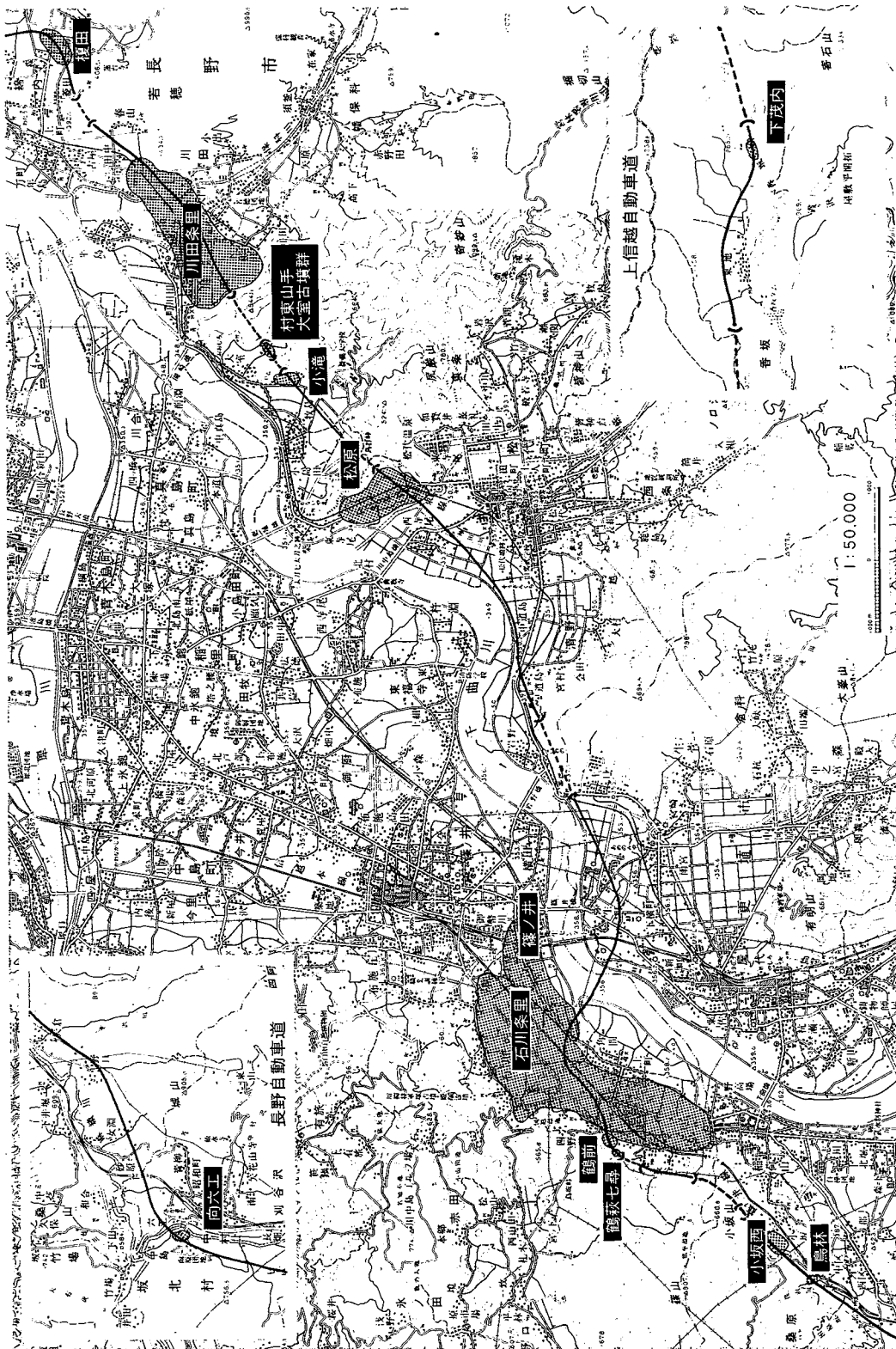
整理作業は、遺跡担当と時代別担当（遺物中心）の遺物担当併任による体制を組織した。年度当初は発掘記録の整備以外は未着手で、一部の遺物接合と遺物の記録化から開始された。今年度は遺物の図化・観察・計測・復元・保存処理・写真撮影などの作業が続けられているが、そのうち6遺跡が図版トレース・原稿執筆へと進行している。また、本年度発掘調査できず来年度調査となる西赤座遺跡も本報告書に掲載する予定である。



第6図 下茂内遺跡B地区の縄文時代草創期遺物分布図



第7図 下茂内遺跡ブロック内出土の槍先形尖頭器実測図(1~3, 5~7安山岩, 4チャート)



第8図 長野自動車道・上信越自動車道にかかわる遺跡分布図

長野調査事務所 (1) 発掘作業

市町村	遺跡名	発掘調査面積		調査期間	調査日数	作業人数	発掘調査の状況
		調査対象面積	調査実施面積				
坂北	向六工	14,500	11,700	元. 4. 18~元. 9. 13	102	1,846	縄文~近世 住居跡22、獨立柱建物跡8、櫛列3、土坑800、その他32
	島林	4,000	4,000	元. 4. 10~元. 6. 8	36	615	縄文~平安 住居4、土坑2
	小坂西	4,000	4,000	元. 9. 18~元. 11. 4	39	601	縄文~中世 住居14、獨立柱建物2、溝3、土坑150
更埴	鶴萩七尋	250	250	元. 9. 11~元. 12. 22	34	170	弥生~近世 土坑3 (再築墓)、壘座1、堂跡1
	鶴萩前	11,300	5,400	元. 7. 24~元. 12. 22	75	2,102	縄文~中世 住居跡26、獨立柱建物跡6、土坑120、墓跡4、井戸跡1
長	石川桑里	70,000	35,000	元. 4. 13~元. 12. 22	546	11,095	弥生~近世 住居1、土坑97、溝87、井戸26、柱穴280、水田 面、杭列
	篠ノ井	18,600	15,900	元. 4. 13~2. 1. 12	354	9,143	縄文~中世 住居跡404、墓跡12、方形周溝墓4、井戸・坑893、溝96、その他385
野	松原	46,000	9,200	元. 4. 12~2. 2. 15	265	20,110	弥生~中世 住居跡397、礎床木棺墓29、獨立柱建物7、河川跡3、溝40、井戸・土坑多数
	小滝	8,000	6,000	元. 10. 9~元. 12. 27	70	1,493	平安~近世 住居6、土坑46、溝7、柱穴680
	大室古墳群	1,200	600	元. 9. 29~2. 3. 31	88	295	古墳3
	村裏山手	18,000	2,500	元. 9. 4~元. 12. 22	74	736	縄文~近世 住居1、溝2、墓3、配石
	川田桑里	104,960	49,700	元. 4. 28~元. 12. 27	353	10,186	縄文~近世 水田 面、溝、杭列
	榎田	31,800	3,000	元. 4. 17~元. 8. 12	95	1,762	弥生~近世 住居34、土坑800、溝15
	合計	332,610	147,250		2,131	60,154	

佐久調査事務所 (1) 発掘作業

市町村	遺跡名	発掘調査面積		調査期間	調査日数	作業人数	発掘調査の状況
		調査対象面積	調査実施面積				
佐久	下茂内	27,000	1,280	元. 4. 10~元. 5. 22	28	816	縄文~近世 住居1、土坑8、集石炉8、配石1、畑跡
	合計	27,000	1,280		28	816	

(2) 整理作業

市町村	遺跡	発掘調査面積	整理作業の状況
佐久市	木戸平A、吹村、上中原、鶴フネ、東林、西林、干草場、城の口、東株ぶた、西株ぶた、大星尻、丸山、丸山II、丸山古墳群、北山寺、腰巻、東毛坂、西赤坂、中久保田、枇杷坂、東大久保	227,300	遺物の整理、図表作成、遺構・遺物図版作成 遺跡、遺構、遺物の観察・検討、原稿執筆
佐久市	下茂内	28,200	遺物の整理、図表作成、原稿執筆
松塩城調査事務所	(1) 整理作業		
市町村	遺跡	発掘調査面積	整理作業の状況
松本市	下神、南栗、北栗、三の宮	172,230	「調査報告書4」(総論)、「調査報告書6」(下神)、「調査報告書7」(南栗)、「調査報告書8」(北栗)、「調査報告書9」(三の宮)
明科町	北村	15,677	諸記録の整備、遺物の注記
発掘調査合計		359,610	293,680
平成元年度長野自動車道および上信越自動車道関連事業一覽		148,530	293,680
合計		508,140	587,360

第1表 平成元年度長野自動車道および上信越自動車道関連事業一覽

3 発掘調査遺跡 〈長野自動車道〉

(1) 向六工遺跡

所在地：東筑摩郡坂北村字向六工5846ほか

調査期間：平成元年4月10日～同年9月13日

調査面積：11,700㎡（総計14,500㎡）

遺跡の立地：東条川に張り出す東向き河岸段丘

時代と時期：縄文時代早期，平安時代，中・近世

遺跡の特徴：縄文時代早期の集落，平安時代の集落，中世の鍛冶跡を伴う集落

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	集石	火床	その他
縄文	3				(炬跡)2	
平安	17		約850	10		
中世以降	2	10			(鍛冶)27	櫓3, 井戸1

主な出土遺物

土器・陶磁器：縄文早期土器，土師器，須恵器，灰，釉陶器，内耳鍋，美濃焼，青磁

石器：石鏃，搔器，打製・磨製石斧，磨石

土製品：羽口，埴埴，**金属製品**：刀子，銭貨

本遺跡は東条川左岸の第2段丘面全体に展開し，標高約590～600mの地点である。段丘は東面して南北に長く，氾濫原から8m前後の比高差がある。調査対象地は遺跡全体の約7割におよび，上記の内容が明らかになった。以下，時代をおって調査概要を紹介する（第9・10図）。

縄文時代 P区で早期条痕文期と思われる竪穴住居跡3軒を検出した。浅い掘り込みで炉は

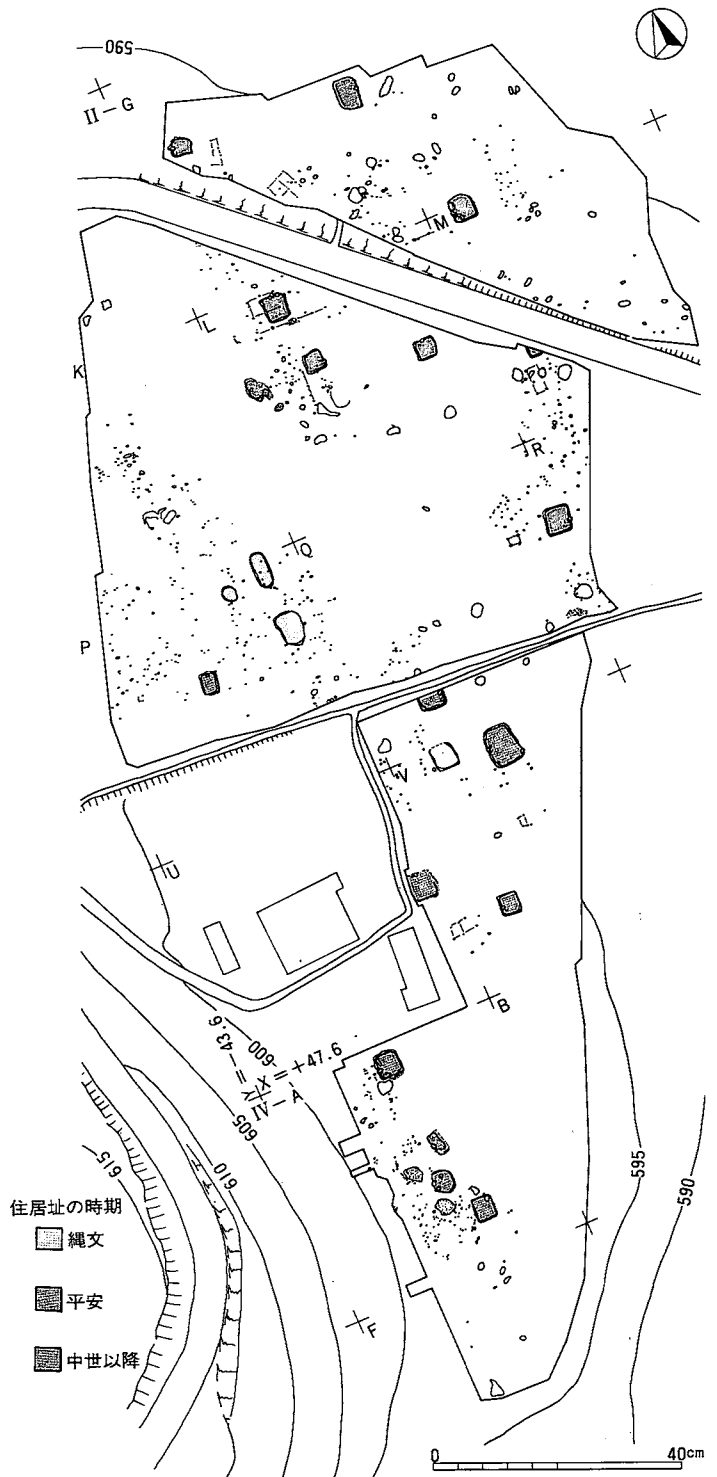


第9図 向六工遺跡の全景（南からのぞむ）

認められない。1軒は2.5×2.2mの円形で、盤状石皿を伴った。A区では絡条体圧痕を伴う条痕文土器の、ほぼ単純な包含層を調査した。遺構は炉跡2基のみだが多量の黒曜石片を出土した。縄文時代遺物は希薄ながら調査区全体におよび、ほかに縄文中・後期土器、弥生後期土器もごく少量出土した。

平安時代 調査区全体に17軒の竪穴住居跡が散在し、切り合いはない。いずれもほぼ正方位に軸をとおり、4.8×6.2mの大型の1軒以外は径4m前後の規模である。カマドは南壁以外の壁中央、隅寄りなどバラエティーがある。カマド脇に、いわゆる灰だめピットをもつものが多く、カマドをもちいた「煮たき」以外に、「焼く」調理法も想像される。出土土器から、集落の年代は9世紀後半から、10世紀代が中心と思われる。1時期数軒の住居が、数世代にわたって営まれたものと推定され、古代山村の全体像をうかがえる貴重な調査例といえよう。

中世 遺跡中央を東西に通ずる農道は、岩殿寺の参道である。この北側、L・M・Q・R区に遺構が集中する。掘立柱建物跡、柵のほか、埴埴等の出土から鍛冶炉と推定される火床を多数検出した。また参道に接して、柱痕をもつ大型ピットが検出され、伝承の山門跡と関連する施設かどうか、検討を要する。出土遺物は16世紀代を中心とする。(綿田弘実)



第10図 向六工遺跡の遺構分布図 (1 : 1,200)

とりばやし
(2) 鳥林遺跡

所在地：更埴市大字桑原字鳥林

調査期間：平成元年4月10日～同年6月9日

調査面積：4,000m²

遺跡の立地：篠山の南東向尾根上

時代と時期：縄文時代早期，弥生時代後期，平安時代

遺跡の特徴：縄文時代早期の集落，平安時代の集落

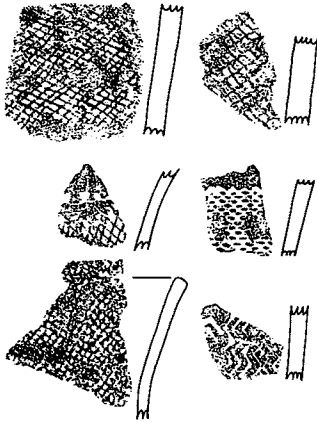
主な出土遺物

土器：縄文時代早期押型文土器，平安時代土器

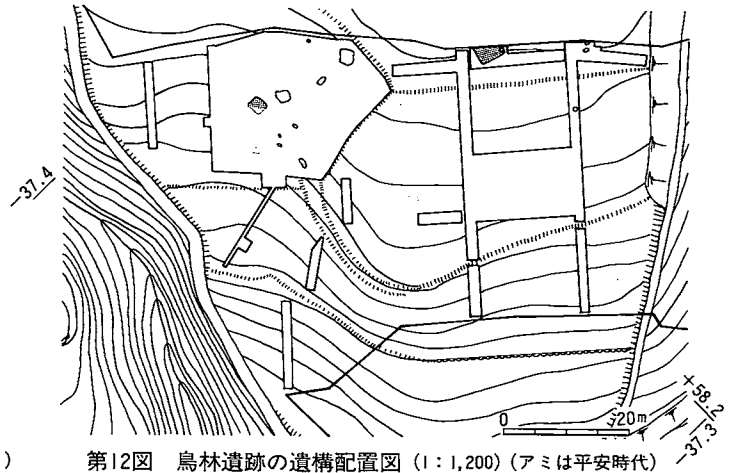
石器：石斧，石鏃，磨石，凹石，石皿

主な検出遺構

遺構時期	竪穴住居跡	土坑	その他
縄文	2	6	集石 1
弥生		2	
平安	2		
不明		1	



第11図 鳥林遺跡出土の押型文土器 (1:3)



第12図 鳥林遺跡の遺構配置図 (1:1,200) (アミは平安時代)

遺跡は北を荻沢川，南を柳沢川にはさまれた尾根上の小平坦地にあり，善光寺平を一望できる。この尾根上は果樹園として利用され，それによる地形の改変がある。

トレンチ調査の結果，遺物の出土した地点を中心に面的調査をおこなったが，大部分の地点では縄文時代から近世までの遺物が混在してわずかに認められたのみである (第12図)。

縄文時代早期の遺物は南側緩傾斜面の20×30mほどの範囲に集中し，住居跡2・土坑6・集石1もこの範囲で検出された。同時期の遺構は上方の用地外のほかに広がっていた可能性はほとんどなく，集落の大部分を明らかにしたものと考えられる。住居跡は一辺2.7mの隅丸形状と2×2mの一辺が短い台形状の2棟ある。検出面まで浅く，斜面にあるため遺存状態はよくないが，炉・柱穴などは認められなかった。土坑は径70～30cm，深さ30～40cmのものが多い。検出面および遺構内から検出された土器は大半が押型文土器で，そのほとんどが格子目文であり，少量の山形文・楕円文を含む(第11図)。また石器も多く，総数約500ほどになろう。土器・石器を限られた時期の組成を示すものとしてとらえることができる。

ほかに平安時代の住居跡2軒と，弥生時代の土坑2基があり，ともに用地外への広がりが考えられる。(土屋 積)

(3) 小坂西遺跡

所在地：更埴市大字桑原字小坂西2, 583-1ほか

調査期間：平成元年9月14日～同年11月4日

調査面積：4,000㎡

遺跡の立地：篠山南麓の急傾斜した段丘面

時代と時期：縄文時代早～晩期，弥生時代後期，古墳時代前期，奈良・平安時代，中世

遺跡の特徴：縄文時代早期から中世まで断続的に営まれた山地の集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑
縄文	3		3 約150
弥生			
古墳	2		
奈良	1		火葬施設2
平安	2		
中世	5	2	
不明	1	1	

土器・陶磁器：縄文早～晩期土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，かわらけ，内耳鍋，瀬戸焼，青磁

石器：石鏃，石槍，石匙，不定形剥片石器，打製・磨製石斧，磨石，特殊磨石

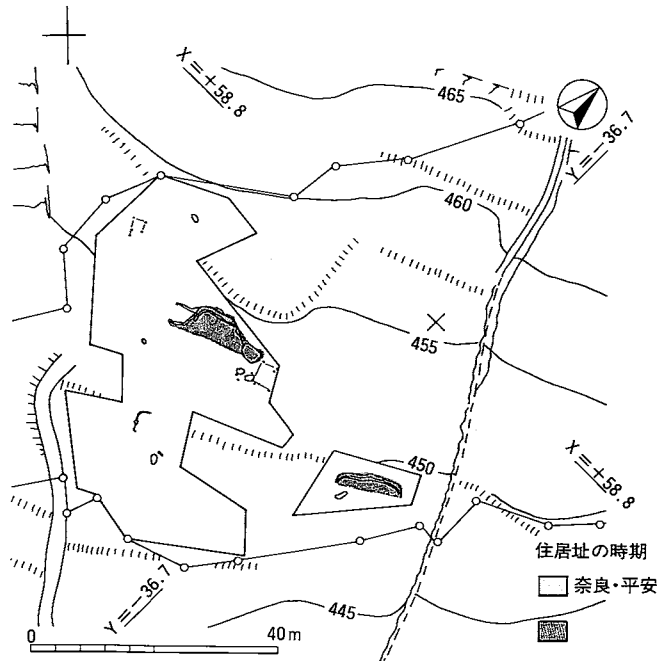
金属製品：刀子，銭貨

本遺跡は篠山南麓の斜面に位置し，小坂集落を横切るJR篠ノ井線付近が中心と推定される。今回の調査地はもっとも山寄りの，遺跡範囲の上限と思われる，標高約450m付近の地点である。調査地は，中央に張り出す尾根の両側の狭い段丘上で，西区（第13図）・東区（第16図）の2地点に分かれる。両地点とも，断続的に縄文時代早期から中世にわたる遺構・遺物が検出された。

縄文時代 東区で3軒の竪穴住居跡を検出した。うち1軒は早期末?の住居跡を切る前期前半の住居跡で，4.7×4.0mの長方形である。地床炉，周溝をもつ。包含層は調査地全体におよび，とくに東区は濃密な部分がある。出土土器は，押型文，田戸下層式併行，茅山下層式併行，粕畑式，前期前半，諸磯C式，晩期初頭，氷I・II式などがあり，石器組成は把握しがたい。

弥生時代 東区で土坑3基を検出した。うち1基からは吉田式の壺1個体を出土した。

古墳時代 東区で前期の竪穴住居跡2軒を検出した。



第13図 小坂西遺跡西区の遺構分布図 (1:1,200)



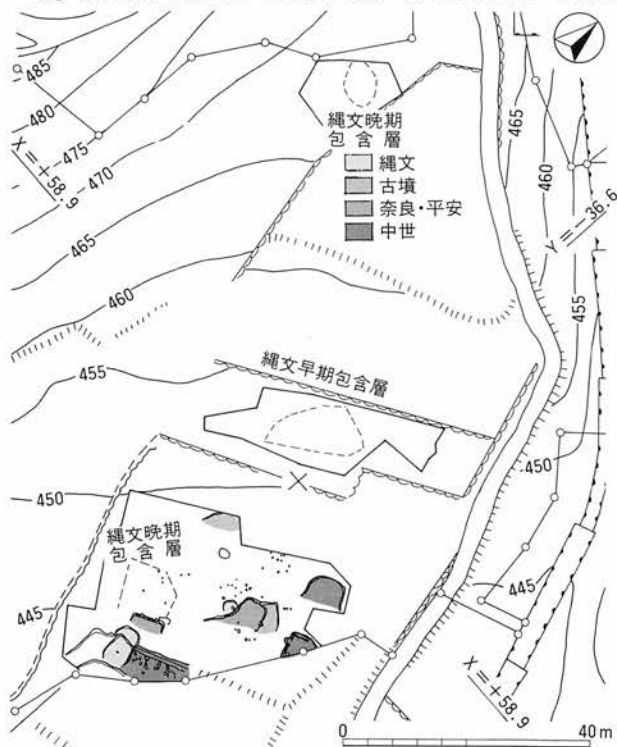
第14図 小坂西遺跡の5号住居跡



第15図 小坂西遺跡の7号住居跡

奈良・平安時代 東区で奈良・平安各1軒，西区で平安1軒の住居跡を検出した。平安時代の5号住居跡（第14図）は1辺5m前後の方形で東壁にカマドをもつが，山側の北壁から谷側の南西隅にかけて周溝がめぐり，等高線に沿って壁外へ約5mのびる。斜面での排水の工夫とみられる。

中世 西区で3軒，東区で2軒の住居跡を検出した。いずれも段切りによる平坦面に柱穴をもつもので，掘立柱建物跡の一種であろう。等高線方向の径が10m前後まであり，山側に溝がめぐるものもある。このうち，7号住居跡（第15図）は5m前後の方形で，四壁に石がめぐる。調査地内の西壁では石垣状，北壁では壁から離れて立石状となる。床面に薄い炭化物層が



第16図 小坂西遺跡東区の遺構分布図 (1:1,200)

あり，内耳土器，かわらけ，銭貨を出土した。この種の遺構は少数例が知られるにすぎず，「竪穴建物址」の名称もある。西区では住居跡に隣接して火葬施設2基を検出した。かなり浅いが，1基は突出部がある。

以上のように，山地の遺跡ながら予想を上回る多様な成果があった。ことに東区は遺構密度が高く，調査区外へも同様に広がると予想される。周辺遺跡の消長と対比しながら，各時代における本遺跡の性格を検討し，山間遺跡の特徴を明らかにしたい。なお，遺跡周辺からは拳大程度までの鉄石英（赤玉石）が多く採集され，岩脈の存在が確實視されることを付記しておく。

(綿田 弘実)

(4) 鶴萩七尋岩陰遺跡

所在地：長野市篠ノ井塩崎字白助866

調査期間：平成元年9月11日～同年11月2日

調査面積：250㎡

遺跡立地：篠山東斜面に突き出た巨岩部

時代と時期：弥生時代中期，古墳時代後期，近世～現代

遺跡の特徴：弥生時代の墓域，古墳時代の墓域・祭祀域，近世～現代の信仰域

主な出土遺物

主な出土遺物

遺構 時期	土壌	その他
弥生	1	
古墳	2	1
近世		2

土器：弥生中期土器，土師器，須恵器 鉄製品：鉄鍬，鏃鉈

石製品：打製石斧，太形蛤刃石斧，打製石鍬，五輪塔

その他：管玉，ガラス小玉，骨角製鍬器，有孔滑石製品，銭貨（寛永通宝等），焼人骨

本遺跡は，篠山東斜面に突き出した巨岩のテラス部分および岩上部で，北側斜面上には鶴前遺跡がある。標高380m前後，テラス部分の面積40㎡のわずかな空間からは，石川条里遺跡・森將軍塚古墳が一望できる。そしてこの空間を弥生時代には墓域として，古墳時代には墓域・祭祀の場として利用していたと考えられる。さらに近世～近・現代にかけては，石垣を組み平坦面を造成して薬師堂を祀り庶民信仰の場とされた。

弥生時代の遺構として土壌1基を検出した（第15図）。土壌内からは，焼かれた人骨複数個体分と弥生時代中期前半と考えられる土器数個体出土した。また土壌内には特定できないが太形蛤刃石斧と打製石鍬各1点出土した。人骨については，土器の中に納骨したものかどうかは不明であるが，1次葬を済ませた後で2次的にこの岩陰に集骨し葬ったと考えられる。



第17図 鶴萩七尋岩陰遺跡の3号土壌人骨

古墳時代の遺構としては，土壌2基を検出

した。上部が後世の攪乱を受けているため，土壌内と特定できる遺物は少ない。しかし第1号土壌から須恵器埴瓶・骨角製の鍬形製品の先端部分と焼けた人骨片を出土した。その他に土壌内には特定できないが，この時期に比定できる土師器数個体・管玉（碧玉製2・グリーンタフ製5・滑石製3）・ガラス小玉1・骨角製鍬器数点（ほぼ完形2点を含む）・鉄鍬3点があり相応の身分の人を埋葬したと考えられる。また巨岩の上部からは，土師器数個体と有孔滑石製品1点が出ており，磐座の可能性も考えられる。

以上が遺跡の概観であるが人骨の時代決定には，今後検討の必要がある。いずれにしても興味深い葬制であり貴重な資料となるであろう。（下島章裕）

(5) ^{つるまえ} 鶴前遺跡

所在地：長野市篠ノ井塩崎字鶴前1505番地ほか

調査期間：平成元年8月1日～同年12月22日

調査面積：5,400m²（総計11,300m²）

遺跡の立地：篠山山系の東向斜面

時代と時期：縄文時代中期～晩期，弥生時代後期，古墳時代初頭，奈良・平安時代，中・近世

遺跡の特徴：弥生時代末～古墳時代初頭の集落，平安時代の集落

主な検出遺構

時期	遺構	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝	井戸	その他
縄文		1(1)		1			
弥生末～ 古墳初頭		5(2)		2(8)	1	(4)	
奈良・平安		17(12)	5(1)	102(32)	4		土坑墓2
中世以降			1(3)	4	1(1)	1	土坑墓3， 山削り跡(2)1
不明		3(1)	(1)	(8)			

主な出土遺物

土器・陶器：縄文中期，晩期土器・弥生後期土器・古代土師器・内黒土器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・内耳土器・瀬戸・山茶碗・近世陶磁器等

石器：石鎌・黒曜石剥片・打製石斧・磨製石斧・石匙・磨石等

打製品：管玉

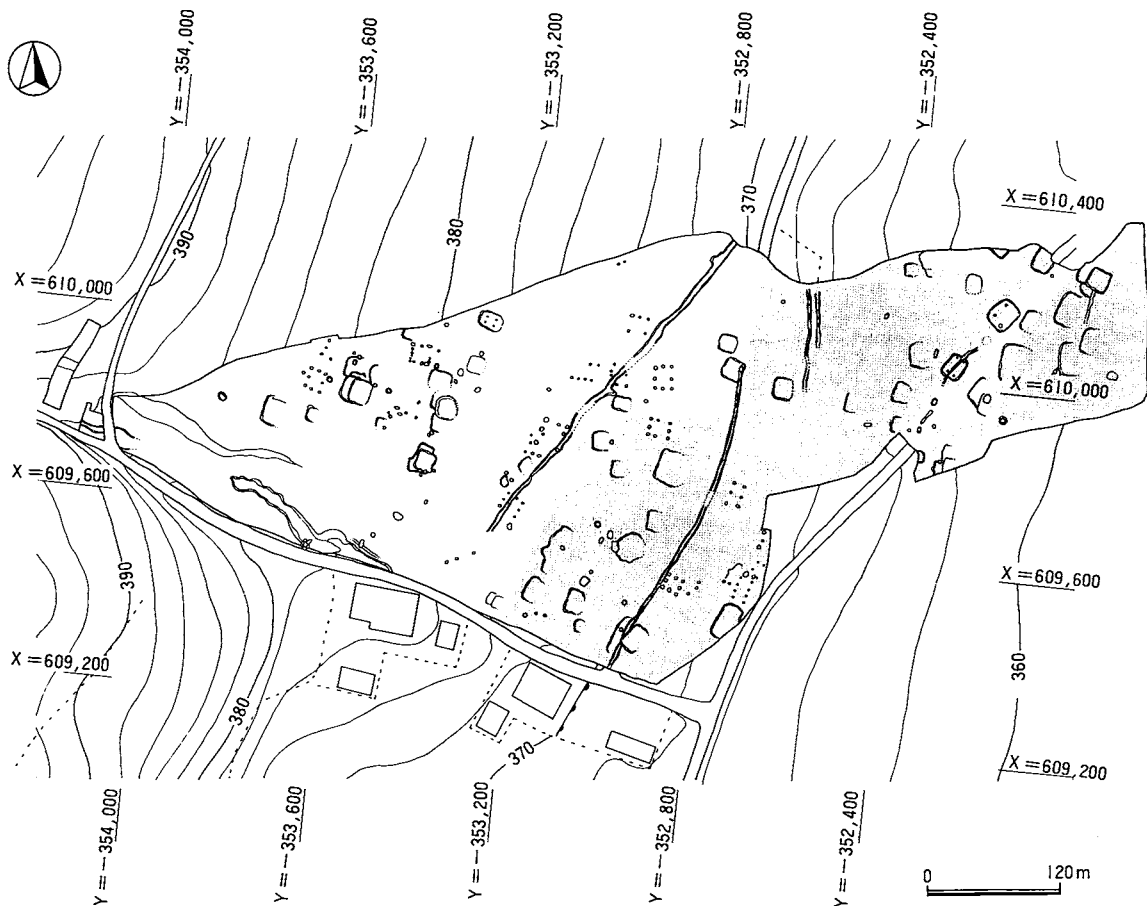
鉄製品・青銅製品：鉄鎌・銭貨・キセル等

その他：人骨・土偶

鶴前遺跡の概要 本遺跡は、篠山山系の東側緩斜面上に広がる複合集落遺跡であり、東方眼下に石川条理遺跡を望む。今年度の発掘調査は、昨年度に継続したもので市道長谷北線より山側北白助地籍にあたる場所と、これに昨年度の調査残件部分として市道犬石～湯之崎線直下が加わっている。今年度分の調査面積は、5,400m²で総面積は11,300m²となった。検出された遺構



第18図 鶴前遺跡の全景



第19図 鶴前遺跡の遺構分布図 (1:1,600, アミは昨年度発掘分)

は、昨年度と同様そのすべてが裾花凝灰岩等の崖錐性堆積物層の上面で確認されており、縄文時代中期～中・近世と広範囲の時期にわたっていることがわかった。

以下、今回の調査概要に、前回の調査結果を踏まえ課題とされた点についても若干ふれたい。

今年度の調査では、おもに平安時代に属する遺構が他の時期に比べ数多く検出された。平安時代の住居址は、昨年度の調査の結果と（昭和63年に実施された長野市埋蔵文化財センターによる本調査区の北側に位置する送電用鉄塔の移設ともなう発掘調査を含めた）分布状況からみると山手の北側に平安集落の展開が考えられ、建物跡が集中する箇所もみられる。これに対して、弥生時代後期～古墳初頭の住居跡は、今回もわずかながら検出されたが、やはり石川条里側に集落としてのまとまりがあったとされ前回のとおりである。

今年度検出された遺構において特筆されるものとしては、氷式土器の出土した縄文晩期の住居跡1軒が確認されたこと。中世においては、建物跡と土壙墓の存在があげられる。このうち、土壙墓1基からは、保存状態の良好な人骨が出土し当時の西方浄土という風習を思わせる埋葬がなされていたことがわかるなど新たな発見となった。また、調査区の南側においては、谷地形を形成しほぼ現在の沢に沿った埋設河川が確認された。この沢は、覆土中から縄文時代中期～平安時代ごろまでの遺物が多量に出土しており、各時代の集落とのつながりが想定された。このほか、弘化2年(1845)に建築された屋敷跡については今日の造園等による攪乱で性格はつかめず、これにかかわる井戸のみを調査して終了した。(伊藤友久)

(6) 石川条里遺跡

所在地：長野市篠ノ井塩崎3845-1番地ほか

調査期間：平成元年4月10日～12月23日

調査面積：70,000㎡（総計35,000㎡）

遺跡の立地：千曲川自然堤防西側の後背湿地

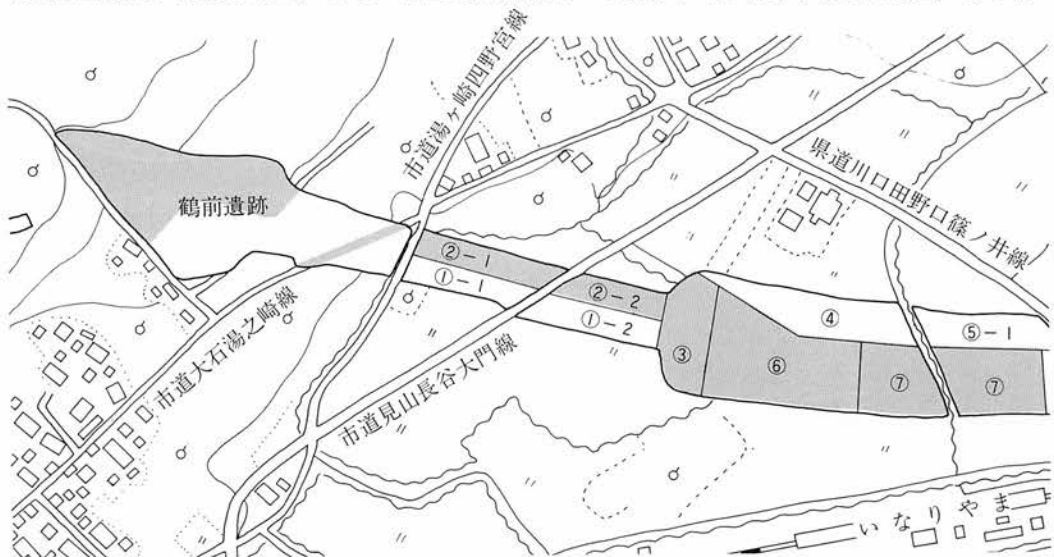
遺跡の概観：更級郡旧塩崎村の南西部に広がる水田地域で、篠山山系の山麓に立地する鶴前遺跡と千曲川自然堤防上に立地する篠ノ井遺跡群の間に位置している。

昨年度調査の概略 本遺跡は昨年度からの継続調査としておこなわれており、微高地と低湿地からなる地形であることが確認された。JR稲荷山駅の北西部周辺(④、⑤、⑦、⑧、⑩調査区)は微高地となっており、それを挟みこむかたちで低地(①～③、⑥、⑪～⑬調査区)が広がっている。昨年度調査により微高地では、縄文時代、古墳時代、中世の3時期の遺構が確認され、とくに古墳時代の遺構群は祭祀的な色彩の強い特殊な遺構として注目された。低湿地では、弥生時代後期、古墳時代、平安時代の水田遺構が確認され、多量の木製品が出土した。

水田域は微高地東側の聖川寄りの調査区(⑪、⑬)で弥生時代後期、古墳時代の水田面が検出され、灌漑施設としての溝、水田を区画すると考えられる杭列群がともなって確認された。

平安時代の水田面は、調査区全域で多数の畦畔と溝が検出された。昨年度調査の⑪、⑬調査区では坪界と推定された畦畔がみられ、本年度も同一の区画と考えられる大畦畔が検出されている。坪界内の区画については昨年度の推定と異なる見解が得られた。

生活域は縄文時代は⑤～⑧調査区にかけての地表下約3mで前期初頭の竪穴住居跡、土坑等がみつき、古墳時代は幅約10～13mの溝で囲まれると推定される範囲内に、大量の土器・炭を含む土坑群が確認された。さらに中世では幅約10mの堀とその外をめぐる堀の区画、その各



第20図 石川条里遺跡の調査区範囲 (1:5000)

区画内で多数の井戸等が見つかり、館の存在が推定された。

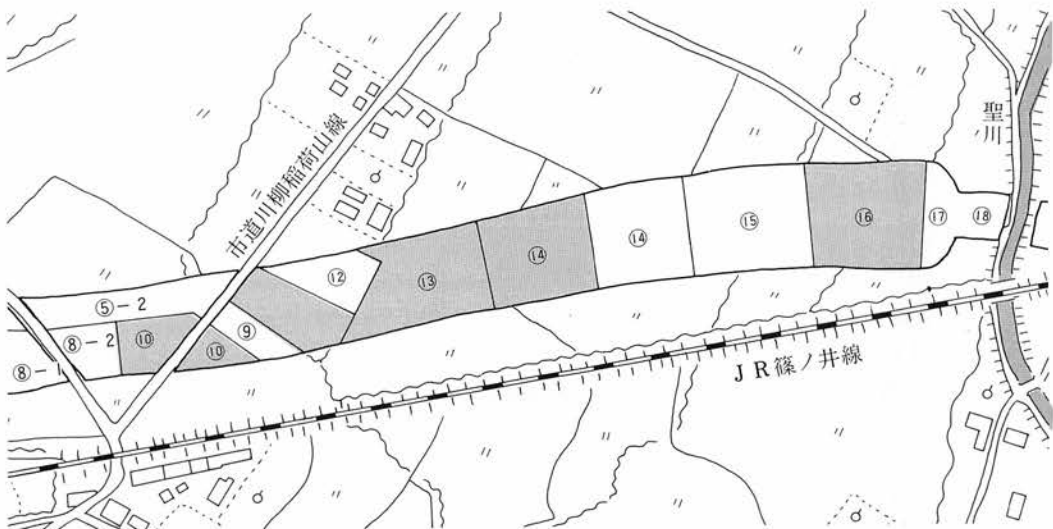
本年度は昨年度調査域の両脇（⑦、⑩調査区）を調査し、古墳時代と中世の遺構の分布や連続関係を明らかにするとともに、微高地と水田の境の様相についても新たな所見を加えることができた。なお、本年度調査域内では縄文時代の遺構は検出されなかった。

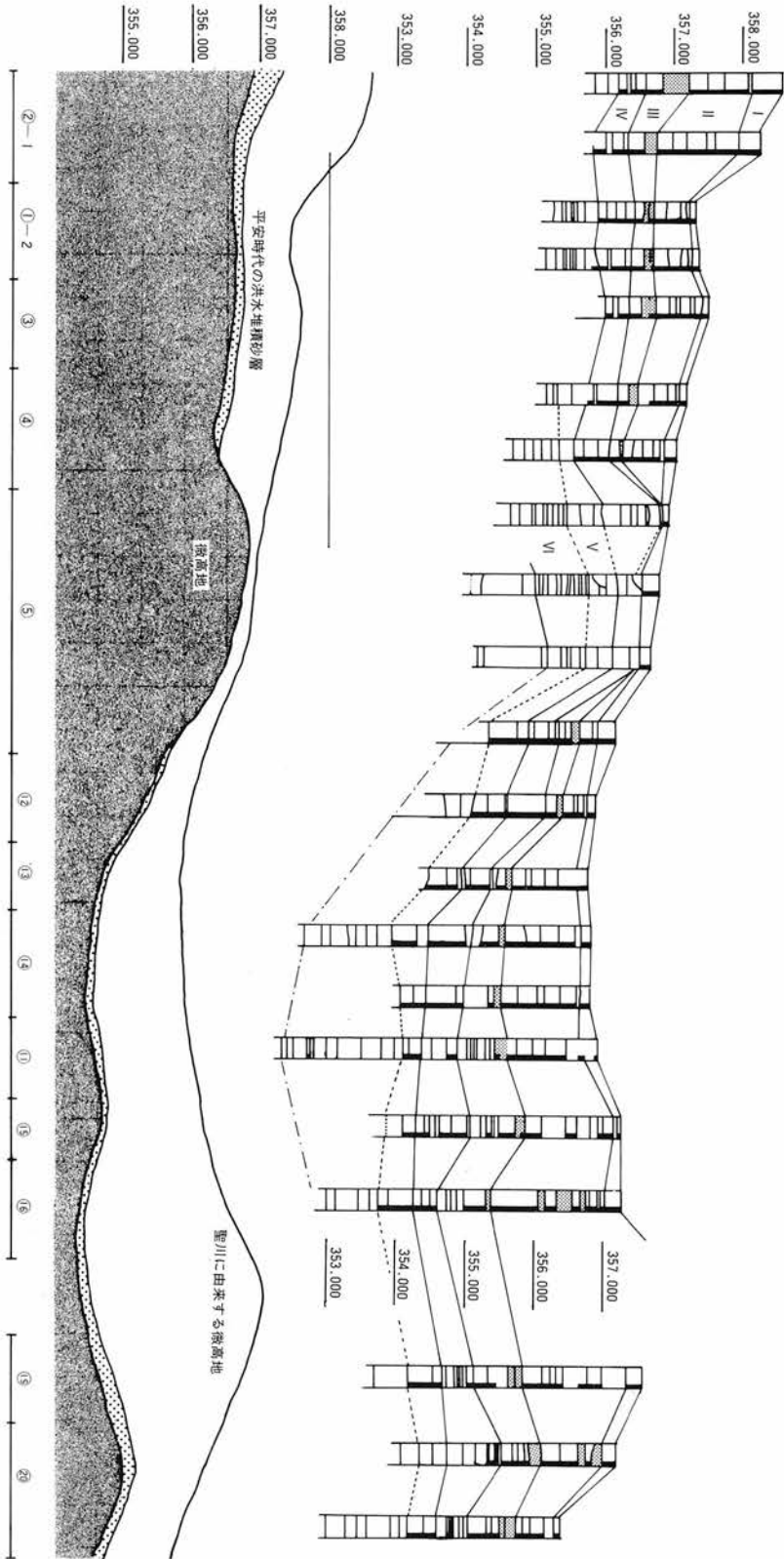
以下は、水田域とそれに接する微高地の生活域とにおいて、本年度調査の概要を述べたい。

石川条里遺跡の地形(第16図) 本遺跡の地形図から、千曲川沿いに発達した後背湿地に広がる条里遺跡は、細粒の粘土、シルトおよび、有機質土からなる軟弱地盤であって、一部に高まりを残しながら南西から北東に緩やかに傾斜をした良好な水田地帯となっている。

周辺からの土砂の流れ込みが顕著にみられるのは、平安時代の砂層以降であって、それ以前は西側の山際を除いてはみられない。平安時代の砂層は西側に厚く、東側に薄く堆積しており、一部に浅間山の軽石を含んでいる。またその組成は山際の裾花凝灰岩や砂質土壌のものと同様類似し、その分級度は1.284で良好、しかも細粒であるという特色をもって遺跡全体に広く分布している。

本遺跡で低湿地性植物の繁茂していた状態を切り開いて水田を営むようになったのはプラント・オパール、ケイソウ分析の結果から⑤調査区の微高地東側では弥生時代中期から、西側では古墳時代からであるという見解をえている。(越川長治)





第21図 石川条里遺跡の土層柱状図からみた地形模式図

1. 水田域

主な検出遺構

遺構時期	畦畔	杭列	溝	土坑	その他
弥生	杭等の構造をもつもの 12	5 (11)	1 (4)		
古墳	2	11 (22)	3 (6)		
平安			5 (7)	3	足跡 スキ跡
中・近世			5 (13)	2 (6)	畝状痕

() 総数

主な出土遺物

土器・陶磁器：弥生中期～後期土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，内耳土器，中・近世陶器

石器：磨製石庖丁，打製石斧

木製品：農耕具，建築材，鳥形，武具，櫛，呪符木簡，漆器

自然遺物：獣骨，クルミ，モモの種，粳米

その他：銭貨，鉄滓

水田面と接する微高地からは，弥生時代後期の竪穴住居跡1軒，土坑15基が検出されている。これにともなう遺物は，土器のほか管玉，ガラス小玉，人骨片が出土している。

昨年度の調査により弥生時代から現代まで水田として永続的に営まれていたことが確認された。本年度の調査では主として，弥生時代中・後期，古墳時代前期，平安時代，中世の各水田遺構が検出された。

本遺跡の特質すべき点は，多量の遺物が水田遺構にともなうことであり，県内では例をみない農耕具や建築材などの多量の木製品が出土していることである。

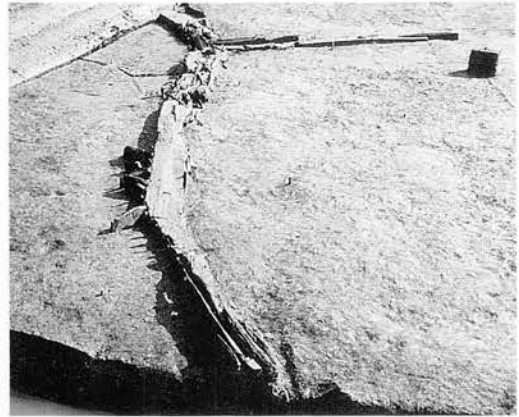
弥生時代 本遺跡の水田は，出土遺物とプラント・オパール分析の結果から弥生時代中期を起源とすることが確認された。中期水田土層（暗褐色粘土層）上に後期水田土層（灰色粘土層）が堆積しており，時期を画する要因がなく水田として移行していったものである。したがって中期水田遺構は，後期段階まで継続するか，もしくはかき乱されており本年度調査においても水田面と畦畔を構築した杭を検出したにとどまった。中期水田面からは中期中葉の土器片とともに磨製石庖丁が3点，打製石斧が1点出土している。

後期水田は⑥，⑫，⑬，⑭，⑯の各調査区で検出された。本年度の調査で初めて後期の畦畔が確認され，構造に違いがあることが認められた。比較的幅広の畦畔は，盛土の下から杭，横木，石等が検出され，幅の狭い畦畔は，盛土だけの構造であった。畦畔の方向には規則性がみられず，水田区画も不規則となっているが，永続的に利用された畦畔とそうでないものとあったことを示唆しており，今後詳細な検討を要するものである。畦畔から出土した杭は，数百本となり大小さまざまな割り材，丸太材であったが，いずれも先端を削り出した加工痕をみることができる。

⑬，⑭の調査においては，昨年度隣接した調査区で検出した灌漑用水路となる大溝が検出された。弥生後期に構築された溝は，古墳時代まで引き継がれるが，規模がしだいに縮小されていく傾向にある。本年度調査でも溝から多量の木製品が出土し，農耕具類のほか，数か所に孔をもつ赤彩の板が十数点出土している。また高坏，甕等も出土しており，いずれも完形に近い。溝と杭をともなう畦畔が2か所で交差する状況があったが，古墳時代の遺構によってこわされ



第22図 弥生時代後期の畦畔検出状況



第23図 畦畔掘り下げ、杭、横木出土状況

ているため、水路と水田面の関係については、残された杭の状況等から検討し、明らかにしていきたい。

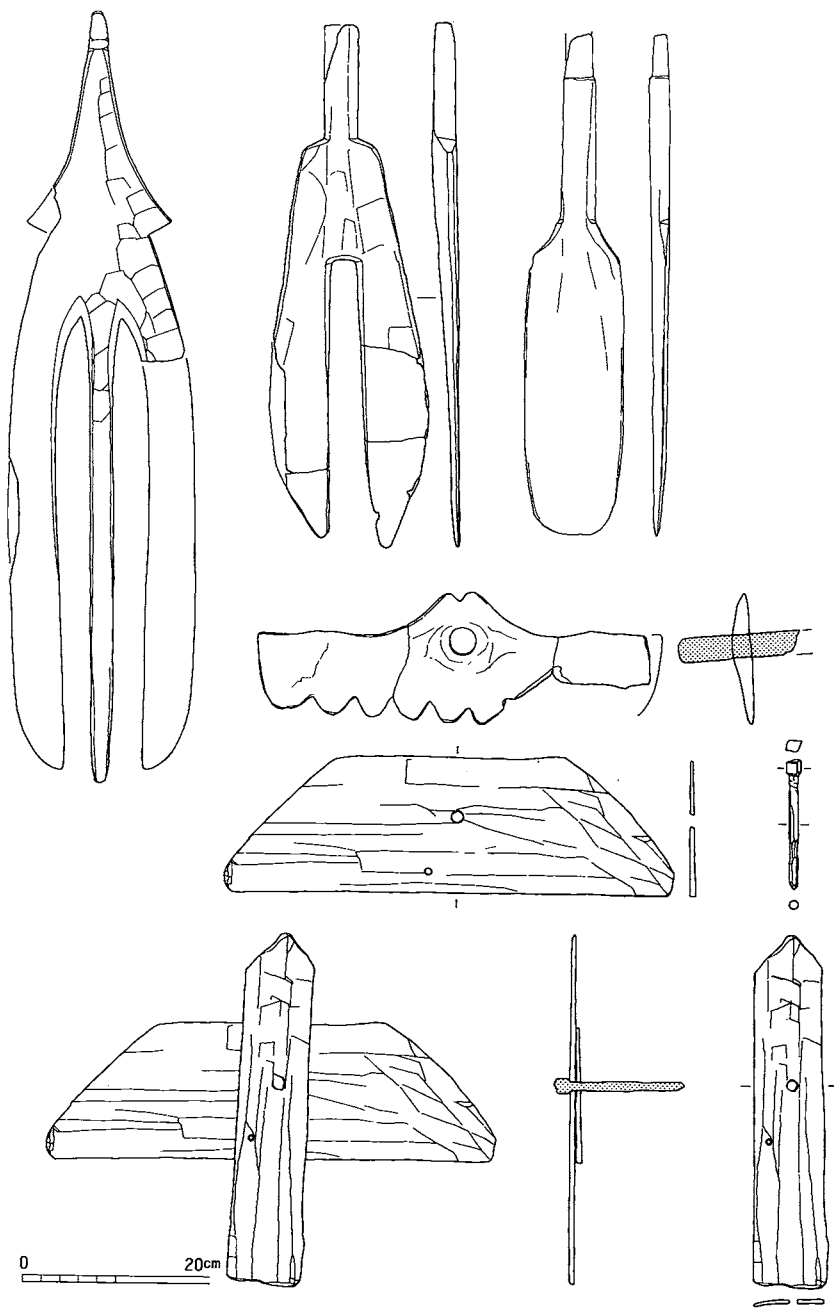
古墳時代 弥生後期水田土層上面に薄い泥炭層があり、その上層に古墳時代前期の水田土層（暗灰色粘土層）が堆積している。古墳水田は、⑬、⑭、⑯の調査区で検出された。弥生後期と重複している溝の状況、杭列等から画する時期をもつ水田面が2時期あることが確認された。調査段階で確実に畦畔と認定できるものが2条2列以上の杭を単位とする杭列が、8条検出され、畦畔、杭列ともに溝とかかわりをもつ状況であった。畦畔は溝と直交する方向にあり、杭列も直交もしくは、平行して検出された。水田区画については不明瞭であり検討を要するが、溝を中心とする方形の大区画が想定される。重複する溝は、2時期とも護岸施設をもち、土手が構築されていた。土手には芯材として横木、幅広の木皮等を用いており、畦畔と接する所で途切れる状況であった。溝内には多量の流木とともに、溝を横切るかたちで出土した大型の棒状木製品や、鋤を中心とする農耕具、建築材等が約200点出土している。鋤は概して大型のものが多く、身部が約85cmにおよぶ三又状のものもみいだされている。

溝の土手からは壺を主とする土器が20数固体、溝内からはS字状口縁台付甕、埴などが出土しており、これらの土器が隣接する微高地出土のものと同時期と考えられる。また溝周辺からは、型取った2枚の板を栓によって組み合わせた鳥形木製品、簪状に細工された木製品、櫛、土玉等が出土している。これらのことから溝の機能が、水田用水路以外にもあったことが推察されている。

平安時代 本年度も水田調査区全域で、類似する特徴をもつ「砂層」が、昨年度調査と同様に確認された。水田遺構も昨年度調査で検出されたものの連続としてとらえられ、坪を画するとみられる南北、



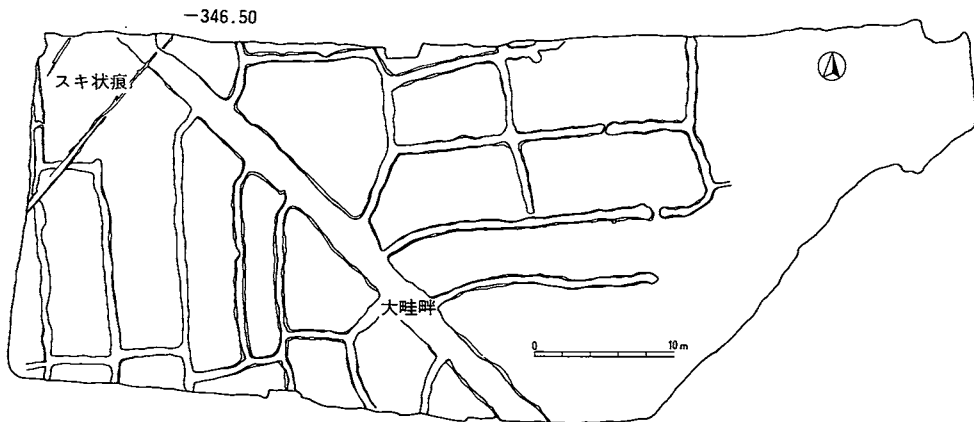
第24図 古墳時代の鳥形木製品出土状況



第25図 石川条里遺跡出土の木製品実測図(1:8)

東西それぞれの畦畔も推定どおりに検出された。

坪境の畦畔は6条、ほぼ109m間隔に確認された。この畦畔は溝が隣接もしくは中央にあるという特徴をもつか、溝の規模においてはさまざまである。南北軸は西に約 3° 、東北軸は南に約 4° のずれがある。坪境内の畦畔(地割)については今後、地形等との細かな検討をして



第26図 石川条里遺跡⑫区の平安時代水田畦畔

いかなければいけないが、すべての調査区で規則性をみいだすことができなかつた。⑫調査区においては、幅1mをこす大畦畔が北西—南東にあり、その畦畔を中心とし西側は南北、東側は東西を基軸とするよう区画となっている。⑭調査区では多角形の区画、⑯調査区では方形の区画となるなどの状況であった。

水田面には凹凸がいちじるしくみられ、この凹凸が人の足跡であることが確認された。⑭調査区では畦畔と平行に歩行する状況が数か所でみられた。また幅約10cm、断面V字形の鋤状の痕が畦畔をのりこえる状態で数状検出された。小畦畔に水口をもつものとそうでないものがある状況等から砂に埋没した当該期水田の季節が推定されよう。

②調査区水田面からは、墨書土器を含む完形の坏が6固体まとまって出土しており、⑫調査区でも坏の完形が出土している。遺物の時期においては8世紀末～9世紀のものと考えられる。

坪割りは条里地割にしたがって畦畔がつけられ、坏内地割は何らかの要因によって形状の規則を失ったものと考えられる。後背湿地であり、扇状地の端部であるという立地によるものかあるいは、自然流路、水路に関係するものであるのか、周辺の調査報告とともに慎重に検討していきたい。

中・近世の水田遺構については、地割を明確にできるような面的確認にはいたらなかったが、畝状の遺構、溝が検出され、溝からは呪符木簡、銅銭等が出土している。

本遺跡水田域は、弥生時代と古墳時代、古墳時代と平安時代、平安時代と中世、近世と近代に水田面として明確に画する土層の違いがある。前二者は泥炭層、後者は砂層であるが、その要因については、自然遺物を主として今後究明されるものである。各時代の水田面に溝があり遺物が豊富に出土しているので、農耕技術、祭祀等についても解明されるであろうと思われる。

(白居直之)

水田域内の微高地

はじめに、ここで記す微高地とは、JR篠ノ井線稲荷山駅より北西側水田地帯の高速道路用地内に僅かに張り出した地形をさし、昨年度より継続調査された路線内（本調査区より）北東の稲荷山駅裏に位置する微高地（石川条里遺跡⑤、⑦、⑧、⑩調査区）とは区別する。

弥生後期以前の地形形成 ⑥調査区と③調査区との境に南北方向の試掘トレンチを入れた結果では、西側の山裾をかすめたとされる幅40m程の自然流路が確認されている。この流路は、千曲川の乱流していた時期の旧河床と思われ、流路内の埋土には多量の自然木が含まれており流路としての堆積が最後までなされていた。微高地に関しては、この自然流路が部分的に低湿地帯として残存した時点以降に形成されている。地形から判断すると北西の山からの押し出しによる先端部の可能性があり、堆積物から判断しても凝灰岩の風化物がみられ西山からの影響が考えられる。このことは、現在の地形からの復元と地質学からの粒度分析等による裏付けが必要であろうが、現段階では後者の結論は出ていない。いずれにしろ土層および出土遺物から判断できることは、この微高地が弥生中期～後期の間の一時的に形成されており、その構成要素に礫などの夾雑物はまったくみられなく粘性のない砂でかたちつくられていた。



第27図 石川条里遺跡⑥区の微高地

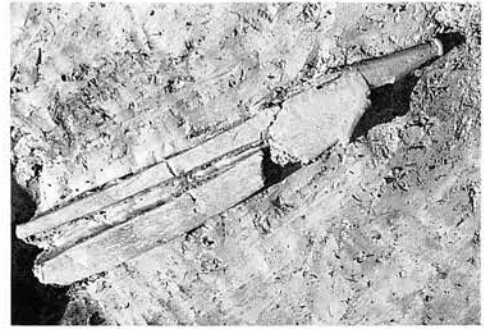
弥生後期 この形成された微高地上の遺構としては、弥生後期の住居跡1軒と土壇15基が検出されている。土壇に関しては、壺棺の出土（第29図）やそれに類する墓としての性格がなされるものが10基、祭祀土壇とするものが5基で、この中からガラス小玉合計16点、管玉合計4点、歯骨が数点出土している。これらの遺構は、北東に位置する微高地（石川条里遺跡⑤、⑦、⑧、⑩）に構築された古墳時代の祭祀土壇と対比すると時代も遡り明らかに性格を異にするもので、墓域と位置づけられるのかもしれない



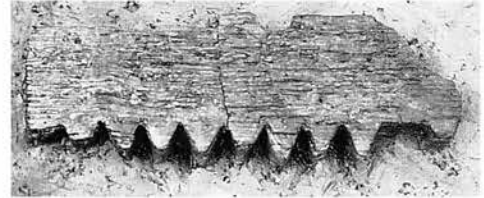
第28図 石川条里遺跡⑥、⑦一西区の弥生後期平面図 (1 : 800)



第29図 石川条里遺跡⑥区微高地上の土壌



第30図 又鋤の出土状況



第31図 えぶりの出土状況

い。また石川条里遺跡における弥生時代唯一の住居跡は、土壌との重複関係からその後の構築といえる。

微高地を下った北側の湿地帯は一部に稲作が可能な場所もあり、杭をとまなう畦畔が確認された。この畦畔付近の水田面上からは、弥生時代後期の箱清水土器が出土している。

北東に位置する微高地の関係は、その最南西端部までの間に水田面を挟んで約40mの間隔があり、それぞれの微高地を繋ぐ杭列がその水田面上に1条のび3mほど離れてこれよりも短い杭列が付随した様相で検出された。プラントオパール分析によれば、この2条の杭列の両側では稲作が営まれていたと解釈できるが、その内側とその近辺からは確認されていないことから、この2条の杭列は仮設的な橋または道の様な連絡施設のための補強材あるいはその残存部分との想像ができるのかもしれない。

平安時代 入り組んだ地形に囲まれたこの地域においても、平安砂層を取り除いた平安水田面には、推定坪境にのった大畦畔が現水路および農道直下に検出されて東西方向にのび、北東側の微高地（石川条里⑦—西調査区）にはいると溝にかわる。大畦畔内に小さく区画された畦畔は、大畦畔と時期を同じくしたと思われる方向性を持った畦畔と、それを切った地形に左右されたような不規則な畦畔の二種類がみられたが両者の関係は今後の検討課題である。

平安時代の微高地は、弥生時代後期の微高地と比べはるかに規模の小さな張り出しとなり、その境には微高地に沿った水路と畦が水田面とを分けていた。

微高地上の遺構としては、南北にのびる短い溝が1条のびているのみである。

この微高地は、地籍名では「上見崎」にあたり現状では果樹園として利用されている。航空写真でみると周辺を水田に囲まれた微高地がJR稲荷山駅から湿地の水田に向かって岬状につき出したように見える。この微高地と千曲川自然堤防上に集落遺跡として広がる塩崎遺跡群との関連性の有無については明かにならなかったが、今後のこの一帯における発掘調査や地質・地形調査に期待したい。（伊藤友久）

2. 生活域

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	堀立柱 建物跡	土坑	祭祀 土坑	溝	その他
縄文	3		27			
古墳				465 (30)	16 (6)	遺物集中 箇所7(5)
奈良-平安			5		90 (62)	井戸146 (42)
中・近世		2				
不明			164 (20)			

昨年度実績分も含む
()内は今年度調査分

主な出土遺物

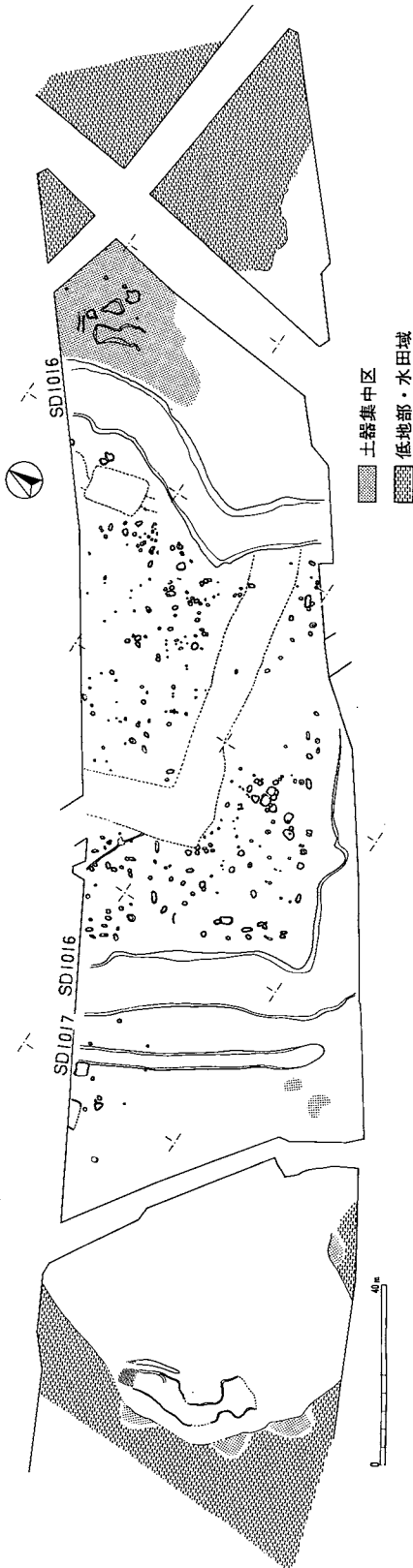
土器・陶磁器：縄文前期初頭土器，弥生後期土器，土師器，須恵器，灰・緑釉陶器，中世土器，中・近世陶磁器
石製品：紡錘車，勾玉，管玉，石釧，車輪石，砥石，石臼，五輪塔，打製石斧，石包丁，扶状耳飾，石匙，石鏃
土製品：五徳，土錘，羽口，土玉，土製勾玉
木製品：鋤，鍬，砧，鎌等農具類，板材，柱材，ハシゴ，杭等建築部材，カゴ類，曲物，漆器，ハシ，ゲタ
その他：銅鏡，銅鏃，銭貨，鉄滓，人骨，獣骨，ガラス小玉

本地区の生活域としての利用は，古くは縄文時代から中世室町期にいたる長きにわたる。ここでは，今年度主に調査した古墳時代及び中世の様相についてふれたい。

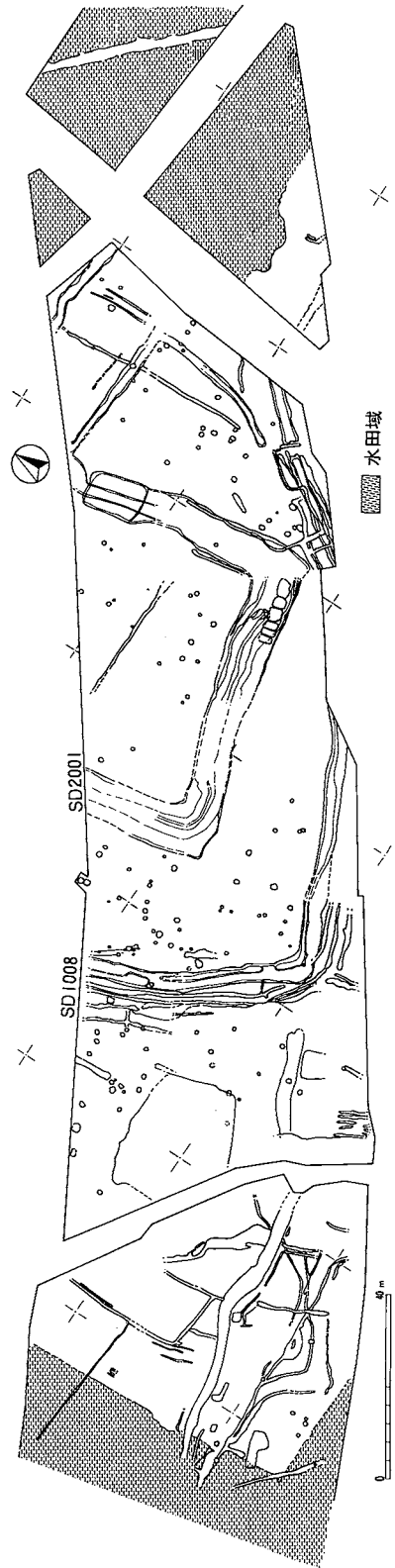
古墳時代 微高地上の東・西端を最大幅にもつ大溝が，この微高地中央を囲むように巡る。その北東側は未調査のため不明であるが，調査範囲内でわかったその形状は，南東側が方形に，また北西側には円形にのびるかのようみにみられる。SD1016としたこの通称大溝の溝間の内径最大幅は約140m，溝幅は13m前後，深さ1～1.5mをはかる。大溝の西辺西に，これに平行するかたちでもう1本の溝が配される。幅3m前後，深さ70～80cmはあり，一般的にはこの溝さえも大型といえる部類に含まれる。大溝に囲まれた内側には，約400にもものぼる土坑が構築される。その大半は直径0.5～1.5m，深さ50cm前後の楕円形である。数は多いが，これらの空間内での偏在性はとくに認められず，万遍なく配置されているといえる。このほかに，大溝東側には多量の土器，炭化物，焼土を混える土器集中区が，約900㎡にもおよぶ広範囲にわたって存在し，西側にも土器の集中する地区が見られた。以下大溝のようすを中心に詳述したい。

大溝の層序は基本的には自然埋没を想定させる堆積状況を示し，その間に1枚なし2枚の炭層がレンズ状に厚く堆積する。炭層は人為的につくられたものであり，ある程度溝が埋まった段階で，炭の投げ入れがおこなわれたものと判断される。遺物はこの炭層を中心として多量に発見された。高坏，小型丸底土器，器台等といった供献形態を中心とする土器をはじめ，石製装飾品類の多さは特筆される。県内初の車輪石1点を初め，石釧3点があり，管玉，勾玉，ガラス小玉（スカイブルー色），白玉等は多数出土した。銅鏡片，銅鏃も注目される。ほかに木製品がある。農具である鋤類，砧や箆が多い。また建築部材と思われる材が極めて多い。この建築部材の存在自体はもちろんのこと，廃材となる以前の用途も同時に大きな課題となろう。ほかに有機質類では桃の種をはじめとする植物種子や，鹿角等，動物骨の出土もみた。なお溝の内側全周に4m前後の等間隔で，先端をとがらせた直径15cm前後の杭が，ほぼ垂直に打ち込まれていた。しかし護岸施設であるという根拠はえられておらず，その機能について現状では明らかにしていない。また，土坑内部にも溝同様，多量の炭とともに多くの遺物を含む例が多い。小型丸底土器，高坏，器台，といった土器のほかに，勾玉，管玉，小玉といった装身具類

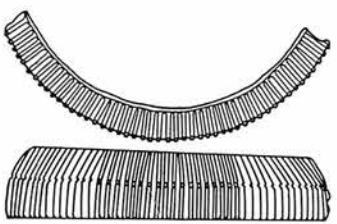
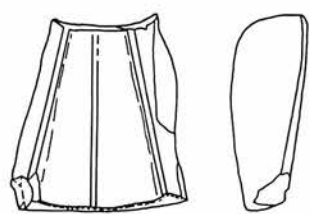
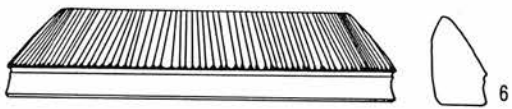
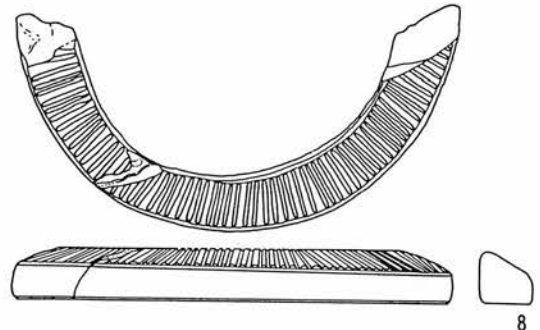
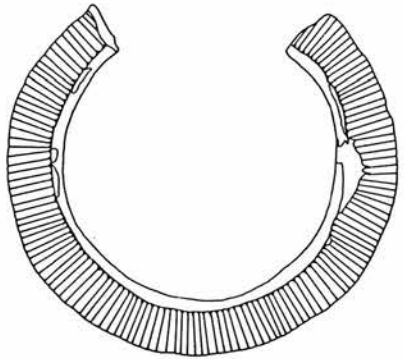
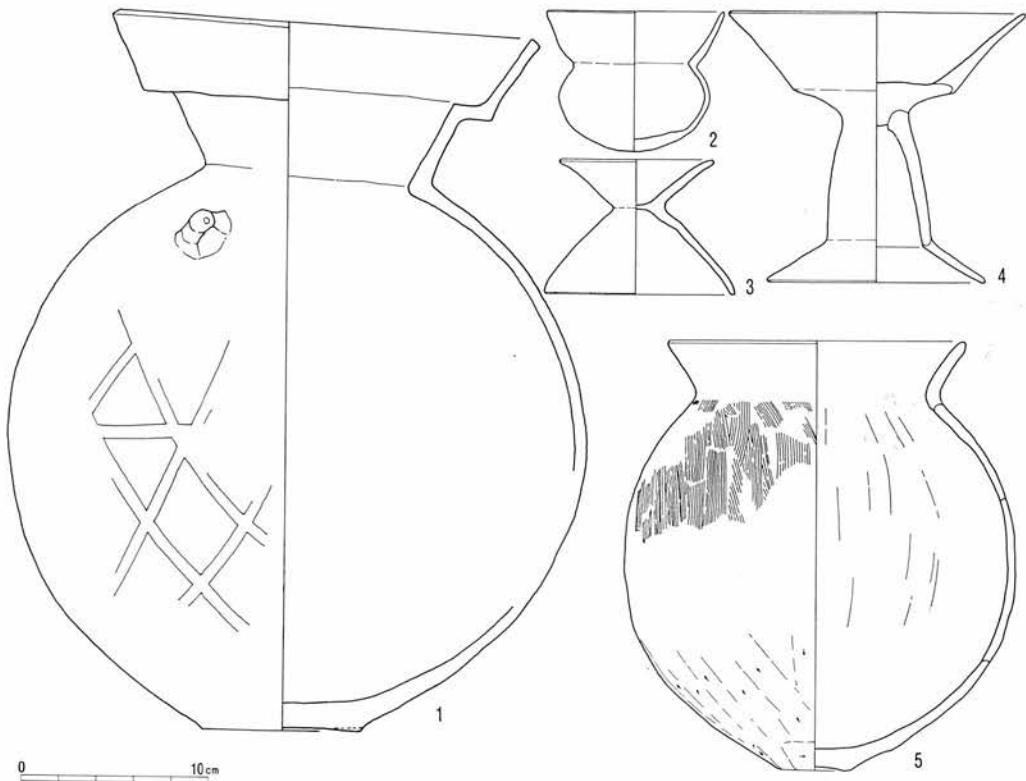
古墳時代の遺構



平安以後の遺構



第32図 石川条里（生活域）の全体図（S = 1 : 1,600）



第33図 石川条里(生活域)出土の土師器・石釧・車輪石
 (1,SK2492、2・3,SK1046、4,SK2086、5,SK2057 6~9,SD1016(8はSK2818と接合)、
 6・7・9はグリーンタフ製、8は滑石製)

をもつ土坑もある。なお、土坑出土の石釧と溝出土のそれが接合したことは注目できる。

さて、4世紀末～5世紀初頭という時間の中におさまる時期に、それではいったいここで何がおこなわれていたのかという、遺跡の性格にかかわる問題にこそ興味深い。近年この時期の堀を伴う豪族居館遺跡の発見も多い。しかし、本遺跡では調査区外での可能性は残るものの住居の検出は皆無である。祭祀場という考えも可能であろうが、その規模には疑問が残らないでもない。ここで、本地区の北東側の同時代と思われる水田面より出土した鳥形は、本地区を理解するうえで示唆的である。鳥は穀霊を運び豊作を約束する村の祭に欠かすことのできないものといわれるからである。また、特に西側に顕著であったように、水田域との境と思われる地区に土器がまかれたように多数出土するという状況も観察された。このような状況から、今のところ上記の遺物にかかわる祭祀としての場の想定が妥当ではないかと考えたい。(三上徹也)

中世 検出された遺構には溝、柱穴、土坑、井戸跡がある。昨年度調査では、上幅約10mの溝(SD2001)が方形に巡り、その外側を幅約4mの溝(SD1008)が取り巻く二重の溝区画があり、本遺跡はこれらの溝で同心円状に3分割されることが推定された。本年度の調査はSD2001外側部分を中心として調査し、SD1008の連続関係と構造や、SD1008内外のようすについての所見を加えられた。まず、SD1008の規模と連続関係では昨年の⑤区西から南下し、⑦区で直角に折れて昨年度の⑧区につながり、さらに⑩区までのびて土橋状に切れることが判明した。構造では低面はさらに細い溝が掘られ、それが⑦区と⑤区西・⑦区の境付近で切れていることもわかった。これらのことから、SD1008が区画する外と内をつなぐ道がいくつかあることも推定された。さらにこのSD1008をはさんで内側には柱穴や井戸が多数あるのに対し、その外側は遺構が少ないことが判明した。また⑦区ではSD1008の西側にある現用水を境としてその外ではまったく中世と確定できる井戸や柱穴が確認されなかったことから、現用水下に中世にさかのぼる区画も存在していた可能性が考えられた。また、SD1008の性格を考える上で⑦区では数基の井戸内に大量の鉄滓が廃棄されていたり、イヌの骨が出土したのは注目される。なお、本遺跡近くの水田域(13区)で低面に石を等間隔に置く中世の溝が検出され、そこから呪符木簡が出土した(口絵参照)。本遺跡に関係する可能性もあり、水田域も含めた、広範囲を視野に入れて本遺跡を考える必要があると思われる。本年度の出土遺物は、昨年の調査同様に多くの中世の木製品が出土し、それに加えて土器、陶磁器や石臼等の石製品が出土した。このなかで注目されるのは瓦質の風炉・火鉢、内耳鍋と類似した胎土・焼成の外耳の鍋形土器が出土していることがある。陶磁器では中国産の青磁碗・白磁皿、古瀬戸瓶子・平碗、在地産のかわらけや内耳鍋が出土した。また、中国産の青花や大窯製品は量的にわずかながら出土している。

本遺跡の調査例は水田域内の微高地上に営まれた中世館を横断して調査することになったが、これは県内でも少ない調査例であり、また、これまで長野県内であまり明らかにされなかった中世の木製品を考える上で貴重な資料を提示できる遺跡と思われる。(市川隆之)

(7) 篠ノ井遺跡群

所在地：長野市篠ノ井塩崎字宗旨坊ほか

調査期間：平成元年4月10日～平成2年1月12日

調査面積：15,900㎡（総計39,000㎡）

遺跡の立地：千曲川左岸の自然堤防上

時代と時期：縄文時代晩期，弥生時代中期・後期，古墳時代前期・末期，奈良・平安時代，中世以降

遺跡の特徴：弥生後期後半～古墳前期の集落跡，7世紀後半～10世紀の集落跡を中心とする
主な検出遺構

遺構時期	竪穴住居跡	掘立柱建物跡	土坑	墓	溝	杭および杭列	井戸	その他
縄文晩期			8		4			
弥生中期	3	1	約 1,000	2	5	2		
弥生後期～古墳前期	125	11		5	21	5	(22)	不明4
7世紀以降 奈良・平安	269	51		12	36		(146)	
中世以降					1			

主な出土遺物

土器・陶器：縄文晩期土器，弥生中期・後期土器，土師器，須恵器，灰・緑釉陶器，内耳土器
石器：石鏃，叩き石，石ノミ，打製・磨製石斧，打製・磨製石庖丁，砥石・石臼

石製品：勾玉，管玉，丸鞆，紡錘車

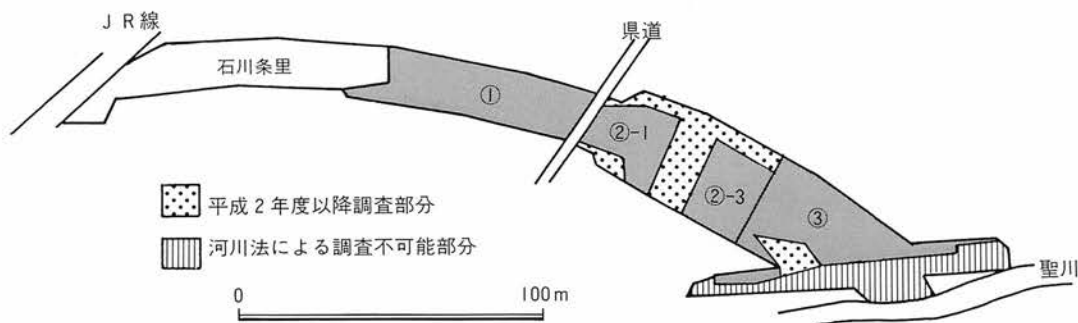
青銅・鉄製品：獣形文鏡，小型鏡，銅鏃，「大半」銘の銅印？，金銅製帯金具，銭貨，紡錘車

木製品：くりぬき式の井戸枠，黒漆製品，高杯（杯部），火錐臼，エブリ，ハシゴ

その他：土製紡錘車，土錘，土製支脚，ガラス小玉，編物，鹿角製刀装具，人骨，獣骨（馬・牛ほか），ベンガラ，ヒョウタン，種子類

篠ノ井遺跡群の概要 篠ノ井遺跡群の調査は，大きく①地区（約5,000㎡），②地区（約6,000㎡），③地区（約6,000㎡）に分けて実施された。このうち②地区内の約2,000㎡は側道部分とともに来年度以降の調査として残された。①地区については昨年度の石川条里遺跡②地区に引き続き，生産域と生活域の接点となる部分の調査となり，②・③地区においては，自然堤防上の生活域の調査がその中心となった。弥生時代以降の土地利用の状況は，石川条里遺跡②地区から西側が後背湿地の生産域となり，篠ノ井遺跡①地区を含め，②・③地区が自然堤防上の生活域となっている。最も標高の高くなるのは②地区である。

自然堤防の形成について現段階での所見を述べると，まず，縄文時代晩期以前に②地区を頂点に，なだらかな高まりが形成された。その後，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての時期に大きな形成過程がうかがえ，自然堤防として安定した状態になるようである。そして，平安時代以降には現在の地形に近い状況になったと考えられる。



第34図 篠ノ井遺跡群の発掘区

調査された遺構は、縄文時代晩期から中世に至り、遺構検出面は3～6面にわたった。縄文時代晩期 今回の調査で当遺跡に最初の生活跡を残したのは、縄文時代晩期の人々であった。この時期の遺構は①地区で検出されており、②・③地区では土器の出土はあったものの遺構はほとんど検出されなかった。おそらく、①地区で検出された遺構に関連する生活空間は、①地区より南や南西方向へ広がっていたものと考えられる。

遺構や土器は時期の分けられる二つの面でもとらえることができた。遺構には土坑・溝があり、これ以外にはいくつかの自然の大木の根痕がみついている。土坑のほとんどには炭化物粒が入り、また平石などを伴った例もみられた。溝は数本みつかり、北東方向から南西方向にのびる幅約0.8m、深さ約0.4mのものは、一部で自然木の根痕を切りとおしてつくられていた。

出土した土器は遺構に伴うものが少なく、遺構検出面上において、数カ所の土器集中区としてとらえられた。これらの土器には、赤彩が残されているものもいくつか含まれている。

これまで当地域では土器のみが出土した資料はあったものの、今回のように遺構に伴ったり、遺構に近接した状況で発見されたことは少なく、当時期における生活空間の一側面を考える上で貴重な資料といえよう。

弥生時代中期 弥生時代中期は、②—③区を中心に集落が形成される時期である。3軒の竪穴住居跡が自然堤防の標高の高い位置で発見された。②—①区では、自然地形の窪地がみとめられ、トチの実や自然木とともに多量の土器・石器が見ついている。この地区では標高が低くなるとともに泥炭に近い土壌となり、集落の西側の限界となっている。③区側では、極端な地形の変化は見られないものの、土器の出土量が少なくなり、遺構も認められなかった。

竪穴住居の構造は、不正円形の平面プランの中央に炉を配し、6～8本の柱をもつものである。粟林式土器のほか石庖丁や磨製石斧が出土している。墓坑は住居跡群の南側に2基認められた。1基は、土



第35図 弥生時代中期の集石墓

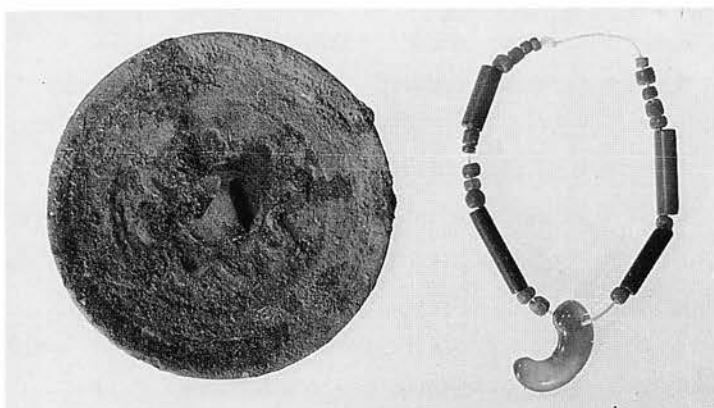
坑底面に少量の骨片と土器片が認められただけであったが、もう1基は丁寧に敷きつめられた礫の上に、すくなくとも16個体分の頭骨と若干の四肢骨を入れ、さらにその墓坑上層に再び礫を敷き4個体分余りの頭骨などが認められるというものであった。小さな土坑内に多量の頭骨が認められる点から、土器を利用しない特殊な再葬墓と考えられる。このほか伏甕を含む土器埋設坑が集落の東側に点在して認められた。

弥生時代後期～古墳時代前期 弥生時代後期には②・③区のほぼ全域に住居跡や墓跡などが展開し、古墳時代前期には①区にまで拡大する。環濠に囲まれた居住域と、その外側に墓域を伴う典型的な集落形態は、少しの変化はあるものの両時期を通じて存続している。

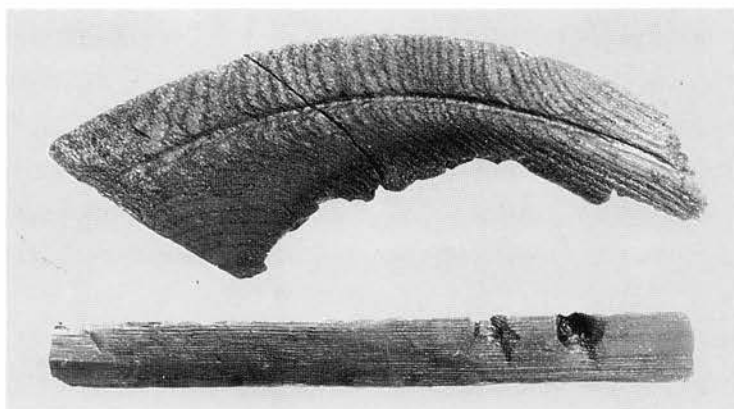
環濠は、東西方向に長軸をもつ楕円形か、あるいは西側の湿地帯に向かって消えてゆくU字形になるものと思われる。北側の限界は、長野市埋蔵文化財センターの調査によって検出されている同時代の溝を想定し、調査区域外に溝の延びる西側の限界を自然堤防から背後湿地への落ち際と考えると、約210m×160m、26,376㎡が環濠内にはいることとなる。溝の断面形は段構造で、V字に近い台形の下底中央にさらに細い溝を掘る形になっている。検出面での幅3.6m、深さ2.2mをはかる。

古墳時代には、上記の環濠が存続していたほかに、その外側に新たな溝がつくられる。しかし、①・③区で部分的に検出されただけであり、環濠になるか否かははっきりとしない。これらの溝の数地点において、覆土中への土器の一括投棄が認められた。

竪穴住居跡は、①区では環濠の外側にも展開しているが、墓域の広がる③区東部では認められなかった。平面形は隅丸長方形か隅丸方形を示し、4本の主柱穴を持つ。柱穴間から住居中央に地床炉を持つものが大半を占め、規模は、一辺10mをはかるものから4～5m



第36図 古墳時代土墳墓出土の鏡・玉



第37図 古墳時代井戸出土の木製高杯・火錐臼

のものまで存在する。大型の住居は②区に多く、東側環濠に近づくにつれてしだいに少なくなっていく。一般的な住居のほか、一辺5m以下の竪穴で、炉はあるものの柱穴が明確でない例が存在する。出土遺物では、径3.3cmの小型重圈文鏡、銅鏃、管玉、勾玉などがなんら特別な状況を示さず、土器片などともに覆土中より出土している点が注目されよう。

井戸跡は集落内に点在しており、竪穴住居跡をグルーピングする目安となる可能性もっている。素堀の例が多く、埋め戻し途上で多量の土器が投棄されている。SK6202は、坑内に井戸枠が残っていた唯一のもので、多量の土器とともに、木製高杯の破片やひょうたんなどが出土している。

このほか貯蔵穴の可能性をもつ、径2m弱、深さ1.5mの円形土坑や、それよりもやや規模の小さい隅丸方形の土坑が点在している。

墓域は、③区の環濠外に存在し、北東部と南東部の2グループにわかれる。今回検出されたのはいずれも古墳時代のものである。北東部のグループは一辺約11m～約12mの方形周溝墓3基が発掘され、南東部のグループでは、長野市教育委員会が以前調査した前方後方型周溝墓の溝の一部などが検出された。後者のグループ内の墓坑（溝を伴っていない）からは径8.3cmの獸形文鏡一面と、めのう製勾玉付き首飾りが出土している。

7世紀代および奈良・平安時代 7世紀代の遺構としては、5軒の竪穴住居跡が確認されている。出土資料は土器が中心で、宝珠つまみがつき、内側にかえりのつく須恵器の蓋などがみられ、7世紀でも中ごろ以降のものであろう。

奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・墓跡・土坑などが検出された。竪穴住居跡は269軒にものぼり、遺構・遺物数では他の時期を大きく上まわっている。

多くの遺構は、自然堤防上の高所にあたる②・③地区の全域に広がって認められた。しかしいっぽうでは、溝などの区画によって宅地が割りあてられていたためか、竪穴住居が密集して検出された場所があり、複雑な切り合いを示すところが多かった。時期的には、平安時代の中でも9～10世紀にかけての資料がほとんどであった。

竪穴住居跡SB7025や井戸跡SK6345をはじめ、いくつかの遺構の埋土は、粗い砂のみが堆積した状況を示していた。この砂の中には光が丘窯式の灰釉陶器が伴っていた。また砂の供給源は千曲川の可能性が強くなっている。このことから、篠ノ井遺跡の遺構を埋めた砂は、石川条里遺跡の平安時代の水田を覆った砂と同じであった可能性も考えられる。

注目されるべき遺構としては、一辺90cm大の掘り方を有する大型の掘立柱建物跡があげられる。これは②—1地区で検出されたもので、総柱建物を含む7棟以上が南北方向を基軸として並列した状況を示しており、それぞれが建て替えをおこなっていた。これらは倉庫などを想定するのか、居住空間とするのかは整理を進める中で検討していきたい。

また、今回の調査では、集落を縦横に走る溝跡を多数検出した。大溝にはテラス状の施設が数か所にあり「手洗い場」などの可能性がある。また、溝の埋土中には多くの牛馬骨が散乱していた。土器片や炭化物の投棄と大きな差は認められず、廃棄されたものであろう。一点だけ

意識的にあごに穴のあけられた例があり、「まつり」に用いられた可能性を示している。

墓坑は、集落内に散在するかたちをとっており、②—1地区では人の墓のほか埋葬獣骨も認められた。

出土遺物では、土師器、須恵器、灰釉陶器があり、黒色処理された三足盤や緑釉陶器がわずかに出土している。文字関係では、「峯」の朱書や刻書がまとめて出土したほか、「刀」「の」「吉」「兪」「典」などの墨書・刻書がみられた。

土器以外では、「大半」と記された印の可能性をもつ銅製品、石製丸靱、金銅製巡方などが注目されよう。

中世 現耕作土が深くまで達していたため、井戸跡は多く検出されたものの、建物などの遺構はとらえることができなかった。

成果と課題 今年度は、千曲川の後背湿地から自然堤防上までを通して調査することができ、自然堤防の形成過程とそれに対応した各時代の土地利用の状況を確認することができた。冬季まで発掘調査がつづいたため、資料の整理がほとんど手についていない。まずは基礎的なデータの整理を優先させ、その後、各時代の評価をおこないたい。

(黒岩隆・寺内隆夫・西山克己)



第38図 篠ノ井遺跡群の掘立柱建物跡



第39図 銅印拓木



第40図 篠ノ井遺跡群②—3・③区古代面の発掘状況

(8) 松原遺跡

所在地 長野市松代東寺尾字北堀3626-1ほか
 調査期間 平成元年4月12日～平成2年2月15日
 調査面積 9,200㎡ (実質45,600㎡)
 遺跡の立地 千曲川の自然堤防上
 時代と時期 弥生時代中期後半から後期, 古墳時代前期, 奈良・平安時代, 鎌倉時代, 室町時代

遺跡の特徴 弥生時代中期後半, 後期, 古墳時代前期, 奈良・平安時代の集落

主な出土遺物

弥生時代中期後半

土器 (壺, 甕, 鉢, 高杯, 他), 石器 (打製石鏃, 磨製石族, 磨製石斧, 打製石斧, 剥片石器, 石包丁, 石剣), 玉類 (管玉, 勾玉), 骨製品 (腕輪), 獣骨 (鹿), 木製品 (杭, 板材), 自然遺物 (トチの実, ドングリ, クルミ)

弥生後期

土師器 (壺, 甕, 鉢, 高杯, 蓋, 他), 玉類 (ガラス小玉, 管玉), 鉄器 (不明)

主な検出遺構

遺構	時期		古墳時代前期	弥生時代後期	弥生時代中期後半	計
	中世	古代 奈良・平安時代				
竪穴住居址	0	314	6	21	56	397
掘立柱建物址	7		0	0	0	7
墓	16		0	0	29	45
土坑	多数		4	6	多数	多数
溝	43			1	多数	多数
井戸	31		1	1	0	33

古墳時代前期

土師器 (壺, 甕, 小型器台, 小型丸底土器, 有段口縁鉢, 他), 鏡 (舶載品)

奈良・平安時代

土器 (土師器, 須恵器, 灰釉陶器, 緑釉陶器, 白磁), 鉄器 (鏃, 刀子, 鎌, 紡錘車, 斧, 馬具, 他), 鍛冶関係資料 (羽口, 鉄滓), 銅製品 (帯金具, 他), 石製品 (砥石, 丸鞆), 鑄造関係資料 (鑄型, 埴塼), サイコロ (石製), 炭化穀物 (麦, 米, 豆)

中世

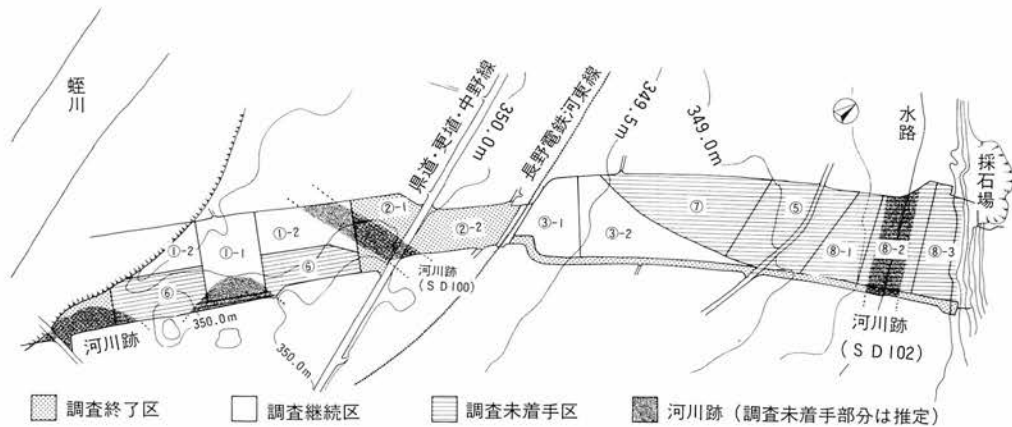
土器 (土師器, 青磁, 白磁, 古瀬戸, 珠洲系陶器, 内耳鍋, 他), 五輪塔, 石臼

遺跡は, 善光寺平南東部の, 北側を金井山, 南側を通称愛宕山によって限られた, 千曲川右岸の三角形の自然堤防上に位置する。西側は, 地蔵峠より流れ出て, 松代扇状地を形成する蛭川によって削られている。この一帯の標高は350mほどで, 平坦な地形である。現在は, 集落としては利用されておらず, 一面に畑地が広がる。周囲の平地に張り出した尾根の頂部には, 金井山城, 寺尾城などの中世後半期の山城のほか, 小規模な古墳が存在する。その内容については, 未調査の部分が多くははっきりしない。16世紀末に成立する海津城を中心とした城下町松代からは1kmほど離れている。このような現地形が確定したのは, 今回の調査の過程で, 奈良

時代になってからということがわかった。付近一帯の地形の変遷を明らかにするのは今後の課題である。なお本遺跡は、以前より、弥生時代中期後半、古墳時代後期、平安時代の遺物が出土しており、比較的規模の集落遺跡であることが調査以前から予想された。

調査は、4月12日より開始した。途中当初予想されなかった後述するような3面にわたる遺構面の存在が確認されたため、調査計画は変更を余儀なくされ、異例ともいえる1月から2月にかけての厳冬期間の発掘調査を行うこととなった。また、工事工程の関係から①から⑧区に調査区を分けて行ったため、その進展状況はまちまちである(第40図)。基本層序は、第41図に示すが、調査区全体には広がらず、洪水の影響と思われる砂層は東側ほど薄くなる。規模の大きな洪水が2から3回程度想定でき、また小規模の洪水が幾度となくあったことが、河川跡の堆積状況よりわかる。また、特に長芋の栽培による深堀耕作のため、攪乱を受けている部分も多い。遺構は弥生時代中期後半以降、断絶が認められる時期がいくつかあるが、中世後半(16世紀)まで認められる。水田跡などの生産遺構は本年度の調査では認められず、一貫して集落として利用されたことがわかった。時代ごとにその内容を概観していくことにする。

弥生時代中期以前 縄文時代中期初頭、中期後半、後期中葉、弥生時代中期初頭に土器片が出土するが、遺構は検出できない。



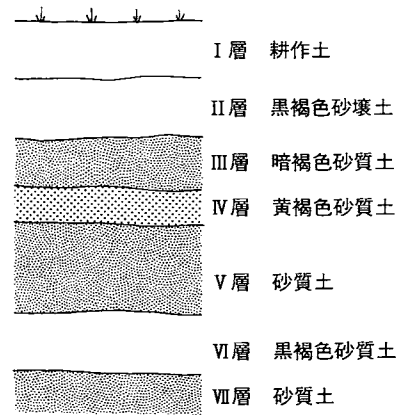
第41図 松原遺跡の発掘状況図

弥生時代中期後半 遺構は密集度と、その内容に差はあるが、ほぼ調査区全体に分布、VI層中で検出される竪穴住居跡の形態は、円形、正方形、隅丸長方形、楕円形(小判型)と様々であり、重複関係もみられることから、時期差があると思われる。これらの住居跡群は2本の河川跡によって大きく区分されるとともに、大小の溝によって区画される。この他、住居跡と重複するかたちで、径10m前後の円形に巡る溝、杭列、直線的に走る細い溝が目される。墓としては、土壙墓のほかには礫床木棺墓が3ヶ所(①-2, ②-2, ③-1)にまとまって28基み

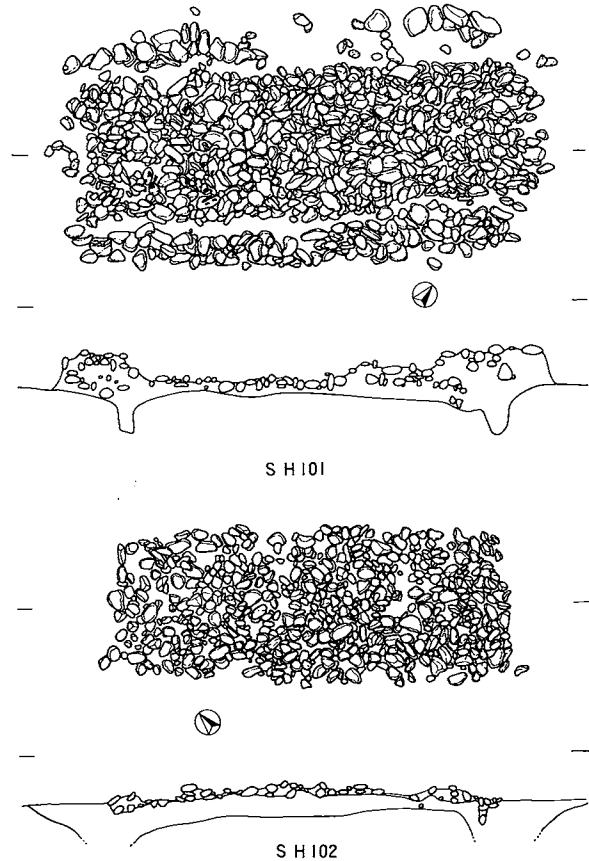
られる（第3図）。この礫床木棺墓はこれまで類例が少なかったが、今回このようにまとまって発見されたことは墓制を研究する上で重要な資料になると思われる。他に、柱穴群、焼土や炭が多数投棄された土壌など、従来あまりみられない遺構が多く検出された。この時期調査区内で、幅30mほどの河川跡が発見されており、現地形と大きく異なることが予想され、小さな「田切り地形」に集落は立地していたと思われる。なお河川跡は、杭列、敷石遺構などがみられ、生活する上でなんらかの役割を果たしたと思われる。同時に多量の土器の投棄がみられ、生活で不用物の捨て場として利用されていたことがわかる。しかし、この中に自然木が良好に残存しているのに対して農耕具などの木器はみられない。該期のこれほどの規模及び、内容を持った集落は県内では発見されておらず、集落を研究する上で重要な資料となるであろう。

遺物の面では、栗林Ⅰ式から吉田式の土器が多量に発見されており該期の土器研究を進める上で良好な資料となるであろう。また石器も、製品をはじめ剥片なども、多量に発見されており、注目される。この他自然遺物として、獣骨が多数見られる。

弥生時代後期 古墳時代前半
遺構の分布は、弥生時代中期後半と大きく異なり、箱清水式土器を出土する後期はまだ埋没していない河川跡に囲まれた、①-1、①-2区の狭い範囲に分布するのみであり、Ⅳ層中で検出される。古墳時代前半（4世紀末）は、①-2区に散漫に分布する。両者は、河川跡の堆積状況を見る限り、連続していない。この時期、河川跡は埋没途中であるが、多量の遺物が投



第42図 松原遺跡の土層図



第43図 松原遺跡①-2区の礫床木棺墓（1：20）

棄されている。

奈良・平安時代 遺構は、竪穴住居跡を主体としており、その密度に差はあるが、今回の調査区全体に分布し、II・III層中で検出される。時期的にみると、8世紀中頃に①・⑥区に集落が形成されはじめ、その後徐々に東部に拡大を続け、10世紀代にピークを向かえ調査区全体に遺構が広がる。11世紀に入り再び西側部分（①、⑥区）に分布を狭め、12世紀前半まで継続される。5～7世紀の遺構・遺物は発見されておらず、現時点では8世紀を松原遺跡における大きな開発の画期としてとらえて良さそうである。それを証明するかのように、内部には、多数の溝が集落内を区画するようにみられるが、古墳時代前半とは全く異なった方向につくられる。このほか遺構としては、骨が依存する土壇墓、馬の埋葬遺構もいくつかみられる。遺物としては、8世紀から12世紀にかけての土器が連続して発見されており、該期の編年研究をする上で良好な資料となるであろう。このほか注目されるのは、仏具の鑄造関係資料である。製品は発見されていないが、その中には、磬などがある。これらに関する明確な遺構は検出できない。この他、1辺5mmほどの小型の石製のサイコロが出土している。

中世 耕土の直下で発見される。柱穴群、井戸、溝、人骨をともなった土壇墓が、調査区全体に散漫に広がる。時期的にみると、13世紀から16世紀と大きな幅を持っている。集落が途絶える時期が、海津城の築城、それにともなう城下町の形成と一致しており、関連が注目される。遺物としては、五輪塔が注目される。関連する遺構は発見されていないが、平成2年度の調査が注目される。（原 明芳）

(9) 小滝遺跡

所在地：長野市松代町大室字小滝1909ほか

調査期間：平成元年10月9日～平成2年1月11日

調査面積：6,000m²

遺跡の立地：奇妙山系尾根裾の緩斜面と千曲川の自然堤防・後背低地

時代と時期：縄文，平安，中世（近世？）

遺跡の特徴：山城裾に位置する中世末集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構 時期	竪 住 居	建 物 立 柱	墓	柱 穴	土 坑	溝	その他
中世末		5棟 以上	10 (内1基 馬墓)	約 640	40	10	竪穴建物3，棚2 建物墓壇2 井戸？2 石列・石垣19
平安	3						
平安以前					3		焼土跡8

焼物：土師器，須恵器，中・近世の土器・陶磁器

石器・石製品：石臼，石鉢，砥石，五輪塔

金属製品：銭貨，鉄鍬

その他：人骨，馬骨

遺跡のある牧島付近は，奇妙山系の二つの尾根にはさまれた沖積地であり，山際を大きくカーブして旧河道が流れて，その河道内外に微高地，さらに山際の微高地背後に低地を形成している。この内側の微高地が現牧島集落であり，本遺跡は現集落と旧河道をはさんだ山際の微高地にある。

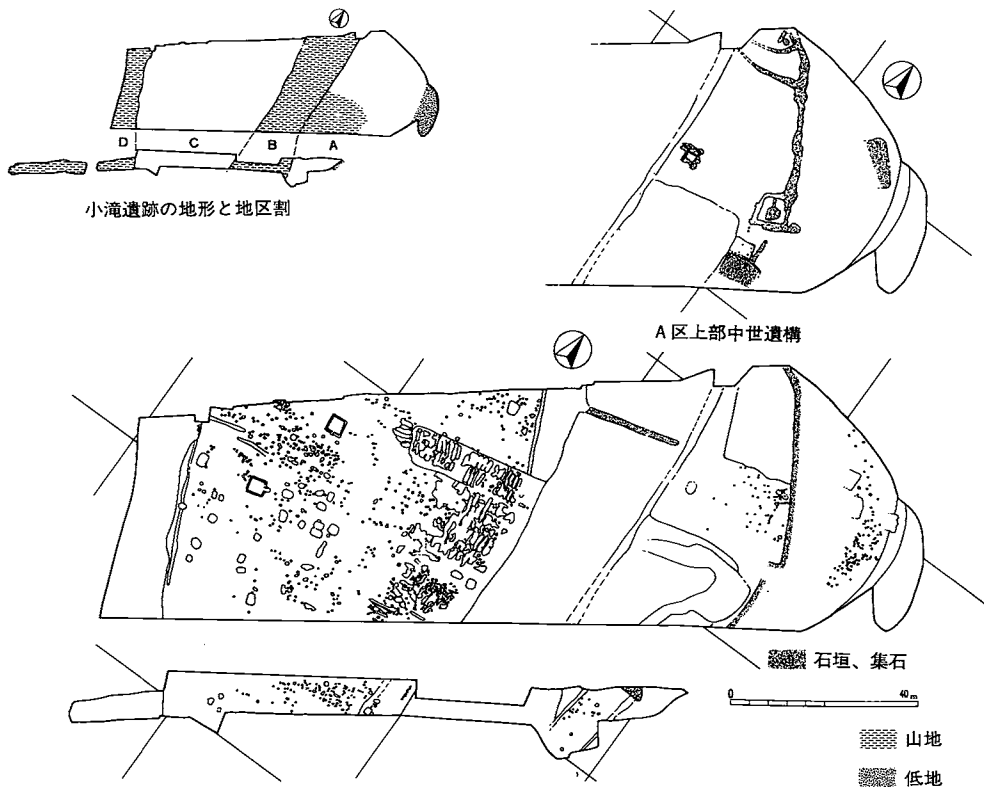
本遺跡の発掘調査範囲は関越自動車道のトンネル坑口にあたり，旧河道から尾根脇の微高地，後背低地，山までを横断するかたちになっている。なお，今年度の発掘調査は側道部分と本線の一部を対象とし，残りは次年度以後に送られた。

調査は側道部分にトレンチをいれることから開始し，このトレンチによって遺跡は地形上大きく千曲川により形成された微高地，後背低地，山の崩れで形成された緩斜面の三つに分けられることが判明した。さらに，微高地は砂礫を主体とし，その上に粘性の強い細砂が覆って，微高地を拡大しているが，遺構は細砂の覆う以前の砂礫基盤の微高地に展開することがわかった。これらの所見によって，砂礫を主体とする微高地を中心に面的調査を行うことにし，調査地区は山裾の緩斜面をA，後背低地をB，砂礫より成る微高地をC，その前の旧河道へ連続する低地をD区と呼称した。

精査の結果，A区は平安・中世末の遺構をはじめ，時期不明ながら，焼土跡等を検出した。B区で礫が帯状にならぶ遺構を検出し，C区は中世末の居住遺構を多数検出した。つぎに，時期別に本遺跡の概要をのべることにする。

中世末の遺構はA・C区で確認され，とくにA区では石垣をつくる等の大規模な整地をおこなっているようである。検出遺構には堀立柱・竪穴，基壇状の基礎をもつ建物，墓（火葬墓？，土壙墓，礫積み墓），馬の墓，石垣等がある。

堀立柱建物は同じ場所で数回建て直されるものがあるが，そこに壁に石を積み上げた竪穴建物が近接して位置するものもあり，本遺跡の性格や構造を解明する上で注目される。



第44図 小滝遺跡の平安時代以後遺構全体略図 (S = 1 : 1,600)

ほかに注目される遺構として墓がある。墓はC区で検出されたが、配石をもつ墓、土壙墓、火葬骨を埋納した墓が3基集中する以外には小規模な土壙墓と火葬墓?が散在し、馬1頭が埋葬されている土壙も検出されている。出土遺物に内耳鍋と類似した胎土や焼成の風炉、青磁盤、雁又の鉄鏃、大量の内耳土器やロクロ整形のかわらけがある。本遺跡の中世末の遺構は背後の山城(霞城)と同時にあった可能性が強く、尾根の反対側にある村東山手遺跡とともに山城との関係を検討する必要があると考えられる。

平安時代ではA区で数軒の竪穴住居跡が検出され、小規模で短期の住居跡と考えられる。

平安以前は時期不明ながら、A区で平安以前の土層で数基の焼土跡、さらにその下の面で不整形の土坑数基が検出された。これらの遺構は遺物を伴わず、時代は不明である。また、明確な遺構は把握されなかったが、A区で古墳時代の土師器、弥生土器、縄文土器、C区では中世前半の青磁碗、珠洲系摺鉢の破片も採取されている。(市川隆之)

(10) むらひがしやまて 村東山手遺跡

所在地：長野市松代町大字大室字村東山手233番地ほか

調査期間：平成元年9月1日～同年12月25日

調査面積：2,500㎡

遺跡の立地：奇妙山西麓の崖錐末端

時代と時期：縄文時代前期～中世

遺跡の特徴：弥生時代土坑墓，奈良時代集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構時期	竪穴住居跡	土坑	土坑墓	その他
弥生			3	ピット130 溝2 石組1
奈良	1			焼土跡3
不明		9		

土器：縄文後期土器，弥生土器，土師器，須恵器，内耳土器

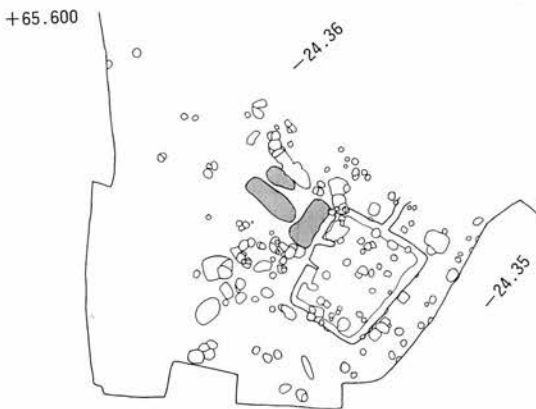
石器：石鏃，砥石

金属器：鉄剣

その他：ガラス小玉

遺構は奇妙山腹に深くはいりこむ谷地形の末端部分で、千曲川自然堤防の後背湿地に接する。大室古墳群大室谷支群は調査地より上方の谷と山腹および尾根上に分布する。今年度の調査地は西側尾根直下の部分であり、この尾根上には中世山城霞城がある。

調査の結果、弥生時代以降の土器の散布が認められたが、山腹からの崩落および崖錐面の押し出しによる二次的なものと考えられた。検出された溝2本および石組はこの堆積面上にあり、同一面での内耳土器の出土などから中世以降と考えられる。住居跡が検出された部分は小地形のうえで土石の移動が少なかったと思われる部分である。住居跡周辺にはピットが重複して多数検出され、柱痕跡を残すものもあったが、建物としてのまとまりをとらえることのできたものはない。弥生時代土坑墓は墓坑縁に礫を並べ簡易な石槨ともいえるような状況である。坑底より鉄剣・ガラス玉などを出土した。この周辺の検出面においては丹塗高杯片が比較的多く検出され、墓跡にかかわるものであろう。次年度以降の調査予定地でも相当の遺物散布がみられるので、その調査によって遺跡の全体像も明らかにされるであろう。(土屋 積)



第45図 村東山手遺跡の遺構配置(1:250)(アミ：弥生墓)



第46図 弥生時代の土坑墓

(1) 大室古墳群

所在地：長野市松代町大室村東山手448ほか

調査期間：平成元年9月28日～12月25日

調査面積：600㎡

遺跡の立地：大室谷扇状地の末端部分

時代と時期：古墳時代後期

遺跡の特徴：大室古墳群大室谷支群の末端部に位置する積石塚と土石混合墳。

調査古墳の概要と出土遺物：

21号墳 未調査。破壊されているが、石室の一部が残存するにとどまる。

22号墳 未調査。破壊されていて所在位置も確定できない。

23号墳 墳丘が残存していて、横穴式石室が開口していた。調査の結果、直径17～18mの土石混合による円墳であり、墳裾に石垣をめぐらせていることが判明した。石室は北に向かって開口し、内法長7.6m、羨門幅1.35m、玄室中央幅1.5m、奥壁幅1.65m、高さは玄室中央で2.15mをはかる。平面プランは両袖型を呈する。玄室床面には小円礫を、羨道部には板石を敷きつめる。出土遺物は、玄室から鉄鏃38本、墳丘から土師器、須恵器片がある。

24号墳 墳丘実測終了。石室調査中断。墳丘から須恵器片を検出。積石による円墳。

25号墳 墳丘実測終了。積石による円墳。墳裾東側にトレンチを設定したのみで、墳丘の規模を探索したにとどまる。

ニ号墳 墳丘の一部と石室が残存していた。復原径14mの土石混合による円墳。横穴式石室は全長4.7m、羨道部幅1.05m、玄室中央幅1.5m、天井石を抜き去られてはいるが推定高1.45mばかりある。床面は玄室・羨道とも板石を敷く。玄室から耳環2個の出土をみた。(大塚初重・小林三郎)



第47図 大室23号古墳の全景

(12) ^{かわ だじょうり}川田条里遺跡

所在地：長野市若穂川田字寺前2990番地ほか

調査期間：平成元年4月24日～同年12月27日

調査面積：49,700㎡（総計99,350㎡）

遺跡の立地：千曲川右岸の後背湿地

時代と時期：弥生時代中期～近世

遺跡の特徴：弥生時代中期～近世に至る水田跡。弥生時代中期初頭の土器集中区。

主な検出遺構

遺構 時期	水田区画 の枚数	大畦・ 杭列	溝・ 流路
弥生	約 150	9	4
古墳	約1,050	23	8
平安	約 100	4	3
中・近世	約 60	5	7

主な出土遺物

土器：弥生中期・後期，土師器，須恵器，灰釉陶器，内耳鍋，中・近世陶磁器

石器：打製石斧，石鏃，石臼

石製品：勾玉，管玉

木製品：農耕具，下駄，曲物，建築部材，梯子

金属製品：銭貨，煙管

自然遺物：獣骨，クルミ

調査の経過

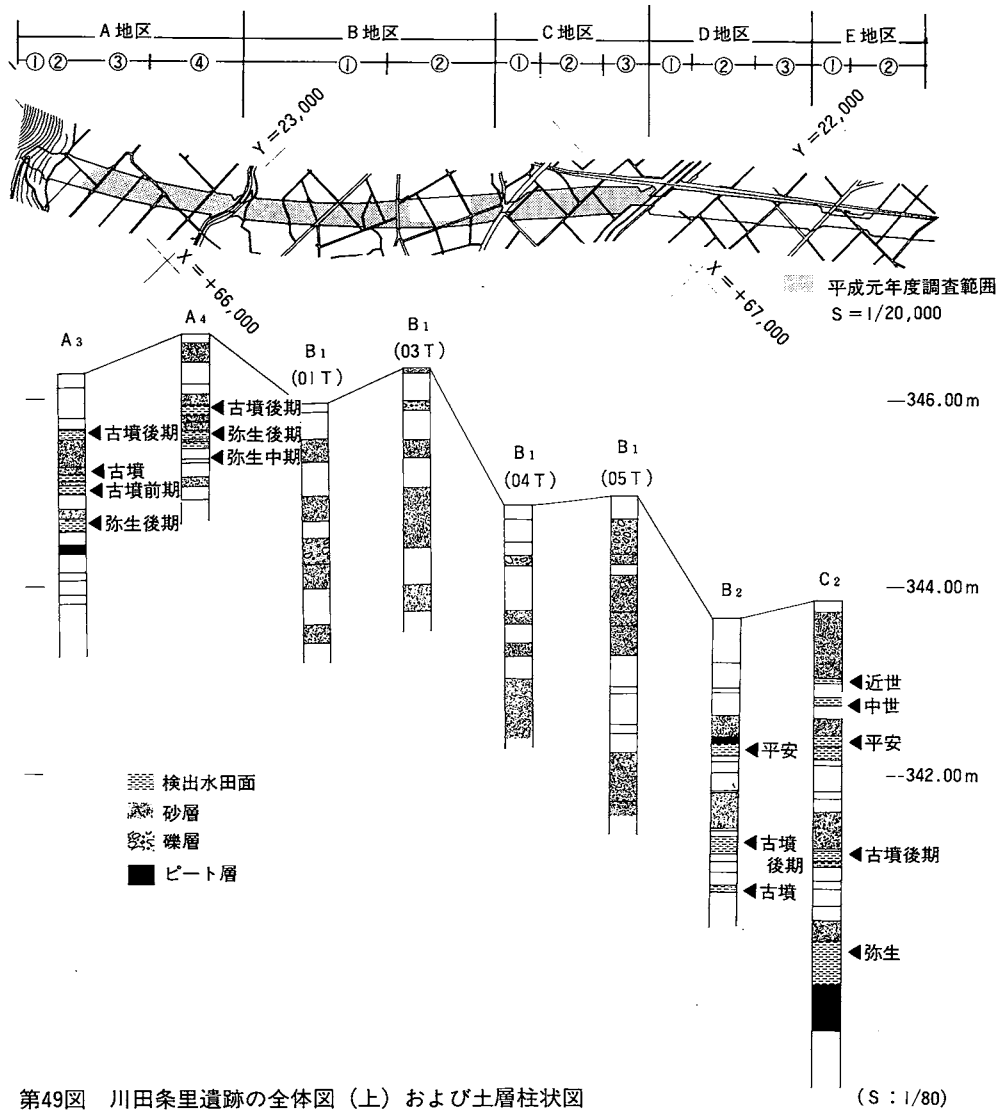
川田条里遺跡について、いままでに調査されたのは、昭和57年に、長野市教育委員会によって、圃場整備事業に伴う緊急調査がおこなわれただけであり、遺跡範囲などは不確定な部分が多く、年度当初、まず遺跡の範囲を確定するために、本年度工事発注予定の範囲にトレンチを入れた。地区名の設定にさいしては、河川、地形と、調査上の都合からA～Eまでの5地区を設け、さらに各地区とも必要に応じて1～4の範囲内で細分した（第49図）。以下、地区ごとに地形・地質の状況を含め遺跡を概観しておこう。

A地区 大星山系の山裾から赤野田川までの範囲で、遺跡の西端にあたる。地形は、赤野田川から山裾にむかって北西方向に傾斜している。本年度の調査は、赤野田川より山裾にむけておこない、山裾の高まりから、一部低地にかけては来年度調査となった。本地区では、圃場整備によって平安時代以降の土層が大部分消滅しており、弥生～古墳時代の水田跡の調査が中心となった。

B地区 赤野田川右岸から県道長野・菅平線の間。本地区は、両脇に広がるA・C地区の現在の水田地割が東西南北にそって条里景観を想定させるのにたい



第48図 長野市若穂の全景



第49図 川田条里遺跡の全体図(上)および土層柱状図

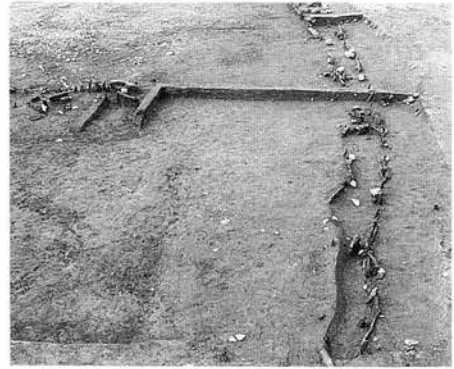
し、ふぞろいな水田地割であったり、微高地状の高まりが観察されたことから、石川条里のように生活域の存在が予想された。しかし、トレンチ調査の結果、赤野田川から東約400mの間は、砂礫層が何枚にもわたってみられ、この区間が地形的に不安定であったことが判明した。したがって、この地区はトレンチ調査をもって調査終了とした(B1地区)。ただし、C地区に近づくにしたがって水田面の検出が可能になってくる(B2地区)。本年度は東端一部を調査し(B2東地区)、古墳～平安時代の水田跡を検出した。残りは来年度調査。

C地区 県道長野・菅平線から保科川の間。現耕土下の砂層約80cmを除去すると江戸時代の水田跡が検出され、以下3.5mの間に弥生時代まで5面の水田跡を調査した。なお、保科川寄り約80mは、砂礫層の堆積が著しく、水田面の検出ができず、トレンチ調査のみで終了した。

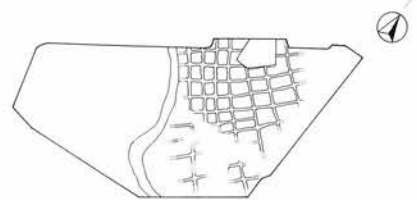
弥生時代 A地区(赤野田川付近)で弥生時代中期の土器集中と焼土址3基が確認された。

本地区では該期の遺構・遺物が認められた地点が地形的に微高地状の高まりをもつ箇所であったことは当時、わずかながらの高まりに生活の場をもとめていたことが推測される。面的調査の結果、A地区では2面、C地区では1面（杭列のみ確認）の水田跡が検出されたが、なかでもA地区で検出された水路跡より弥生中期後半の甕が出土したことからこの頃より本遺跡内で水田経営が開始されたと考えられる。検出された水田跡は砂層に覆われており、砂層が厚く堆積している部分で畦畔が良好な状態が残っていた。（赤野田川付近は自然流路により破壊された箇所が多い。）弥生時代の水田跡はA地区では地形の傾斜と同じ方向で区画されて、水路跡も自然流路に沿う形で構築されていた。一方、C地区では蛇行する自然流路に平行もしくは直交する形で畦畔がつくられている状況がみられた。以上のことから水田のあり方を推測すると、古墳時代の水田跡で認められた大畦は弥生水田ではみられず、いまだ出現していないと思われ、水田の占地は、自然地形の制約のなかで反面これ利用しつつ基本的に小畦を用いた区画であったと考えられる。

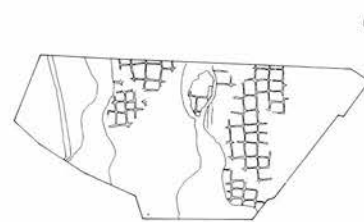
古墳時代 面的調査を実施したA・B・C地区のほぼ全域から水田跡が検出された。A地区では3面、B・C地区で各々1面確認できたが、弥生時代の水田跡と同様に厚い砂層に覆われて、畦畔の残りは良好であった（赤野田川付近を除く）。検出された水田跡を時期的に概観すると、A地区で一部検出された4世紀代の水田跡は、大畦のみによって構成されており、大畦には補強・強化を目的として木材が芯材として用いられていた。このことは、この水田跡が該期では一般的な所謂「小区画水田」とはことなり、大畦により大きく区画され、形状が不規則である点にも注視すべきであるが、それより大畦の出現と芯材としての木材の使用という2点に水田経営を考えるための特徴があると思われる。まず水田の立地について古墳時代と弥生水田とを比較すると基本的には自然地形の傾斜を利用している点では同じで、地形に依存する水田経営を想定することができる。しかし今回調査された古墳時代後期（6～7世紀）の水田跡をみると、一部（C地区）では地形を大幅に改変して水田をつくっており、あわせて芯材を用いた大畦と小畦の両者により区画された水田が展開している様子がうかがわれた。前記したが、4世紀段階に芯材をもつ大畦の出現を指摘したが、6～7世紀段階に地形を改変してまでも水田をつくる意味、そこから派生する土木技術の向上、さらに、大畦・小畦の組み合わせによる計画性ともみえる水田経営を本時代後期の画期と捉え



第50図 弥生時代の水路



第51図 古墳時代の水田跡（A地区） $s=1/2,000$



第52図 弥生時代の水田跡（A地区） $s=1/2,000$

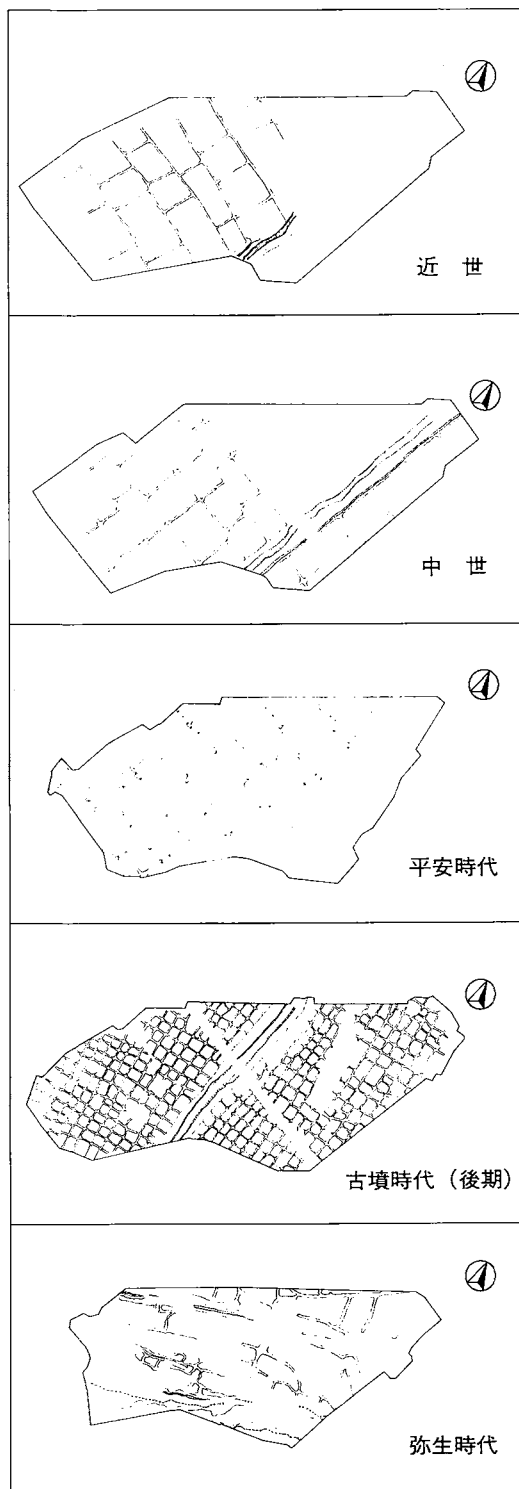
たい。遺物は比較的木製品が多く、梯子などのほかに大畦の芯材として建築部材・農耕具が転用されていた。また、C地区では杭列内より勾玉・管玉・手づくね土器など一見祭祀を思わせる遺物が出土した。

平安時代 B2東地区とC地区で調査された。C地区では、砂層(18層)に覆われた状態で発見されたのに対し、C地区に西接するB2東地区では、18層の下にピート層、それを除去した状態で検出された。その結果、B2東地区の水田は、平安時代の初期の段階で、ピートの発達から推定すると、一時湿地になり、水田は休止したと考えられる。その一方で、C地区では水田は継続し、平安時代中頃18層に覆われる。つまりB2東地区で調査された水田と、C地区で調査された水田では時間的に、前者が平安時代前半、後者が平安時代中頃という時期差としてとらえられる。

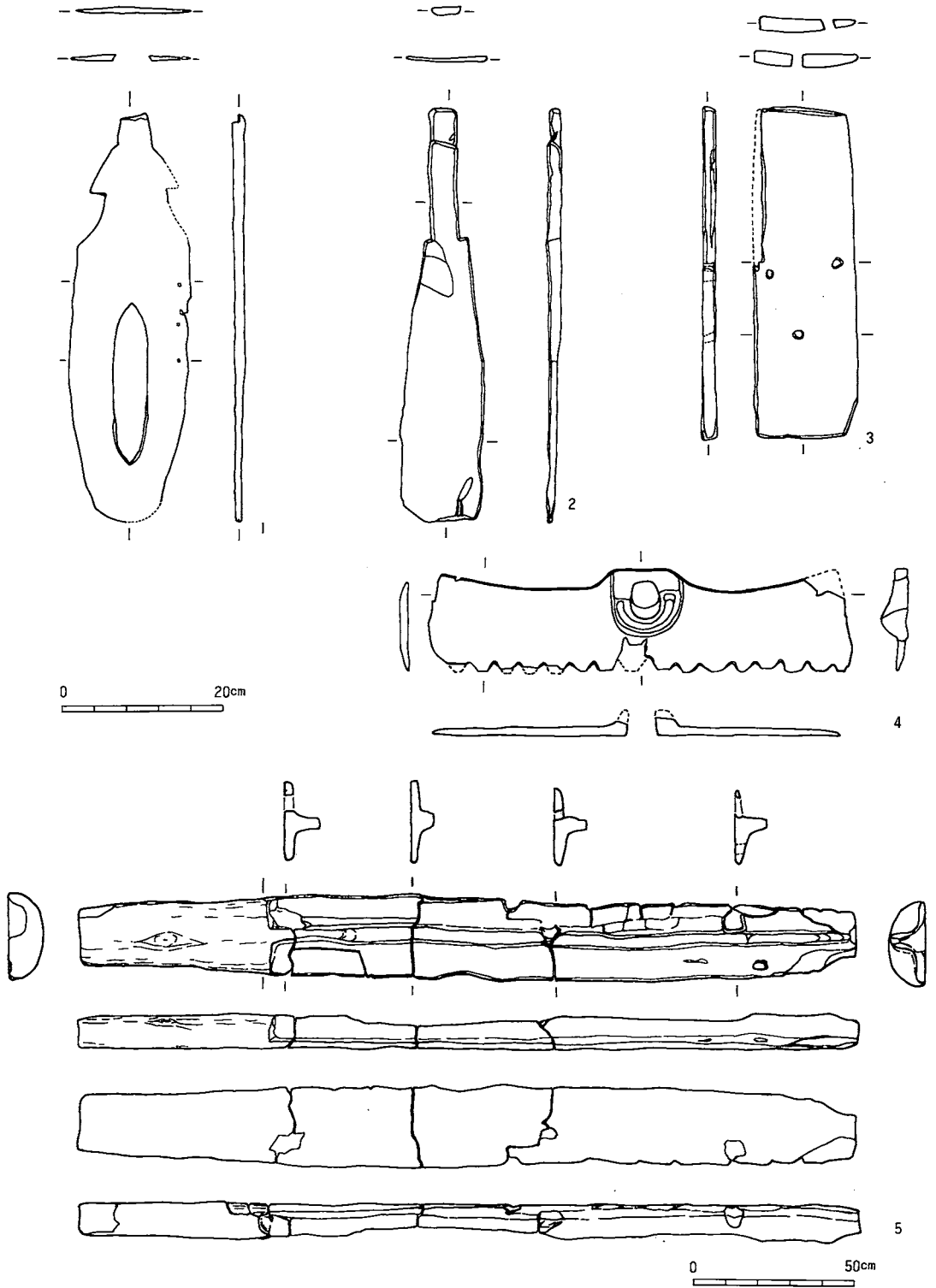
さてこのB2東地区水田とC地区水田の二つを比較してみよう。まず、水田区画の大きさという点では、1辺が10m程、つまり1区画約100㎡とほぼ同じ大きさを持つ。下層の古墳時代後期水田に比べ、5倍強の大きさになり、この時期に水田区画の大きさに大きな変化があったことがうかがえる。

つぎに畦畔の方向についてであるが、B2東地区では北西へふれており、古墳時代の方向に合致するのに対し、C地区では東西南北方向に延び、中世以降現在までの方向と同じになる。このことから畦畔の方向については、平安時代前半と中頃には変化が認められる。

中・近世 C地区において、中世、近世それぞれ1面ずつ水田跡が検出された。中



第53図 C地区水田区画の変遷 (S=1/2000)



第54図 川田条里遺跡出土の木製品実測図

世面においては、はっきりとした畦畔の高まりはとらえられなかったが、田面に足跡が良く残っており、足跡が検出されない帯状の部分の畦畔と推定して水田区画を検出した。時期は、田面から出土した青磁片と、検出面の1層上層に、内耳鍋を出土する層があることから中世前半と考えている。

近世面は、現耕土下約80cmの砂層に覆われていた。水田面の残りは良好で、部分的ではあったが、稲株跡が検出された。また、水田1区画分を畑地に転用している箇所も発見された。

この中・近世の2面の水田区画のあり方は良く似ている。また、大畦、水路の位置もほぼ現在のもものと一致していた。

まとめと今後の課題

今年度は調査上設定した地区のなかで、A～C地区についてトレンチ調査・面的調査を実施し、その成果を時代ごとに概観した。川田条里遺跡は調査対象面積だけで約10万㎡と広大で、トレンチの結果では水田跡が全域にわたって展開していることがわかっている。したがって今回の調査でも多くの成果があったが、来年度調査予定（A・Bの一部、D・E）地区の成果をあわせることにより明らかになることが多分にあると思われる。今年度の調査では広範囲にわたって水田跡を露呈し、C地区では時代的な水田の変遷を把握することができた。

ここで一言触れるならば、A・B・C地区で検出された水田跡・土層断面をみると、川田条里遺跡という同じ遺跡内にあっても土砂の流入経路（保科川・赤野田川・千曲川）・堆積の厚さに異なりが見られ、それは水田のつくり方、水田経営（土地利用）に十分派生したと思われる。したがって、同一遺跡内にあっても水田の占地、構造にちがいが見られる結果を生んだといえよう。

周知の如く県内で12万㎡にもおよぶ水田跡の調査事例はなく、このことから川田条里遺跡の調査には、水田の開始時期と変遷（土地利用の変化）、現条里景観と下部遺構との関連、時代ごとの水田経営の実態、など課題・問題が多く含まれている。今後は、若穂地区に広く展開した水田域が意味するところの歴史的背景と本遺跡の位置付けを検討していきたい。（大竹憲昭・河西克造）

(13) 榎田遺跡

所在地：長野市若穂綿内1952番地ほか

調査期間：平成元年4月14日～8月12日

調査面積：4,000m²

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防及び後背湿地

時代と時期：弥生時代後期，古墳時代後期，奈良・平安時代，室町時代，近世

遺跡の特徴：弥生時代～平安時代の集落，室町時代の環溝屋敷を含む集落

主な検出遺構

主な出土遺物

遺構時期	竪穴住居跡	堀立柱建物跡	柱列	土坑	溝	その他
古墳	2					
奈良	3			73		
平安	22					焼土跡1
室町		4		1,076	14	火葬墓4
近世以降			2		2	水田2

土器・陶器：弥生後期土器，土師器，須恵器，
灰釉陶器，かわらけ，内耳土器，
青磁，古瀬戸，珠洲焼播鉢

土製品・石製品：土錘，羽口，石臼，白玉

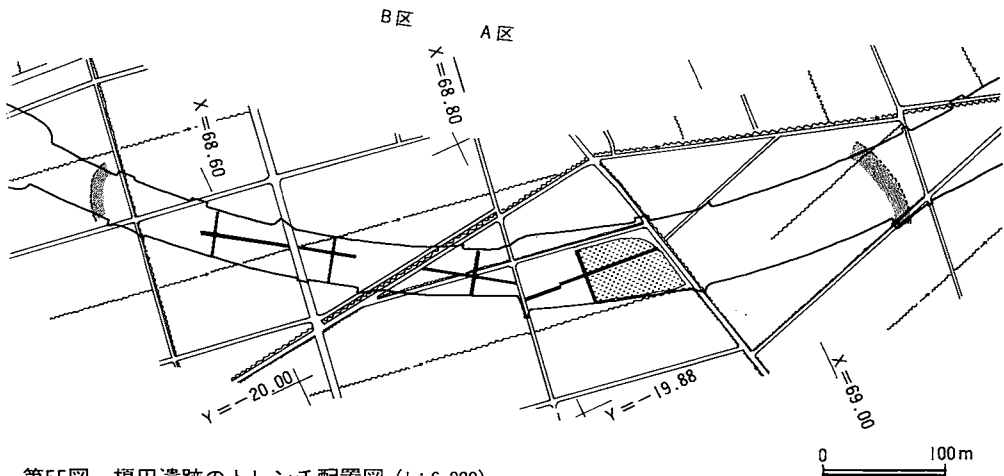
木製品：馬形木製品，曲物，漆器，柱材

その他：ガラス小玉，金環，鉄製紡錘車，鉄滓，
銭貨，人の焼骨・歯，馬骨，桃種

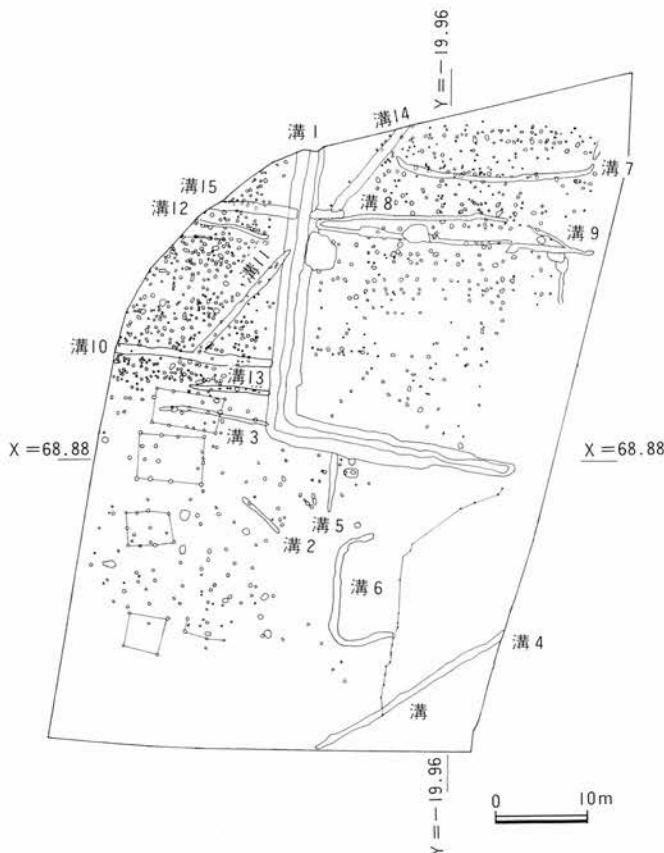
本遺跡は千曲川右岸の後背湿地と，その中に，弥生時代以前に形成された中洲状の微高地上に立地する。従来，榎田遺跡とされていたのは用地外の小面積であったが，平成元年1月の県教委文化課による試掘で，遺構・遺物が広範囲に存在することが確認されたものである。

調査対象の北部・土盛工区をA区，南部の高架工区をB区としてトレンチを設定した。A区，B区の南西部は果樹園・普通畑で，その間は水田となっているが，戦後の耕地整理で原地形とは相当変化している。かって，自然堤防であったと考えられるA区・B区の東勝寺堰の南で遺物が濃密で，中間の湿地帯であったと考えられるB区北部でも，古墳時代の完形土師器甕・建築材等が出土した。

A区より全面調査を開始したが，南半部および北半部の中世面の調査が終了した段階で，本年度調査を終了した。



第55図 榎田遺跡のトレンチ配置図 (1 : 6,000)



第56図 榎田遺跡の中世以降遺構配置図 (1:800)

は鹿角が出土している。

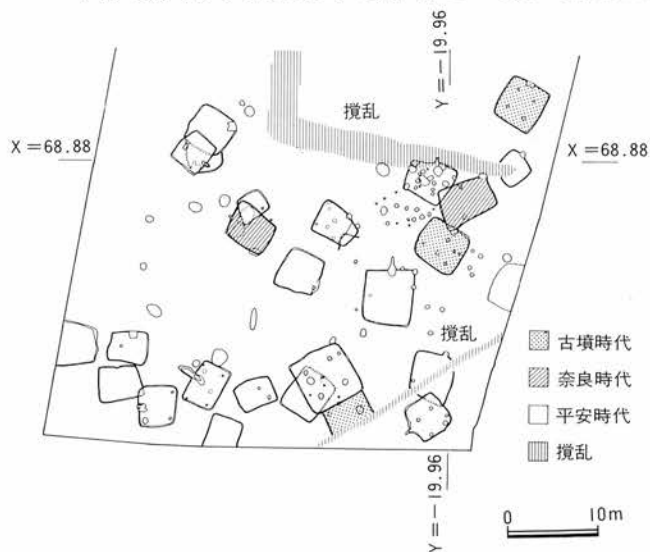
中世以降 室町時代の溝は三期に区分できる。北東-南西方向の溝11・14は同一の溝で最古と考えられ、さらに南西へのびる。ついで溝15号が掘られた。これは環溝としての機能をもった可能性があり、一部を埋め戻して陸橋部をつくる。最終期の溝1 (幅3m、深さ60cm)はL字形であるが、東西方向の狭窄部との境を一部掘り残し、のちに、この部分を埋め戻し、陸橋とする。原地形は東用地外が水田となっていたので、その地形を利用した環溝

弥生時代 全面で後期土器片の出土をみたが、遺構は検出されなかった。しかし、後記の環溝屋敷の柱穴半割時に小型壺等の一括遺物が出土しているため、今回の調査面の下層で遺構が存在することは確実である。

古墳時代 後期の竪穴住居跡が2軒検出され、土師器の坏・高坏・甕・甗等の良好な資料がえられた。該期の遺構に伴うものではないが、金環・ガラス小玉各2点、白玉多数が出土した。こうした遺物が集落跡で出土する点は注目されよう。

奈良時代 3軒の竪穴住居跡を調査し、須恵器、完形短頸壺、甕・坏片、土師器片が出土した。

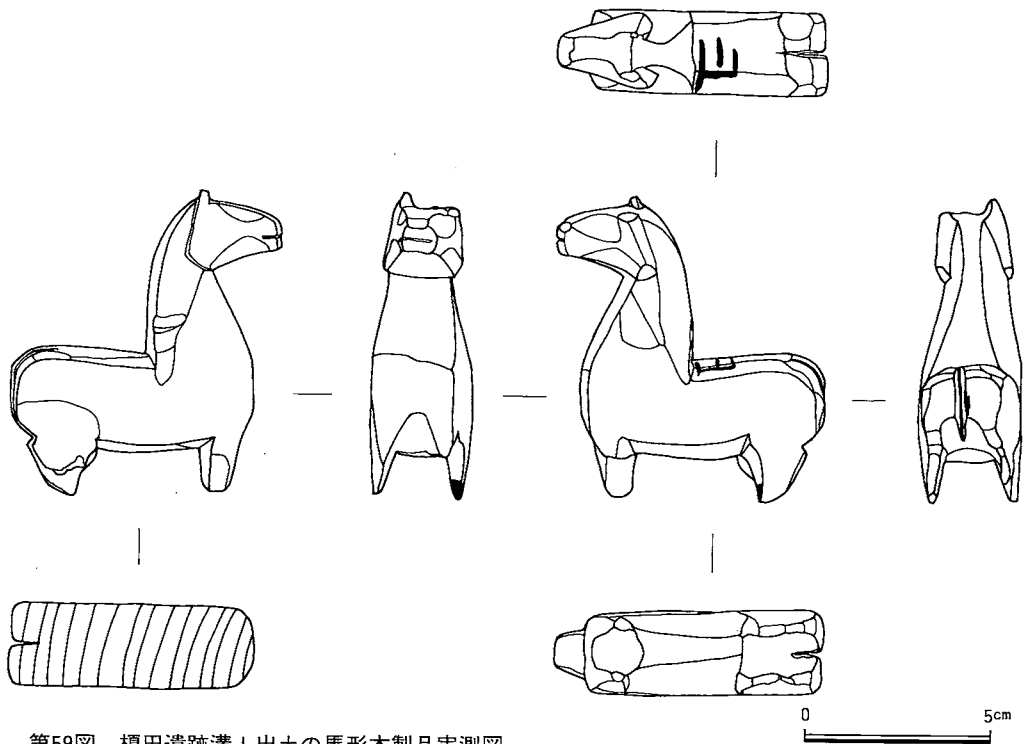
平安時代 22軒の竪穴住居跡を調査した。5号住居跡と、これに接する土壌で鉄滓が多出したが、他の遺物が少なく鍛冶工房かと考えている。26号住居跡から



第57図 榎田遺跡の古代遺構配置図 (1:800)



第58図 榎田遺跡出土の馬形木製品



第59図 榎田遺跡溝1出土の馬形木製品実測図

屋敷であったと考える。環溝内の柱穴群は外部のものに比べ、掘り方も深く、大きく、底に礎板と同様の機能を持つ平石を埋設したり、角材の柱根を残す柱穴、柱根下に漆椀が埋納されている柱穴が含まれる。後者は起工時の儀式で意図的に埋めた可能性も考えられる。調査段階では見出せなかったが、検討すれば、相当な規模をもつ堀立柱建物が数棟分離されよう。溝1の埋土下層からは内耳土器、かわらけ、漆椀、曲物等と馬形木製品が、上層から青磁片が出土した。

馬形木製品は高さ8.1cm、全長7.2cm、胴長6.5cm、厚さ2.2cmの柁目板を用いている。口と臀部には刻目を入れ、背には鞍、完全な形で残っている左後脚の前方下端に蹄、臀部刻目の右に尾を表現する墨書が残る(第59図)。県下では該期の出土例がなく、民俗例でもあれば、御教示頂きたい。非常に写実的であるため、玩具ではないかと考えている。

これら出土遺物からみて、本遺構群は15世紀の名主級の屋敷で、環溝外の柱穴群は従属農民の家屋とみられる。溝1に直交する小溝は同時に存在し、建物に沿う排水溝であった可能性が強い。

また、南西部には火葬墓4基が散在し、焼骨、歯、銭貨を出土している。

近世以降では柱列2、江戸時代と思われる水田面と、それに伴う溝1条、戦後まで耕作された水田と周囲をめぐる杭列及び暗渠を調査している。

本遺跡の西方500mには戦国時代頃、綿内は勢力をばった小柳井上氏居館跡があり、A区は耕地整理前には小字が通り町であった。上記した中世遺構は同居館跡との関連で理解する必要がある。(伴信夫・上田典男)

善光寺平南部の自然堤防と沖積地

I. 善光寺平南部の地形

善光寺平（長野盆地）南部の沖積地は、おもに北部を流れる犀川の扇状地と、南東部を流れる千曲川の氾濫原から構成される。

犀川扇状地は盆地南部でもっとも大きい面積を占めており、犀口の標高370mを扇頂として南東方向にゆるやかな円錐体の一部を形成して広がる。その勾配は4/1000ときわめて緩やかでほとんど傾斜を感じないくらいである。このため千曲川氾濫原との境ははっきりしない。

扇状地の内部では微高地と微低地が傾斜方向に放射状に配列しているが、この広い犀川扇状地表面上の遺跡は以外なほど少ない。これはこの扇状地の形成営力の強さを物語るものであろう。扇状地の全面的な開発がはじまるのは、微高地部に用水が引かれた江戸期以降である。扇状地西南部では西縁の茶臼山山地と扇右翼との間に低湿地が形成され、岡田川が中央を天井川を形成して北から東へと流れている。扇状地の南端はこの流路に沿っており、ここで石川の低湿地帯と接している。

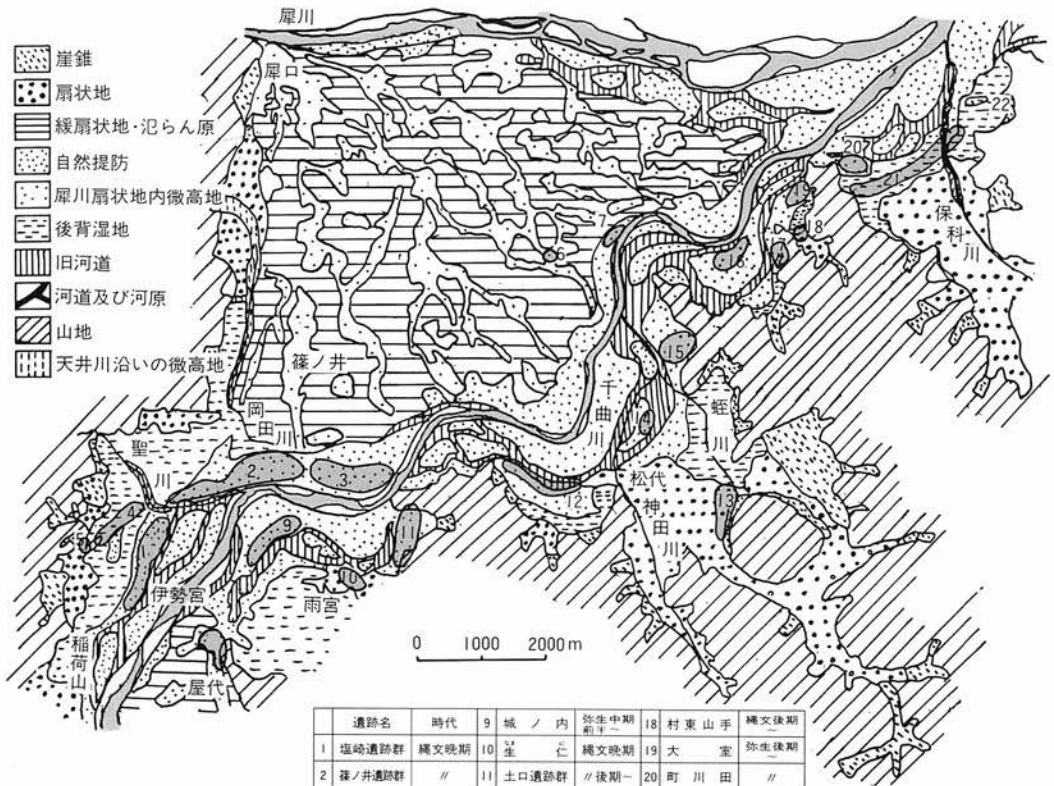
千曲川は稻荷山付近で河床勾配を1/1000とゆるめ、流路を北東にかえてメアングーしながら河東山地の山麓部を流れる。氾濫原のつくる微地形は複雑で、雨宮・清野・寺尾・牧島などの湾入部では微高地と微低地が数列並列しており、山麓に張り出した崖錐や扇状地との間に低湿地を形成する。微低地は旧千曲川の流路跡で、微高地部は自然堤防や旧河道の堆砂や中洲である。自然堤防と後背湿地の配列は上記のほか、篠ノ井塩崎地区や川田で顕著である。自然堤防の発達には篠ノ井以東では右岸の方がよいが、これは千曲川が東に押しやられているのと同様、犀川の扇状地形成営力の強さが影響している。

II. 石川、篠ノ井付近の沖積地

佐野川扇状地の末端にぶつかって方向を変えた千曲川は、左岸の稻荷山から篠ノ井横田にかけて細長い帯状の自然堤防と背後に低湿地を形成する。右岸でも屋代から雨宮にかけての滑走斜面上に、自然堤防と背後に大規模な後背湿地を形成する。

かつて千曲川が左岸の後背湿地内を乱流していたであろうことは、ボーリング結果から確かなことに思われる。石川条里遺跡の水田域では、およそ地表下12mまでは腐植物層まじりの粘土、シルト層主体で、その下部はかなり厚く砂および小礫が堆積し、20m下では完全に礫層になっている。したがって左岸の低湿地は、かつての千曲川の氾濫原が流路の南への移行にともなって凹地となり、そこに西山からの土砂と千曲川の洪水時の土砂が堆積してできたものであろう。南側をいくぶん高い自然堤防でさえぎられるため、水のたまりやすい場所となっている。

自然堤防上には縄文時代晩期末以降の遺跡が数多くあり、現在も集落域となっているが、その形成はそう古くないように思われる。篠ノ井②—1地区の自然堤防域の深掘り結果では、地表下約3.5mに灰青色の厚い粘土層が堆積しており、その表面がかなり浸食をうけて凹凸をなし、そこに厚い砂層がのる構造が確かめられている。砂層は削剝と堆積が繰り返され、1mを



遺跡名	時代	9	城ノ内	弥生中期前半	18	村東山手	縄文後期
1 塩崎遺跡群	縄文晩期	10	峯	10	大	室	弥生後期
2 篠ノ井遺跡群	//	11	土口遺跡群	//後期-	20	町川田	//
3 横田遺跡群	弥生後期	12	清野四ツ屋	弥生中期後半	21	川田桑里	//
4 石川桑里	縄文前期 弥生中期	13	屋地	縄文中期	22	春山	//
5 鶴前	縄文中期	14	松代城北	古墳	23		
6 田中沖	弥生中期後期	15	松原	弥生中期前半			
7 花立	弥生後期	16	牧島	平安			
8 栗佐遺跡群	//後期-	17	小湊	室町			

第60図 善光寺平の地形分類と遺跡分布図（地形分類図は航空写真により作成）

こす砂層が一時に削られて深い溝になるなど、はげしい堆積環境が予想できる。砂層上部からは弥生中期～後期の異物や遺構が検出されており、基盤粘土層を浸食した古い溝からは晩期の土器が出土していることから、この間の約2mの地層がちょうどそのころ、比較的短期間で形成されたことがうかがえる。今後の詳しい結果をまちたい。

この自然堤防を構成している砂には西山の篠山山系および聖山山系の砂がきわめて多く含まれる。これは平安期に厚くこの地域一帯を埋めた洪水砂についてもいえることで、自然堤防の形成や低湿地の形成には山側からの土砂の供給が深くかかわっていると考えられる。平安砂層以前には明らかな砂層の堆積がみられないことや、平安砂の堆積面に聖川下流方向から上流に向かっての葉理構造が多くみられることなどから、洪水時に千曲川の水が低湿地帯を流れて土砂を堆積したというよりは、水位上昇による千曲川の逆流と、出口を塞がれることによる滞水によって堆積がおこなわれたと考えた方が自然である。これらと、深掘り位置が自然堤防北端であることから、自然堤防の裾は、二次的には北側にも成長していたことが予想される。

III. 松代以北の沖積地

千曲川の氾濫原は幾度かの流路変更を経験している。清野から海津城跡をとりまいて金井池

を通り、牧の島の東をまいて微低地帯は旧河道で、金井池は河跡湖である。

記録によると、牧の島はかつては更級郡に属していたが、寛保2年(1742)の洪水によって流れが一変し、現在の流路の東側に位置するようになった。また洪水後、松代一帯は人工によって流路を現在の位置に移したという。松原遺跡は旧流路と蛭川の氾濫原上の遺跡である。

川田では、赤野田川と保科川の複合扇状地の末端部に低湿地が形成されている。その西側の自然堤防帯には、中洲状の自然堤防をとり囲むようにして旧河道が確認できる。発掘によってこの低湿地は弥生後期から水田耕作がおこなわれてきたことが明らかにされた。耕作開始以前の下層部には厚いピート層が確認され、上部は何層もの洪水砂層と耕作土の互層になっていた。C地区で犀川系の洪水砂も認められ、河川の合流域の複雑な堆積環境をみせている。

IV. 沖積地および自然堤防上の遺跡

石川条里遺跡では、弥生後期の水田遺構はほぼ全域で検出されるが、中期以前の遺構はほとんど検出されていない。中期にはわずかに溝と、完形の石包丁と、後期の畔の下から板材を敷きつめた畔らしき遺構が検出されただけである。地層断面でも、地層面に人為的な乱れが生ずるのは中期層以後であって、それ以前は乱れていない。これは耕作の開始が中期以降であることを物語っている。

自然堤防でも、縄文晩期の溝や土器は検出されているが、遺構・遺物がふえるのは中期以降である。今年度篠ノ井遺跡では中期の墓と、住居跡が3軒検出されている。これらのことから考えると、後背湿地および南部の自然堤防上が全面的に生産域あるいは居住域となるのは弥生中期以降、後期にかけてといえそうである。しかし、中期以降の大集落である松原遺跡隣接地での生産域はまだ確認されておらず、他地域も同様であるかどうかははっきりしない。

耕作の開始は弥生期であっても、低地の利用はもっと早い。石川条里遺跡の5区では地表下3mで縄文時代前期の住居跡が検出されているし、16区では弥生中期層下2mの粘土層中から割り材6本を含む10本の杭が発見され、現在¹⁴Cで年代測定中である。杭の上部は地表下約6mである。

同じ低湿地内であっても、表土をはいでみると時代によってかなりの凹凸がある。低湿地がすべて耕作域であると考えるのは誤りであって、人々は地形の特徴をよく読みとって利用している。たとえば、石川の7～10区にかけての微高地は古墳時代には祭祀場として利用されたし、6区の微高地は墓域として、あるいは居住域として利用された。また平安時代の同時期の畦畔のつけ方は傾斜や微地形の違いによってまったく異なっている。条里域といっても一概に条里的ではない。

微地形がいつごろどのようにできたかを明らかにすることも大事であるが、人々がどのように微地形を生かして生活してきたかを知るのもひとつのみかたであろう。平成二年度は、おもに川東の沖積地について、土地利用がどのようになされてきたかが明らかにされてくるであろう。(渡辺敏泰)

〈上信越自動車道〉

(1) ^{しももち}下茂内遺跡

所在地：佐久市大字香坂字下茂内34-内ほか

調査期間：平成元年4月1日～同年5月22日

調査面積：1,280㎡（総計28,200㎡）

遺跡の立地：香坂川に接する寄石山北西麓緩斜面

時代と時期：縄文時代草創期～近世

遺跡の特徴：縄文時代草創期の石器製作に深くかかわった遺跡，縄文時代の狩猟場

主な検出遺構

遺構 時期	竪穴 住居跡	掘立柱 建物跡	土坑	溝	石器 製作跡	遺物集 中箇所	焼土跡	そ の 他
縄文			8 (138)		30	11	3	石棺墓1 集石炉3 配石1
古墳	1					1		
平安	1(5)	2	3					
不明		3	75	16				道跡2 畝状遺構(7)

() 総数

主な出土遺物

土器：縄文時代草創期～晩期土器，弥生時代中期～後期土器，土師器，須恵器他

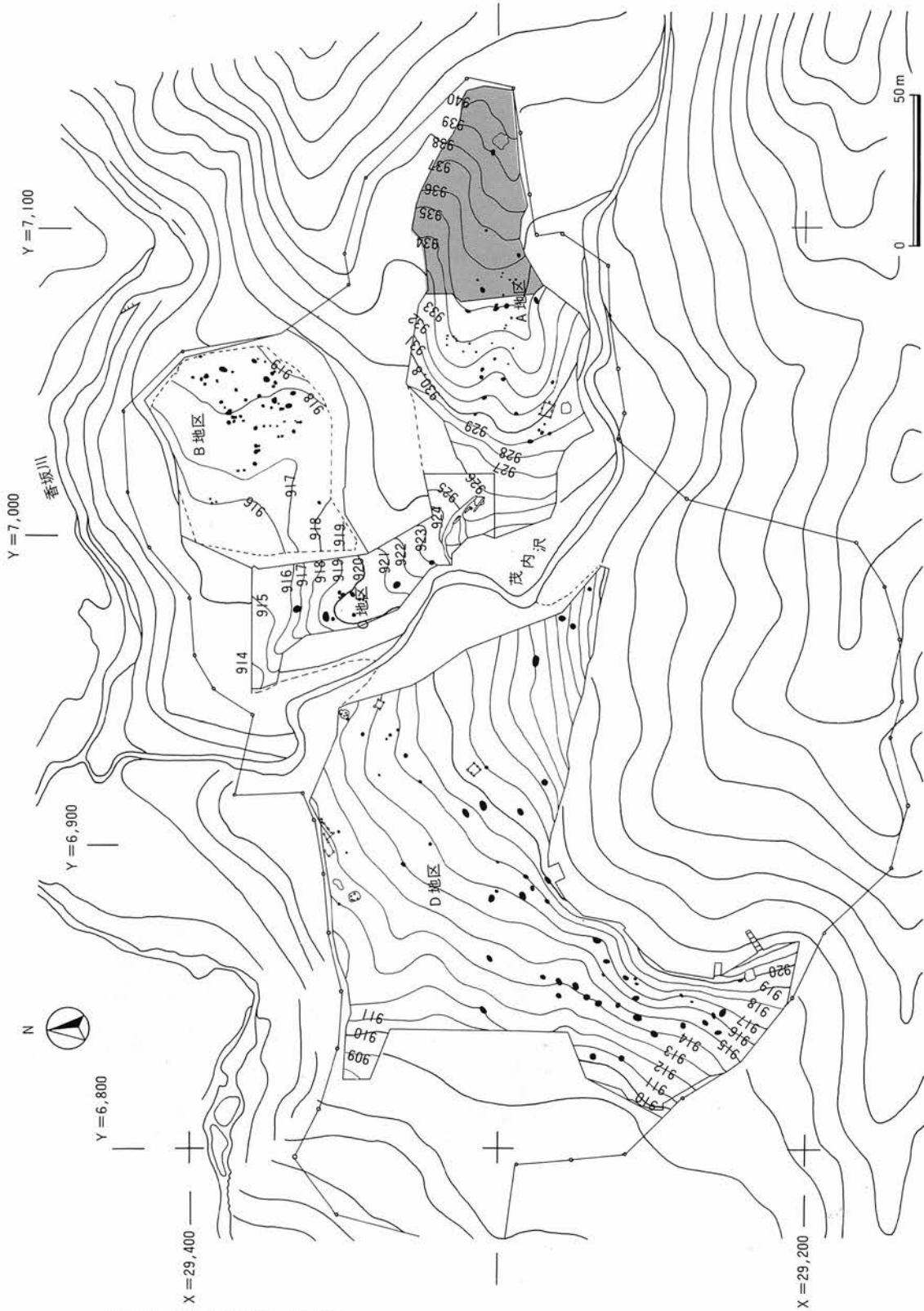
石器：槍先形尖頭器，石鏃，石匙，スクレイパー，打製石斧，磨石他

昨年度の調査で一応の終了をみたが，一部設計変更があり日本道路公団と県教育委員会との間で協議がおこなわれた。その結果，茂内沢に沿ってのびる尾根部のA地区とした東側の部分が追加契約され，本年度の4月～5月に調査をおこなった。

この部分は，かつての水田耕作がⅦ層（ローム層）にまでおよんでいる部分もみられたが，以下の遺構・遺物を検出することができた。

ⅣA層面では，水田耕作の影響が少ない調査区西側の一部で，昨年と同様に畝状の遺構を検出し，調査区の東側尾根の最頂部では，平安時代の竪穴住居跡を1軒検出した。平安時代の竪穴住居跡については，昨年調査地区も含めると28,200㎡のなかに，A地区で2軒，C地区で1軒，D地区で2軒検出され，それぞれかなりの距離をおいて点在している。この集落のありかたは，佐久平に展開する平安時代の大集落と比較した場合まったく異なったあり方を示している。

その後，Ⅶ層面では検出をおこない縄文時代の土坑（内陥し穴2），集石炉等を検出した。間のⅥ層は，縄文時代前期を中心とした遺物包含層にあたり昨年度にひきつづき好資料をえた。陥し穴については，A，B，C地区で点在しD地区でまとまって検出されている。また，縄文時代の竪穴住居跡は検出されていないが，A地区で縄文時代前期の土器が集中する地点から集石炉2，D地区で縄文時代早期末～前期初頭の土器が集中する地点に隣接して絡条体圧痕文土器および焼土をとまなう土坑1が検出されていることを考えると，狩猟場であったというほかに一時的な生活の場であったことも想定できるかもしれない。（近藤尚義）



第61図 下茂内遺跡の全体図

II 普及・研究活動

1. 現地説明会

(1) 鳥林・石川条里遺跡⑥⑦⑩区（更埴市桑原・長野市篠ノ井）

平成元年6月4日、初夏らしい晴天のもとで今年度初めての現地説明会を開催した。鳥林遺跡は篠山の南斜面に位置する集落跡である。今回は縄文時代早期の竪穴住居跡・土坑・集石などを中心に公開した。いっぽう、テントにおいては土器・石器などを展示し、調査研究員が説明にあたった。

説明会は地元の人が多かったが、長野市をはじめ佐久市からの見学者もあった。大昔にこのような山奥の地を住居として利用していたことについて驚きとともに関心を高めたようであった。見学者；88名

石川条里遺跡は、千曲川が生んだ広大な後背湿地に展開しているが、今回は⑥区の水田域と境を接する⑦⑩区の祭祀場を公開した。⑥区では平安時代の水田跡と土器・陶器などを現地で展示をし、⑥⑩区では、古墳時代の溝・大溝・土坑・井戸跡などを公開した。いっぽう、プレハブにおいて農耕具類、石・金属製品、土器などを展示した。

鳥林遺跡の説明会が終わって1時間30分後に開会式続いて説明会に入った。鳥林遺跡から続いて参加した見学者が多くセットで開催したことは好評であった。見学者；140名

(2) 川田条里C・榎田遺跡（長野市若穂）

平成元年7月16日、千曲川東岸若穂地区に広がる沖積地に位置する川田条里遺跡C地区では、江戸・鎌倉・平安の各時代の水田跡のうち江戸時代では稲株列が残る水田跡・鎌倉時代では条里にかかわるだろうと考えられる大畦、平安時代では畦を中心に公開した。

いっぽう、プレハブにおいて各時代にわたる木製品などを展示し、調査研究員が説明にあたった。

見学者；195名



第62図 現地説明会風景（石川条里7区）

千曲川東岸の自然堤防上に位置する榎田遺跡では、奈良・平安・古墳各時代の竪穴住居跡、室町時代の居館などを公開し、調査研究員が説明にあたった。いっぽう、プレハブにおいて弥生・古墳・奈良・平安各時代の土器や石製品など、室町時代の馬形木製品などを展示した。見学者；190名

開催を危ぶむほどの降雨であったが、地元の人々はもちろん須坂市方面からの見学者もあった。条里とは何かなどの熱心な質問やクラスで見学に来た小学生の熱心にメモをとる姿に救われた。

(3) 篠ノ井遺跡群（長野市塩崎）

平成元年7月30日、千曲川西岸の自然堤防上に位置する本遺跡群では、弥生時代後期から古墳時代前期の環濠集落の全貌があきらかになった時点で、ムラを囲む環濠をはじめ集落内の竪穴住居跡・井戸・貯蔵穴・焼けて建築材が散乱したままの住居跡・重なりあった住居・遺物や検出中の土坑などを公開した。いっぽう、プレハブにおいて各時代の遺物を展示し、調査研究員が説明にあたった。

晴天に恵まれ、地の利をえて地元はもちろん上水内郡・上田佐久方面・伊那市・県外からの参加もあった。見学者；250名

(4) 松原遺跡（長野市松代）

平成元年8月6日、千曲川によって形成された自然堤防上に位置する本遺跡では、平安・古墳・弥生時代後期の住居跡・掘立柱建物跡・溝・仏具鑄造遺構？などを中心に公開し、いっぽう、プレハブにおいて食器・煮炊具・貯蔵具および磬の鑄型など土製品、骨製品、炭化米などを展示した。

県考古学会の見学会をあわせて開催したため、地元の見学者はもちろん全県下から参加して、熱心な質疑がなされた。なお、大阪大学教授都出比呂志氏より御指導をうけた。

見学者；300名

(5) 向六工遺跡（東筑摩郡坂北村）

平成元年9月10日、東条川にそってできた河岸段丘上に位置する本遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡・平安時代の竪穴住居跡などを中心に公開した。いっぽう、現場プレハブにおいて土器・石器・陶器・銭貨などを展示し、調査研究員が説明にあたった。縄文本体による土器の文様づけの実験コーナーを設置して体験してもらった。

交通の便などからほとんど地元の見学者であったが、とくに小学生の見学が多かった。時代による遺構のちがいや岩殿寺と遺跡とのかかわりなど多くの質問がだされ、説明にうなづく姿に郷土の歴史にたいする関心の高さを感じた。見学者；162名

(6) 川田条里遺跡A・C地区（長野市若穂）

平成元年11月26日、2回目の現地説明会で、A地区C地区とも古墳・弥生時代の水田跡を公開した。見学者を対象に、参加者全員とまではいかなかったが「畦の検出と足跡の発掘」を実際に体験してもらったことはえがたい経験をしたとの感想もあり、よい工夫であった。

展示会は25・26日の両日、若穂農協の依頼によって農協祭とあわせて、若穂農協川田支所でおこなった。会場では、水田跡出土のエブリなど農耕具類、水路内出土の土器類、畦畔の芯材などを展示した。会場に持ち込めなかった大型のはしごなど木製品は現場プレハブに展示した。

厳寒期にもかかわらず、地元を中心に多数の見学者があった。また、見学者の質問は、周辺の文化財にまでおよびいろいろな点で効果的だった。見学者：150名

(7) 松原・村東山手・大室古墳群・小滝遺跡（長野市松代）

平成元年12月10日、2回目の松原遺跡では、中世の掘立柱建物跡・井戸跡・奈良平安時代の竪穴住居跡、弥生時代中期後半の礎床墓などを公開した。いっぽう、プレハブにおいて、各時代の土器・円面硯・石庖丁・サイコロなどを展示し、調査研究員が説明にあたった。見学者：110名

奇妙山山麓の崖錐地帯に位置する村東山手遺跡では奈良時代の竪穴住居跡・弥生時代の墓、明治大学が発掘調査をしている大室古墳群の一部である大室支群・村東単位支群では古墳3基を公開した。一方、プレハブにおいて各時代の土器・鉄製品などを展示した。見学者：60名

千曲川によって奇妙山系の山際に形成された微高地を中心とする小滝遺跡では、戦国時代を中心とした竪穴住居跡・掘立柱建物跡・墓などを公開した。いっぽう、プレハブにおいて、土器・陶磁器・石臼・五輪塔などを展示した。見学者：70名

前日のみぞれの影響があり、会場はぬかるみであったが好天に恵まれ、熱心な質疑もあり良い見学会であった。

2. 展示会

(1) 長野自動車道・上信越自動車道建設に伴う出土品展

平成2年2月18日から25日までの1週間、「信濃路を掘る」というテーマで出土品展を実施した。今回は、長野市立博物館の後援をえて、会場をはじめ備品の一切を借りることができ、時間的制約が厳しかったわりには、当センターの個性を生かした展示ができたと思われる。展示会の内容であるが、発掘調査の概要と遺物資料を中間報告のかたちで公開するといった主旨でおこない、

「ものからわかってもらう」ことを主眼においた。

各遺跡では、縄文・弥生・奈良・平安・中近世と時代の変遷がわかるように、パネル・イラストなどをうい工夫をこらした。特に、古墳時代の井戸から出土した遺物を、井戸の模型を使い立体的・視覚的に展示した篠ノ井遺跡群、土層転写を用い、その変化を示した石川条里遺跡、遺物では鳥型木製



第63図 出土品展「信濃路を掘る」

品（石川条里遺跡）、サイコロ・円面硯（松原遺跡）などが注目を集め、感嘆の声をあげる参観者の姿が多くみられた。また、歴史的追体験をとおして、歴史を身近に感じてもらうと縄文施文体験コーナーを設けたり、最後に、埋蔵文化財センターの業務の一端をパネルで紹介したりした。

参観者は小学生からお年寄りまで幅広く、特に初日は天候も幸いし、600人に迫るほどであり、期間中の入場者数は1,566人におよんだ。アンケートからは「感激した」、「地域の歴史を見直すことができた」などの感想がめだつた。この展示会が埋蔵文化財保護の重要性・地域に刻まれた過去の歴史を再認識する機会となり、テーマの主旨はほぼ達成されたといえる。

なお、本展示会を開催するにあたり、多大なご支援、ご協力をいただいた長野市立博物館に対し、感謝の意を表したい。

現地説明会・展示会の開催と情報の提供はともに県民固有の財産ともいべき埋蔵文化財を広く県民に公開して還元する大切な機会であり、このような重要な任務を担っている公開・普及の業務が当センターの体制の中で、どのように位置づけられ、どのようなはたらきを期待しているのだろうか。もう一度原点にもどって、人的配置と予算の裏付けの面から振りかえってみる余地があると考えらる。

(2) 北村遺跡出土品見学会

7月30日(日)、松塩筑調査事務所において「北村遺跡出土品見学会」を開催した。1日のみの見学会であったが、1,000名をこえる見学者が訪れ盛況であった。見学会は北村遺跡から取り上げてきた人骨のうち、クリーニング・実測が終了し、良好な埋葬姿勢をとどめる縄文時代の人骨15体を展示し、さらに人骨のク



第64図 北村遺跡の出土品見学会

リーニング作業（人骨の掘り出し）を実際におこない好評であった。あわせて、北村遺跡の発掘調査写真、出土した土器や石器、土偶、装身具などの展示とともに、報告書刊行中の松本市内関係の下神・南栗・北栗・三の宮遺跡等から出土した古代・中世の土器・陶磁器、金属製品等も時代別に展示し、埋蔵文化財に対する理解を深めていただいた。

見学会と同時に、午後1時より独協医科大学の茂原信生先生を迎え、北村遺跡の出土人骨に関連して「北村人骨から何がわかるか」と題して、形質人類学を中心とする講演会を約2時間にわたっておこない、150名をこす聴衆でにぎわった。

見学会に先立ち、報道関係者に公開したことや夏休み中であったこと、折からの「吉野ヶ里ブーム」も影響してか、地元の方々はもとより県外在住の見学者も多数訪れた。人骨の移動が困難なため当調査事務所での開催であったが、交通の便のよい会場で長期にわたる展示が可能であれば、さらに多くの方々に見学していただけたものと思われる。

3. 研究会・学習会

期 日	講 師	指 導 内 容 ほ か
元. 4. 1	飯山南高校教諭 高橋 桂	篠ノ井遺跡群の調査について
4. 20	独協医大講師 茂原 信生 外2名	北村遺跡出土人骨について
24	奈文研考古計画研究室長 松沢 亜生	下茂内遺跡出土石器について
26	佐久市教育委員会 須藤 隆 外2名	〃
5. 23	国立歴史民俗博物館教授 平川 南	漆紙文書など文字資料について
25	独協医大講師 阿部 修一	北村遺跡出土人骨について
6. 1	筑波大学教授 岩崎 卓也	石川条里遺跡の調査について
	奈文研考古室長 木下 正史 外2名	〃
5	埼玉県立本庄高校教諭 坂本 和俊 外1名	石川条里遺跡の調査について
7	奈文研埋文センター長 田中 琢	松原・川田条里遺跡の調査について
9	明治大学教授 小林 三郎	石川条里遺跡の調査について
	助手 石川日出志	〃
13	信州大学助教授 笹本 正治	石川条里遺跡の調査について
15	長野県考古学会会長 森嶋 稔	石川条里遺跡の調査について
	埋文保護委員長 林 茂樹	〃
	埋推委委員長 宮坂 光昭	〃
26	大阪大学 北條 芳隆	石川条里遺跡の調査について
7. 4	檀原考古学研究所副所長 石野 博信	石川条里・松原遺跡の調査について
	早稲田大学助手 橋本 博信	〃
6	天理大学教授 金関 恕	石川条里遺跡の調査について
	天理参考館 置田 雅昭	〃
15	信州大学助教授 斉藤 豊	石川条里遺跡等の地質について
20	長野県考古学会埋蔵保護委員長 林 茂樹	石川条里・松原遺跡の調査について
	宮崎大学助教授 藤原 宏志	石川条里・松原遺跡の水田調査について
	古環境研究所 松田 隆二	〃
30	独協医大講師 茂原 信生	北村遺跡出土人骨について
8. 6	大阪大学教授 都出比呂志	松原遺跡・石川条里遺跡の調査について
7	明治大学教授 大塚 初重	石川条里遺跡の調査について
	〃 小林 三郎	〃

18	愛知大学講師	加納 俊介	松原遺跡の調査について
	愛知県埋文センター	赤塚 次郎	〃
9. 2	国学院栃木短大	戸田 正勝	下茂内遺跡出土石器について
7	松本市立考古博物館長	神沢昌二郎 外1名	松原遺跡の調査について
18	元興寺文化財研究所	白沢 勝彦	木製品の保存について
20	古代吉備文化財センター調査課長	正岡 睦夫 外2名	川田条里遺跡の調査について
29	松本筑摩高校教諭	桐原 健	古代集落の変遷について
10. 5	広島大学	藤野 次史	下茂内遺跡出土人骨について
13	信州大学医学部	西沢 寿晃	松原遺跡等出土人骨について
24	愛知県埋文センター	石黒 立人	松原遺跡の調査について
	沼津市教育委員会	関野 哲夫	下茂内遺跡出土石器について
		池谷 信之	〃
26	榎原考古学研究所副所長	石野 博信	川田条里遺跡の調査について
27	須坂高校教諭	伊原今朝男	古代集落の変遷について
30	長野県考古学会長	森嶋 稔	小坂西遺跡の調査について
11. 2	三重大学教授	八賀 晋	石川・川田条里遺跡の水田跡の調査について
14	静岡県考古学研究所調査部次長	平野 吾郎	石川・川田条里遺跡の調査について
	同 調査研究員	山田 成洋	〃
16	独協医大講師	茂原 信生	北村遺跡出土の人骨について
17	県農事試験所部長	古川 侑夫	石川・川田条里遺跡の水田土壌について
		梅村 弘	〃
28	滋賀大学教授	小笠原好彦	古代集落の変遷について
12. 1	奈文研建造物室長	宮本長二郎	川田条里遺跡出土の建築材について
5	文化庁主任文化財調査官	河原 純之	川田条里・松原遺跡の調査について
10	大阪文化財センター理事長	坪井 清足	松原遺跡の調査について
11	センター理事	森嶋 稔	篠ノ井遺跡群ほかの調査について
	〃	神村 透	〃
12	青森県埋文センター	遠藤 正夫	川田条里遺跡の調査について
	〃	山口 義伸	〃
20	明治大学教授	戸沢 充則	北村遺跡出土人骨の保存等について
22	県遺跡指導委員会会長	田中 琢 外4名	松原遺跡等の調査について
26	佐久市教育委員会	竹原 学	下茂内遺跡出土土器について
2. 1. 24	日本考古学研究所	大淵 淳志	石川条里遺跡出土品について

2. 2	高山市教育委員会 筑波大学助手	田中 彰 山田 昌久	石川条里遺跡出土品について 石川・川田条里遺跡出土の木製品について
7	信州大学医学部	西沢 寿晃	大星尻・栗毛坂遺跡出土人骨について
9	沼津市教育委員会	松下 浩司 池谷 信之	篠ノ井遺跡群等の出土品について 〃
16	檀原考古学研究所調査部長	勝部 明生 外1名	石川条里遺跡の出土品について
22	神奈川県埋文センター主査	山本 暉久 外2名	石川・川田条里遺跡出土の木製品について
3. 5	沼津市教育委員会	石川 治夫	石川条里遺跡出土の木製品について
8	明治大学教授	大塚 初重	積石塚古墳について
9	奈文研建造物室長 奈文研考古計画研究室長 叻古代学協会 パリノ・サーヴェイ	宮本長二郎 松沢 亜生 南 博史 早田 勉	川田・石川条里遺跡出土の建築材について 下茂内遺跡出土石器について 〃 下茂内遺跡のテフラについて

4. 刊行物

- 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4－松本市内その1－総論編』
- 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書6－松本市内その3－下神遺跡』
- 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7－松本市内その4－南栗遺跡』
- 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書8－松本市内その5－北栗遺跡』
- 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書9－松本市内その6－三の宮遺跡』
- 『長野県埋蔵文化財センター年報6』（1989年度）
- 『長野県埋蔵文化財センター紀要3』（1989年度）
- 『長野県埋蔵文化財センターニュース』No.28～30

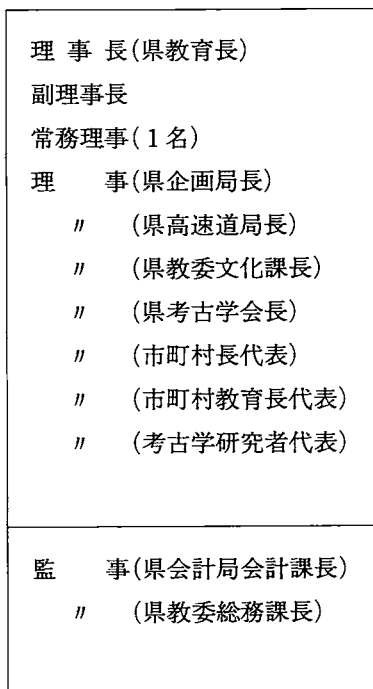
III 機構・事業の概要

1. 機構

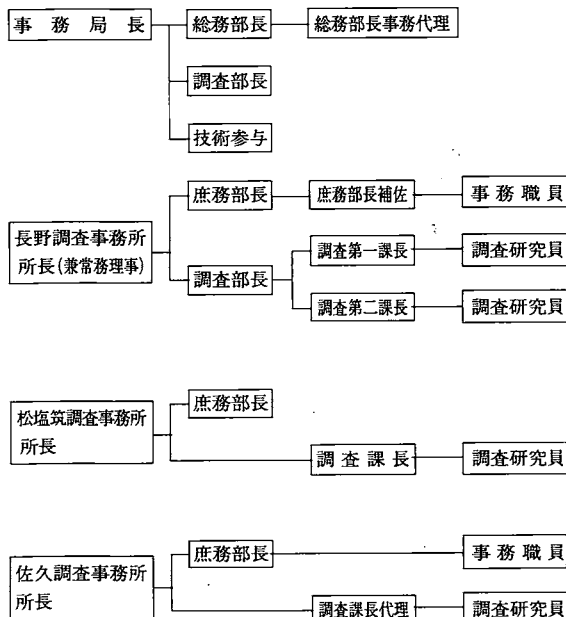
(1) 組織

(2. 3. 31現在)

○理事会



○事務局



(2) 事務所所在地

本部	長野市大字南長野字幅下692-2 長野県教育委員会事務局文化課内 長野市篠ノ井布施高田字佃963-4
松塩筑調査事務所	塩尻市大字広丘高出字西原1977
佐久調査事務所	佐久市大字安原字蛇塚1367

2. 事業

(1) 理事会及び会計監査

理事会

- 第17回理事会 平成元年5月30日 会場 長野市 篠ノ井農協会館
 - 第1号議案 昭和63年度事業報告書について
 - 第2号議案 昭和63年度決算報告書について

○第18回理事会 平成元年3月29日 会場 長野市 山王共済会館

第1号議案 平成元年度事業計画書(案)について

第2号議案 平成元年度収支予算書(案)について

第3号議案 昭和63年度収支補正予算書(案)について

会計監査

平成元年5月7日実施 昭和63年度事業報告書及び収支決算書について

(2) 調査事業

長野自動車道及び上信越自動車道に係る埋蔵文化財発掘調査—長野県教育委員会からの委託

ア 調査遺跡及び面積

長野自動車道関係 坂北村・更埴市・長野市地域内9遺跡 77,750m²

上信越自動車道関係 佐久市・長野市地域内9遺跡 85,200m²

イ 整理事業

長野自動車道関係 松本市地域内4遺跡の報告書作成および明科町地域内1遺跡の整理事業

上信越自動車道関係 佐久市地域23遺跡, 長野市地域7遺跡の整理事業

(3) 事業費

長野自動車道関係 727,761千円

上信越自動車道関係 928,278千円

(4) 普及活動(60~63ページ参照)

(5) 職員研修

ア 講師招へい及び来所による指導・講習会等(64~66ページ参照)

イ. 奈良国立文化財研究所関係

期 間	日 数	課 程	参 加 者
元. 5. 9~5. 17	9	土師器・須恵器調査	寺 島 俊 郎
12. 7~12. 21	15	埋蔵文化財情報	川 崎 保
2. 1. 10~1. 23	14	縄文土器調査	綿 田 弘 美
1. 30~2. 2	4	城館遺跡調査	河 西 克 造
2. 14~2. 23	10	弥生土器調査	白 居 直 之
”	”	”	青 木 一 男
3. 6~3. 23	18	生物環境課程	広 瀬 昭 広
”	”	”	興 水 太 伸

ウ. 海外研修

期 日	内 容	参加者
2. 2. 26～ 3. 6	我国古代文化の源流となった中国の古代文化遺跡の研究 ・万里の長城, 明の十三陵, 故宮, 兵馬俑坑, 秦始皇帝陵, 鐘 樓, 大雁塔など中国の歴史を象徴する史跡 ・中国歴史博物館の原始から清の時代に至る展示資料	白田 武正 三上 徹也 大竹 憲昭 小平 和夫

エ. その他の学会関係研究会・研修会

期 日	内 容
元. 4. 15～16	長野県旧石器文化研究交流会 (3名)
4. 23	佐久地方遺跡発掘調査報告会, 下茂内遺跡発表 (1名)
5. 14	長野県考古学会総会, 石川条里遺跡及び下茂内遺跡発表 (2名)
5. 28	日本考古学協会総会, 北村遺跡発表 (1名)
8. 6	長野県考古学会夏期講習会発表 (1名)
10. 21～22	東日本の水田跡を考える会 (仙台市) (2名)
2. 1. 13～14	埋蔵文化財研究会「中世末から近世のまち・むらと都市」(大阪市) (3名)
2. 17～19	斎宮歴史博物館「シンポジウム縁釉陶器の生産と消費」(三重県明和町) (4名)
2. 27	奈良国立文化財研究所「全国遺跡データベース研究会」(奈良市) (1名)

オ. 県外埋蔵文化財施設・遺跡等視察及び資料調査

期 日	視 察 ・ 調 査 地	参加者
2. 1. 29～31	展示施設及び木製品の保存処理施設等の調査 (三重・奈良・広島)	3名
この他, 他県埋文センター, 博物館, 研究施設, 調査現場の視察・資料調査を行った。 延べ56ヶ所 34名		

カ. 全埋文協などへの参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
元. 5. 12	埋文協関東・中部ブロック会議	大宮市	塚原隆明 笹沢浩 松本忠巳
6. 8～9	埋文協総会	伊豆長岡市	半田順計 柳沢洋良
8. 28～29	関越自動車道関係群馬長野連絡協議会	伊香保町	伊藤万寿雄 畑 幹 雄 笹 沢 浩 寺 島 俊 郎
9. 7～8	埋文協連絡協議会研修会	松山市	永田伸男
9. 12～13	関東甲信越静埋文行政担当者会議	伊香保町	土屋 積
10. 20	埋文協関東・中部ブロック会議	千葉市	伊藤万寿雄 白田武正 佐藤今雄
10. 19～20	関越自動車道関係4県連絡会議	浦和市	半田順計 畑 幹 雄 宮 下 健 司 寺 島 俊 郎

キ. 長野県教育センター・産業教育センター研修

期 日	学校別	分 野	講 座 名	参 加 者
教育センター (※印 企画研修・△印 公開講座)				
元. 5. 16 5. 25~26	高	社 会	※豊かな心が育つ教育 社会科教育基礎	宮脇 正実 小林 清人 入沢 昌基 稲場 隆 下島 浩伸
6. 28~29	中	社 会	中学校社会科教育基礎	小平 恵一
8. 2~4	小中高	社 会	地域と教材開発	下島 章裕
9. 26~27	中高	理 科	人間と自然	新海 節生
10. 2~4	小中	技 術	情報基礎指導 I	青木 一男
11. 21~22	小中	美 術	地域素材を生かす	山崎 光顕
12. 5			※生活科とは	小林 秀行
2. 1. 11			※明日を考える	山崎 光美 宮脇 正美
1. 23			※これからの道徳教育	山崎 光顕
産業教育センター				
元. 6. 12~14		情報処理	パソコン入門(2)	岡崎 秀雄
{ 9. 4~6		"	BASICプログラミング基礎	吉沢 信幸
10. 16~18		"		近藤 尚義
2. 1. 10~12		"	パソコン入門(4)	青木 一男
1. 22~24		"	パソコン入門(5)	越 修一

ク. 姉妹校制度研修

期 日	訪 問 学 校	研 修 内 容	参 加 者
元. 2. 19	篠ノ井西小学校	授業参観・講話	木内 英一 山崎 光顕 越 修一 宮脇 正実 斎藤 武
2. 19	篠ノ井西中学校	"	駒津 武茂 山崎 博也
2. 28	更級農業高校	"	高田 実 武居 公明 下島 浩伸 稲場 隆 入沢 昌基

ケ. 県内市町村及び関係機関への協力・指導等

期 日	市 町 村 等	協 力 ・ 指 導 内 容 等
平成元年4月 } 平成2年3月	・真田町ほか5市1町1村 ・長野県史刊行会ほか1ヶ所 ・長野県文化財保護協会長野大学ほか7ヶ所	・市町村教委発掘、整理、報告書づくり、展示方法等 ・県史および市町村誌編集 ・考古学講座講演

平成元年度役員および職員

理 事 会

理 事 会	樋口 太郎 (県教育長)	
副 理 事 会	伊藤万寿雄	
常 務 理 事	塚原 隆明	
理 事	山極 達郎 (県企画局長)	根岸伝治郎 (県高速道局長)
	内田 雄治 (県教委文化課長)	
	宮坂 博敏 (更埴市長)	森嶋 稔 (県考古学会長)
	奥村 秀雄 (長野市教育長)	神村 透 (考古学研究者)
監 事	藤沢 亮三 (県会計局会計課長)	島田 勝治 (県教委総務課長)

事 務 局

局長兼総務部長	半田 順計
総務部長事務代理	永田 伸男
主 任	柳沢 洋良 (兼)
調 査 部 長	笹沢 浩 (兼)
技 術 参 与	佐藤 今雄

調査事務所

	長野調査事務所	松塩筑調査事務所	佐久調査事務所
所 長	塚原隆明 (兼)	堀内 計人	畑 幹雄
庶 務 部 長	半田順計 (兼)	" (兼)	" (兼)
庶務部長補佐	松本忠巳		
事 務 職 員	青島 重子 永田伸男(兼) 柳沢 洋良		関 次郎
調 査 部 長	笹沢 浩		
調 査 課 長	白田 武正	青沼 博之	寺島 俊郎(代理)
調 査 研 究 員	宮下健司 (総括)	小平 和夫 石上 周蔵 望月 映 平林 彰 野村 一寿	興水 太仲 小林 秀行 近藤 尚義 新海 節生 百瀬 忠幸 宇賀神誠司 岡村 秀雄
	厚利 哲治 池田 長治 越川 英一 木内 芳明 平林 信夫 伴 信夫 山崎 博也 渡辺 敏泰 吉沢 信幸 原 明芳 白居 直之 上田 典男 小平 惠一 三上 徹也 西山 克己 伊藤 友久 市川 隆之 下島 章裕 内山 美彦 中平 智昭 下島 浩伸 武居 公明 鶴田 典昭 町田 勝則 中沢 道彦		
	久保直隆 福島 厚利 駒津武茂 池田 哲治 三石俊司 越川 長治 飯島明孝 木内 英一 岡沢康夫 平林 芳明 斎藤 武 伴 信夫 山崎 光顕 山崎 博也 田中 正 渡辺 敏泰 越 修一 吉沢 信幸 中村 敏生 原 明芳 大竹 憲昭 白居 直之 宮脇 正実 上田 典男 青木 一男 小平 惠一 土屋 積 三上 徹也 寺内 隆夫 西山 克己 綿田 弘実 伊藤 友久 高田 実 市川 隆之 河西 克造 下島 章裕 斎藤 伸介 内山 美彦 黒岩 隆 中平 智昭 小林 清人 下島 浩伸 入沢 昌基 武居 公明 稻場 隆 鶴田 典昭 広瀬 昭広 町田 勝則 川崎 保彦 中沢 道彦 大久保邦彦		

長野県埋蔵文化財センター年報 6 1989

発行日 平成2年3月31日

編集発行 財団法人長野県埋蔵文化財センター

〒388 長野市篠ノ井布施高田字佃963の4

TEL 0262-93-5926

印刷 信毎書籍印刷株式会社

長野市西和田470

TEL 0262-43-2105